

松井田町文化財調査報告書第6集

国衙遺跡群Ⅱ

—— 町道国衙・朝日線改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

1 9 9 2

群馬県松井田町教育委員会

松井田町文化財調査報告書第6集

国衙遺跡群Ⅱ

—— 町道国衙・朝日線改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

1 9 9 2

群馬県松井田町教育委員会

松井町文化財調査報告書第6集 「国衙遺跡群Ⅱ」 正誤表

頁	行	誤	正
24	23	長径経8cm	長径約8cm
43	左下	12住：3、9	12住：3、4
51	19	大字国衛と	大字国衙と
52	19	図44No. 6	図43No. 6



6トレンチ3号住居跡出土遺物

序

松井田町は群馬県最西部に位置する峠の町と言えます。碓氷峠の頂に端を發す碓氷川は幾つもの流れを集めて川辺を潤しながら安中市、高崎市へと続き、また、旧中山道沿いでも峠の麓、坂本から松井田宿を経て安中に至るまでの街道筋が、今なお人々の行き交う舞台として栄えております。豊かな自然と古くより培われてきた歴史の中で、私共が今出来るのはこのような遺産を正しく伝えてゆくことであると考えます。

このたび、町道改良工事に先立って当該地域の埋蔵文化財発掘調査を実施いたしましたところ、縄文時代から平安時代までの遺構遺物が発見されました。従来より遺物は散見されており、近年、森浦・朝日地区の調査により遺跡の存在が明らかになりましたが、今回の成果はその広がりを示すとともに弥生文化の存在を立証する貴重なものと言えます。これらの資料は地域の歴史解明の手がかりとして、また、文化財の理解を深めるものとして役立ててゆきたいと考えております。

最後になりましたが、現地調査から報告書刊行にいたるまで、ご協力、ご指導を頂きました関係者の皆様や機関に対しお礼を申し上げ、序と致します。

平成4年3月







松井田町教育委員会

教育長 宮 下 初太郎

例 言

- 1 本書は町道国衙朝日線改良工事に伴い調査された埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡は群馬県碓氷郡松井田町大字国衙字朝日40他に所在する。
- 3 調査は発掘調査を水澤祝彦（松井田町社会教育課社会教育主事）が、整理作業を水澤と田口修（松井田町社会教育課主事）が担当となって行なった。
- 4 調査期間は発掘調査 昭和62年3月9日～昭和63年3月31日
整理作業 平成元年4月1日～平成4年3月31日（断続的）である。
- 5 整理作業では廣瀬君江、原田和美、浦野昇平がこれに従事した。
- 6 本書の執筆、編集は水澤と田口が分担した。また、附編「国衙と布目瓦」として上原富次氏より玉稿を賜った。
- 7 石質の鑑定は小林二三雄氏にご協力を頂いた。
- 8 調査及び報告書作成にあたり、次の関係各機関・諸氏より御教示、御協力を頂いた。記して感謝の意を表す次第である。（敬称略）
群馬県教育委員会文化財保課、松井田町役場建設課、国衙各区、美山土木舗装株式会社、上原富次、大工原豊、小林二三雄、佐藤義一、白石泰之、松坂政敏、山田幸則、綿田弘実
- 9 発掘調査参加者は次のとおり。（敬称略）
今井誠一 内田力男 折茂寿典 神戸数子 神戸直子 神戸康信 小坂橋満
小林哲也 佐藤今朝吉 武田雅也 土屋道江 中里敏雄 中島寛之 半田紀彦
廣瀬君江 藤巻勝司 前村小夜子 俣田浩美

凡 例

- 1 遺構図その他の挿図中の方位記号は座標北を示す。
- 2 遺構図の縮尺は1：20、1：40、1：80とし各図に記した。
- 3 遺構断面図の基準線は海拔標高である。
- 4 遺構図に使用したスクリーンパターンは下記のとおりである。
 焼土  A軽石純層  B軽石純層  繊維質炭化物
- 5 遺構図の破線は推定復元を表す。
- 6 遺物図の縮尺は1：3、1：4、1：6とし各図に記した。
- 7 遺物図の断面外側のH印はヨコナデの範囲を示す。
- 8 遺物図に使用したスクリーンパターンは下記のとおりである。
 灰釉陶器施釉部  石器磨耗部
- 9 遺物観察表中、寸法欄の（ ）は推定値を示し、推定不可能の部位は記載していない。
- 10 遺物観察表の法量欄「底径」では台部のつく器種は便宜上台部径の数値を記載した。
- 11 本文と写真図版の遺物番号は一致する。

目 次

序

例 言 凡 例

第1章 発掘調査の経過と遺跡の環境

I 発掘調査の経過	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の位置と環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
3 基本層序	6

第2章 検出された遺構と遺物

I 3トレンチ	7
II 3・4トレンチ	10
III 4・5トレンチ	11
IV 6トレンチ	13
1 縄文時代	13
2 弥生時代	28
3 古墳時代	34
4 平安時代	41
5 その他	47

第3章 まとめ

(附 編) 国衙と布目瓦 51

抄 録

写真図版

図版目次

表目次

図1	周辺の遺跡分布	4
図2	調査区域配置図	5
図3	基本層序	6
図4	1号・2号・3号住居跡実測図	7
図5	2号・3号住居跡出土遺物	8
図6	3・4トレンチ出土遺物	10
図7	4トレンチ出土遺物	11
図8	5トレンチ出土遺物	11
図9	6トレンチ全体図	13
図10	石組状遺構実測図と出土遺物	14
図11	伏襲部実測図	15
図12	伏襲部出土遺物	15
図13	埋襲1出土状況と遺物	16
図14	埋襲2出土状況と遺物	16
図15	第1群土器拓影図	18
図16	第2群土器拓影図(1)	19
図17	第2群土器拓影図(2)	20
図18	第3群土器拓影図	21
図19	第4群土器拓影図	22
図20	第5群土器拓影図	23
図21	石器(1)	25
図22	石器(2)	26
図23	10号・15号住居跡実測図	28
図24	10号・15号住居跡出土遺物	29
図25	8号住居跡実測図	31
図26	8号住居跡出土遺物	32
図27	遺構外出土遺物	33
図28	3号住居跡実測図	34
図29	3号住居跡出土遺物	35
図30	2号住居跡実測図	37
図31	2号住居跡出土遺物	37
図32	6号住居跡実測図	38
図33	6号住居跡出土遺物	39
図34	7号住居跡実測図	39
図35	遺構外出土遺物	40
図36	11号住居跡実測図	41
図37	12号住居跡実測図	41
図38	13号住居跡実測図	42
図39	14号住居跡実測図	42
図40	11号・12号・13号・14号住居跡出土遺物	43
図41	畝状遺構1・2実測図	45
図42	畝状遺構出土遺物	45
図43	遺構外出土遺物	46
図44	不整形土坑群実測図(1)	47・48
図45	不整形土坑群実測図(2)	47・48

表1	周辺遺跡の概要	3
表2	2号・3号住居跡出土遺物観察表	9
表3	3・4トレンチ出土遺物観察表	10
表4	4トレンチ出土遺物観察表	12
表5	5トレンチ出土遺物観察表	12
表6	6トレンチ出土石器観察表	27
表7	10号・15号住居跡出土遺物観察表	30
表8	8号住居跡出土遺物観察表	33
表9	3号住居跡出土遺物観察表	36
表10	2号住居跡出土遺物観察表	38
表11	6号住居跡出土遺物観察表	39
表12	11号・12号・13号・14号住居跡出土遺物観察表	44
表13	遺構外出土遺物観察表	46

写真図版目次

図版1	3・4トレンチ、6トレンチ調査前
図版2	3トレンチ2号住居跡と出土遺物
図版3	3トレンチ3号住居跡と出土遺物
図版4	4・5トレンチ遺構外出土遺物
図版5	6トレンチ石組状遺構、伏襲部
図版6	6トレンチ埋襲1、埋襲2、第1群土器(1)
図版7	6トレンチ第1群土器(2)、第2群土器(1)
図版8	6トレンチ第2群土器(2)、第3群土器
図版9	6トレンチ第4群土器
図版10	6トレンチ遺構外出土石器
図版11	6トレンチ10号住居跡
図版12	6トレンチ10号住居跡と出土遺物
図版13	6トレンチ15号住居跡と出土遺物
図版14	6トレンチ8号住居跡
図版15	6トレンチ8号住居跡出土遺物
図版16	6トレンチ3号・11号・13号住居跡
図版17	6トレンチ3号・11号・13号住居跡
図版18	6トレンチ3号住居跡出土遺物
図版19	6トレンチ2号住居跡と出土遺物
図版20	6トレンチ6号・12号住居跡
図版21	6トレンチ6号住居跡出土遺物、7号住居跡
図版22	6トレンチ11号・12号・13号住居跡出土遺物
図版23	6トレンチ畝状遺構1・2と出土遺物
図版24	6トレンチ遺構外出土遺物

第1章 発掘調査の経過と遺跡の環境

I 発掘調査の経過

1 調査に至る経過

近年、上信越自動車道、上越新幹線、土地改良事業等の各種開発が県内各地で展開され、これらに伴う事前の埋蔵文化財発掘調査が毎年多く実施されている。このような状況のもとで松井田町においても調査体制を整えつつ多くの発掘調査を手がけている。

松井田町（建設課）より、昭和60年度の町道国衙・朝日線改良工事の計画が提示されたのを受けて、該当地の遺跡の状況について表面調査及び周知の遺跡の分布状況を総合して調査した。その結果、予定地域内は遺跡地として濃密な遺物の分布を示し、古墳群との関連についても重要な位置にあること、更に官衙に関係した全国的にも珍しい「国衙」の地名の存在と、「東山道」に関係した地域と考えられていることから、その保護対策について原因者である町の担当課の建設課と教育委員会との間で協議をおこなった。この結果、工事に先立ち事前の埋蔵文化財発掘調査を実施することとなった。

2 調査の方法と経過

調査は、はじめに町道部分の予定区域内の中心にそって通しで重機によるトレンチ掘削の試掘を行うこととした。しかし、該当する道路は生活道としての役割を果たしており、調査期間中全面にわたって通行を止めることは困難であると判断されたために、東側から順次トレンチ掘削と埋め戻しを進めていくこととした。

3 トレンチにおいて住居が検出され、遺構の精査と記録作業を行い、埋め戻しとともに4・5トレンチの掘削に入った。ここでは多くの遺物が出土したが、黒色土中で遺構が存在しており確認しにくい状況にあった。しかし、遺構の存在については確実であると考えられたが、生活道確保の問題と工期の制約上、遺構についての明確な判断を待たずに埋め戻しに入った。

6 トレンチについては調査区をはさんで東西にそれぞれ道路があり、町道の一定期間の通行を止めることが可能であった。試掘の結果に基づいて遺構確認部分については更に拡張して表土除去を行い、遺構の広がりを確認した。ここでは工事の杭の方向を基準として(X-Y)のグリッドを設定して調査の便をはかった。西の調査区域外に(O-O)を設定し、東に向けて1m単位で数を増し、北に向けても同じとした。また、6 トレンチの調査にあたっては、土地を借用し現場事務所及び掘削による排土の一時集積場として使用し、調査の効率化につとめた。

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

本遺跡の所在する松井田町は群馬県西部に位置し、北は倉沢村、東は安中市、南東は妙義町、南西は下仁田町、そして西は碓氷峠をはさんで長野県北佐久郡軽井沢町と接している。本町西部はその大半が山間地であるが、その北東部に標高約 739m の高戸谷山があり、ここより派生する細野丘陵が南東へ延びている。丘陵両側には南に九十九川、北に増田川が流下し、これらが合流し九十九川一本となる手前が丘陵の端部であり本遺跡の立地する国衙地区である。遺跡は国衙地内の南辺、南方150m に流下する九十九川の左岸段丘上に立地する。標高は調査区西側で251m、東側では248m を計る平坦に近い緩やかな傾斜をなしており、南方への僅かな傾斜をもっている。

現在は桑園を主に耕地として利用されている本地域は、折からの農業後継者不足とともに日照条件や地形、河川に近いことなどから開発においての良好な条件を揃えている。近年、町では町営住宅の建設を本地域で行なったが、耕作の便とともに県道から住宅へのアクセスの意をもっているのが本調査の原因となった町道の建設であり、沿線周辺は開発の促進が予想される。

2 歴史的環境

国衙地区周辺は、官衙に関連する「国衙」という地名ゆえ従来より注目されてきた。また、古代東山道の推定ルートとされているのもこのことと無関係ではない。さらに、東方の小日向地区における小日向古墳群の存在は当地の古代社会を復元するうえでのポイントにもなり得る。しかしながら、国衙周辺における発掘調査は昭和59年、昭和60年に行なわれた国衙森浦・朝日遺跡のみで、両遺跡は実質一地域であるために国衙地区のごく一部にすぎない。また、縄文時代から平安時代に至るまでの遺物散布が確認されているが、これも系統だった分布調査によるものではなく、先に述べたように開発の予測される地域ゆえに早急な対応が望まれるところである。図1及び表1に周辺遺跡の状況を示すが、本遺跡に近接した地域では下増田天神原より町内唯一検出されている三角壻形土製品が特筆される。また森浦・朝日遺跡は該地の遺跡の広がりを示すとともに近世の寺院跡が確認されている。弥生時代の遺物は中期後半及び後期のものが九十九川流域に散布することが知られているが詳細は不明であり、本遺跡での検出例とともに今後の資料の集積に期するところが大きい。

<参考文献>

- ・『松井田町の文化財（改訂版）—歴史散歩』松井田町教育委員会 1986
- ・『松井田町誌』松井田町誌編さん委員会 1985
- ・『群馬県立博物館研究報告第14集 群馬県地域における弥生時代資料の集成Ⅰ』群馬県立博物館 1978
- ・新井順二、小野和之「碓氷川地域における弥生式土器の様相」（『群馬考古通信11』）群馬県考古学談話会 1985
- ・『教材群馬の文化財1—原始・古代編—』群馬県教育委員会 1980

表1 周辺遺跡の概要

No	遺 跡 名	概 要
1	(高梨子們坂)	弥生時代後期樽式土器の散布が確認されている。
2	(下増田天神原)	縄文時代中期から後期の土器、及び土師器、須恵器が散布。耕作時に縄文時代三角罫形土製品が出土している。
3	(高梨子中貝戸)	弥生～平安時代の土師器、須恵器の濃密な分布が見られる。
4	(高梨子三次郎)	縄文～土師器、須恵器の散布が確認されている。
5	松井田城	安中氏、武田氏を経て北条氏の重臣大道寺駿守政繁により現在の城が形成された。天正18年、(1590)前田利家を総大将とする北国勢により落城。昭和60年度林道開設計画により事前発掘調査が行なわれ、青磁、古瀬戸、刀子、石臼等が出土した。
6	国衛森浦朝日遺跡	縄文時代後期柄鏡形敷石住居、山寄式円墳、江戸時代末期の寺院跡等が確認されており、国衛遺跡群として包括される。
7	国衛遺跡群	縄文時代から近世にかけて、国衛～下増田にまたがって広範な散布、及び遺跡が確認されている。
8	小日向古墳群	古墳時代末期の小円墳が密集しており、一部前方後円墳も存在する。
9	小日向城	松井田城の東北の出城として武田氏時代に築かれたものと思われる。
10	愛宕山遺跡	奈良～平安時代の住居が検出され、木工用具等、多種の用具類とともに万年通宝が出土し、土器編年の手掛りとなっている。
11～13	松井田古墳群	西より松井田5号・3号・2号墳で末期の小円墳である。11・13は石室部分が少々残存するのみで12は石室が土中に残存。
14～17	西横野古墳群	西より西横野5号・20号・21号・6号墳。14～16は石室の一部が残存するのみ、17は宅地内の植込みとして保存されている。
18	大王寺城	中世の方形館址と思われ、上原兵庫介の城と伝えられるが定かではない。
19	(二軒在家別所)	縄文時代中期を中心に濃密な遺物の散布が確認されている。
20	二軒在家二本杉遺跡	縄文時代後期柄鏡形敷石住居及び平安時代住居が検出されている。
21	八城二本杉東遺跡	縄文時代前期から中期の住居及び平安時代の住居が検出されている。
22	東山道	本町に於ける峠越えルートは碓氷峠説と入山峠説があるが、平地部分では概ね見解の一致をみている。

- ・遺跡名で () のものは表面採取による確認地点である。
- ・参考文献 「松井田工業団地遺跡」 松井田町教育委員会、群馬県企業局 1990
「人見北原遺跡」 松井田町教育委員会 1990
「八城赤羽根遺跡」 松井田町教育委員会 1991
「五料山岸遺跡」 松井田町教育委員会 1991
「松井田町誌」 松井田町誌編さん室 1985
「歴史の道調査報告書一東山道一」 群馬県教育委員会 1983

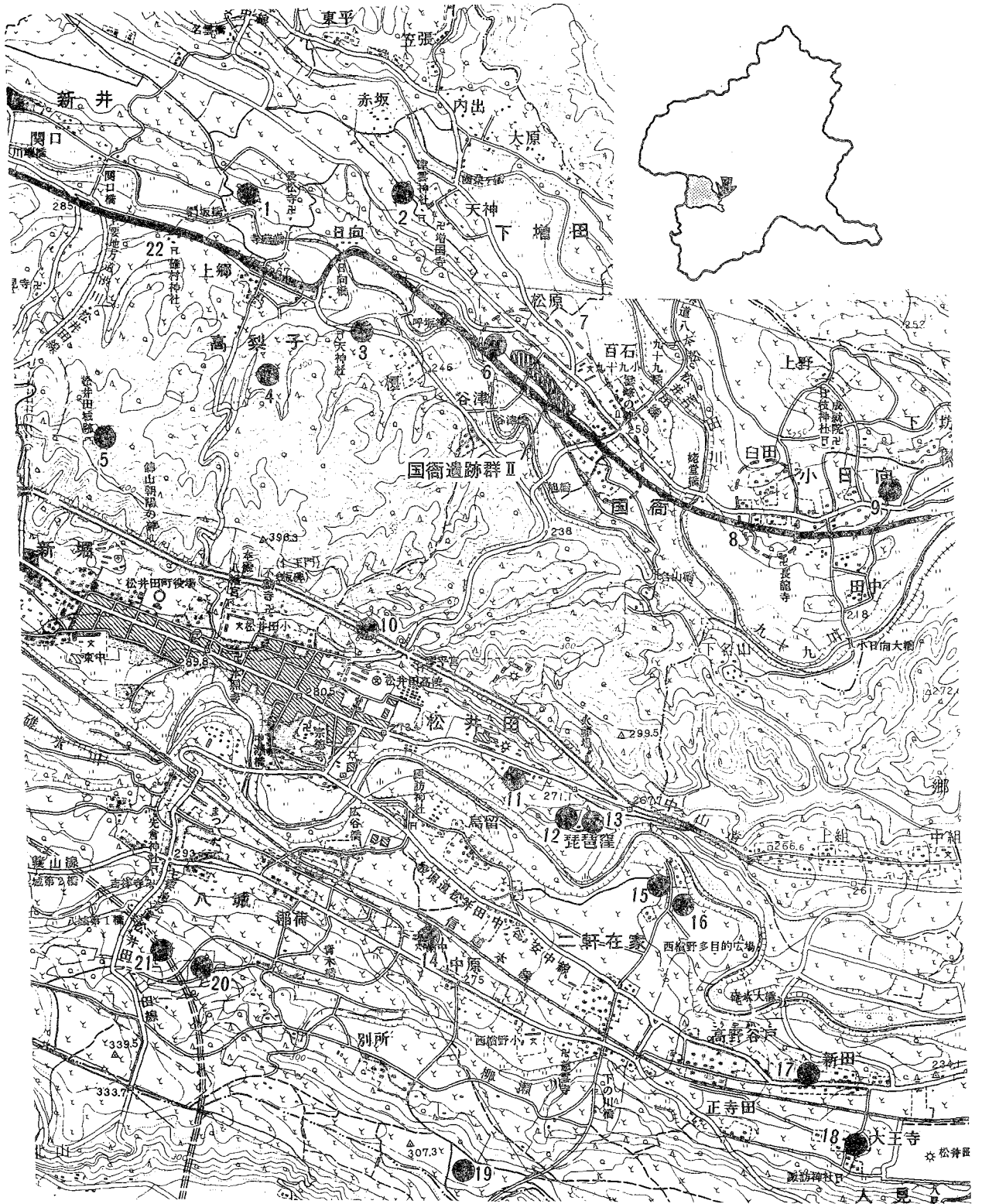


図1 周辺の遺跡分布 (1:25,000)



図2 調査区域 (1:2,500)

3 基本層序

本遺跡の基本層序を図3に示す。示標テフラとされる浅間A軽石及び浅間B軽石が確認されているがその在り方に普遍性はなく、A軽石は地表付近で耕作により除去または集積される場合が多く自然層の純層が確認出来るのは部分的である。また、B軽石は平均して地表下約80cmで確認されるが、A軽石と同様に上部もしくは全体が除去されるものの、概ね各トレンチで残存した。耕地として利用されてきた本地域は、B軽石純層及びA軽石純層の直上に同軽石が多量に混在する黒色土層となっており、これはB軽石降下以降、さほど間を置かずに耕作がなされたことを示すと思われる。また、B軽石直下に検出された畝状遺構はB軽石降下以前より耕地であったことを如実に示している。

- 1層 現耕作土。浅間A軽石を多量に含む黒色土でしまりは弱い。本遺跡の全体で確認されている。
- 2層 浅間A軽石純層（A_s-A、1783年降下とされる）。灰白色を呈す。本遺跡では6トレンチの7号住居跡付近で確認されるが、他では除去または攪乱のために検出されない。
- 3層 浅間B軽石を含む黒色土。40～60cm程堆積しており、全域に確認される。本層は軽石の量やしまり具合、色調等より分層が可能だが基本的にはB軽石を含むしまりの弱い黒色土として包括出来よう。
- 4層 浅間B軽石純層（A_s-B、1108年以降とされる）。灰褐色を呈し、粒子はA軽石よりも細かい。ほぼ全域で確認出来たがその殆どは厚さ10～15cm程のブロック状の層をなし、中～上位は除去及び攪乱を受けている。
- 5層 軽石微粒を含む黒色土。ほぼ全域にわたり確認されているが、軽石の同定はしていない。軽石の量はさほど多くはなく、よくしまっている。
- 6層 軽石微粒及びローム粒を含む黒色土。よくしまっている。本層と7層は検出遺構の主たる覆土である。
- 7層 ローム粒及びロームブロックを含む暗褐色土。よくしまり少々粘性をもつ。
- 8層 黄褐色ローム層。主たる遺構地山面である。

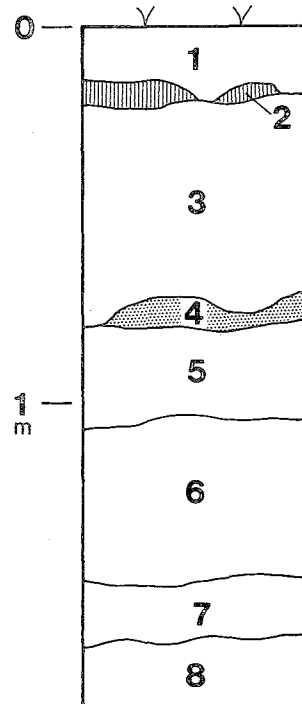


図3 基本層序柱状図

第2章 検出された遺構と遺物

I 3 トレンチ

概要

本遺跡地東側に位置する短いトレンチである。住居跡としたものは3軒、土坑1基を確認した。トレンチ覆土からは縄文片、土師、須恵片が若干出土しているが図化し得るものではなく、これは1～5トレンチに共通する。以下、住居跡ごとに記すが、1号住居跡としたものは検出された掘り込みも僅かで遺物もみられなかったため割合する。以下、セクション側を東として概観する。

<2号住居跡>

主軸方位 不明。

形状 西壁と北・南壁が僅かに確認されるのみで他は調査区域外である。隅丸と言うよりは角ばったコーナーで壁も比較的直線的と言える。

規模 西壁際で南北 2.8m 強、壁高55cmを計る。

重複 なし。

カマド 不明。

覆土 1層を確認した。

土坑 検出されない。

遺物 南西コーナーよりこも石状の礫が10個まとまって出土した。

備考 土層観察では黒色土中での掘り込みが確認でき、床面においても黒色土を地山としている。住居内覆土の分層は、明確には確認できなかった。

<3号住居跡>

主軸方位 不明。2号住居跡の壁と平行する形で構築されている。

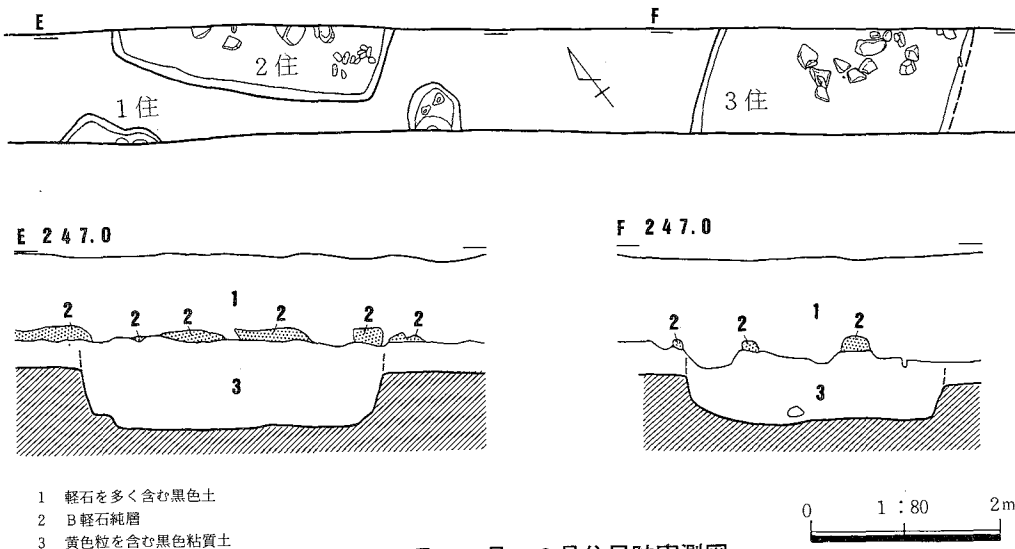


図4 1号・2号・3号住居跡実測図

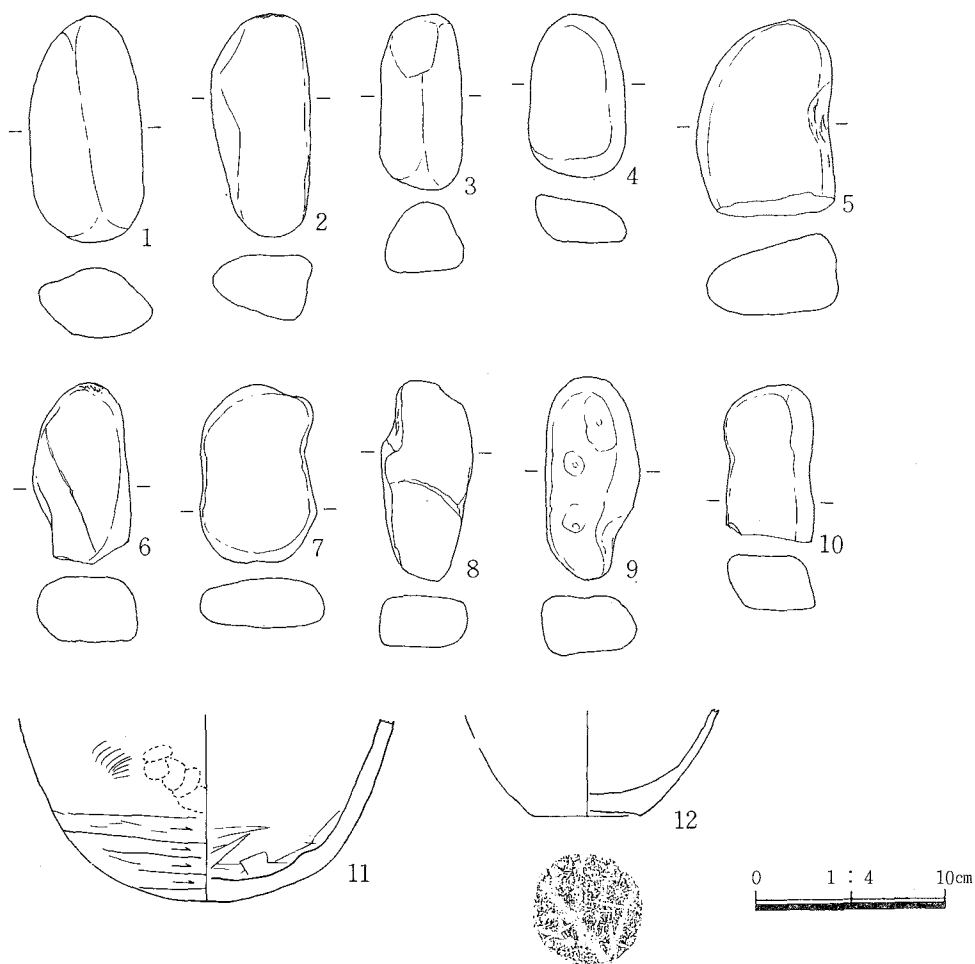


図5 2号・3号住居跡出土遺物

- 形 状 不明。
- 規 模 南北 2.6m、壁高40cmを計る。
- 重 複 なし。
- カ マ ド 不明。
- 覆 土 1層で2号住居跡と同じである。
- 土 坑 検出されない。
- 遺 物 覆土より須恵、土師片とともに自然石が中央付近より出土している。
- 備 考 土層観察では黒色土中での掘り込が確認でき、床面においても黒色土を地山としている。
住居内覆土の分層は、明確には確認できなかった。また、平面形の確認も覆土と地山との土質に変化が少なく、確認しにくい。

表2 2号・3号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量 (cm・g)	形態・手法・焼成・他	石質	残存	出土
1	石	長 12.1 幅 5.7 重 375	図表面に少々稜をもつ断面隅丸菱形形状。使用痕は見られない。	両輝石 安山岩	完形	覆土中位
2	石	長 11.9 幅 5.2 重 340	右側面が平担をなす。明瞭な使用痕はないが図上端は敲打痕の可能性あり。	輝石安 山岩	完形	覆土中位
3	石	長 9.5 幅 4.3 重 250	全体に滑らかである。使用痕は見られない。	砂岩	完形	覆土中位
4	石	長 8.8 幅 4.9 重 175	扁平な楕円形を呈す。使用痕は見られない。	両輝石 安山岩	完形	覆土中位
5	石	長 9.6 幅 6.9 重 460	裏表両側に平坦面のある大きめの礫でこも石状とは言えない。側面中央は摩滅して凹む。	輝石安 山岩	下部 欠損	覆土中位
6	石	長 9.7 幅 5.0 重 285	裏表ははっきりした平坦面で図上端は僅かに敲打痕が見られる	砂岩	下部 欠損	覆土中位
7	石	長 9.5 幅 6.2 重 275	扁平な不整楕円形を呈す。使用痕は見られない。	両輝石 安山岩	完形	覆土中位
8	石	長 10.5 幅 4.7 重 215	図左側面及び表面は本来欠損部だったものが摩耗して角がとれたらしい。使用痕は見られない。	砂岩	完形	覆土中位
9	石	長 10.8 幅 5.0 重 265	図左側面以外に大小の凹みのある不整形を呈す。凹み部はいずれも摩滅。	両輝石 安山岩	完形	覆土中位
10	石	長 8.2 幅 4.7 重 220	断面平行四辺形で各面とも滑らか。使用痕は見られない。	輝石安 山岩	下部 欠損	覆土中位
11	須恵器 甕	口 — 底 — 高 — 最 —	丸底部～体部下半片。底部付近回転ヘラケズリで一部に指頭痕あり。焼成良好。	(色調) 黄灰色	20 %	覆土中位
12	土師器 甕	口 — 底 — 高 — 最 —	底部～体部下半片。底部は上げ底状で器厚、木葉痕。焼成良好。	(色調) 暗褐色	20 %	覆土中位

II 3・4 トレンチ

概要

3 トレンチか 4 トレンチか判別のつかない遺物をまとめた。先に示したように 3 トレンチでは住居跡が検出されているが、ここに挙げたものは全て縄文時代の石器であり、遺構に伴うものではない。本遺跡では縄文時代の文化層に弥生時代以降の遺構の掘り込みが達しているせい、覆土にも縄文期の遺物が混在する例が多く見られている。

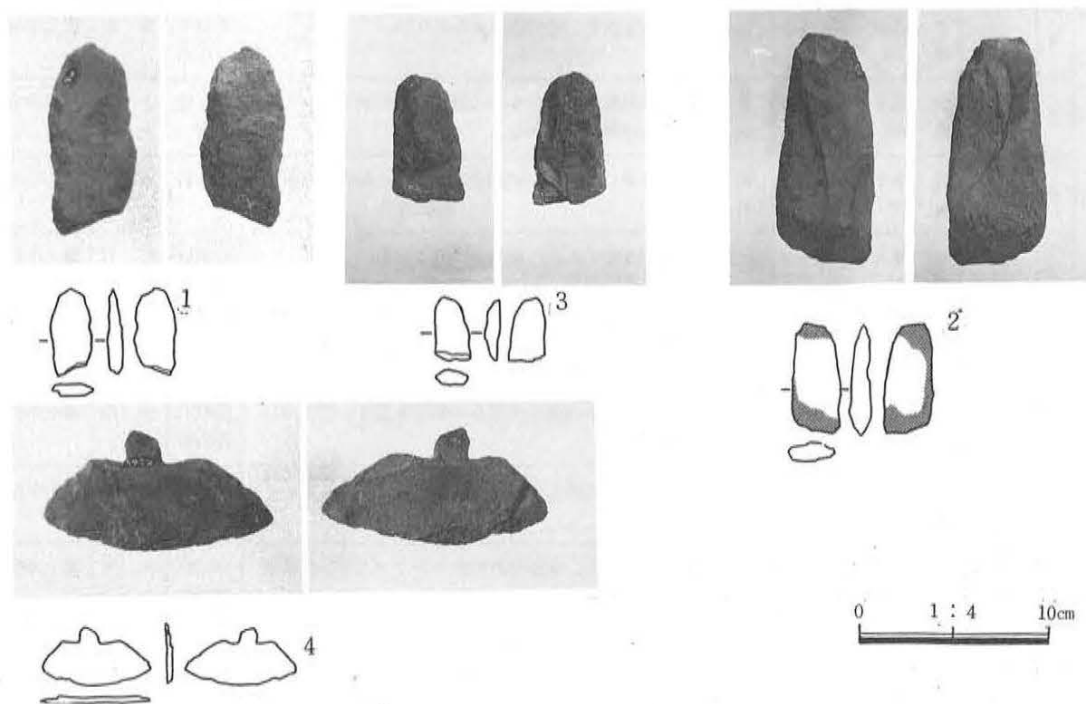


図6 3・4 トレンチ出土遺物

表3 3・4 トレンチ出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm・g)	形態・手法・焼成・他	石質	残存	出土
1	打製石斧	長 8.6 幅 4.3 重 90	やや木の葉状だが短冊形と言える。両側縁は細かい調整がなされる。全面剥離面である。	砂質頁岩	刃部欠損	
2	打製石斧	長 11.2 幅 5.0 重 175	直刃部がやや斜めになっている両刃短冊形石斧。刃部及び基部はよく摩耗している。	凝灰質砂石	完形	
3	打製石斧	長 6.5 幅 3.6 重 45	小型の短冊形と思われる。全体に雑な調整で残存部は少々弧状に反る。	凝灰質砂岩	刃部欠損	
4	石匙	長 11.4 幅 6.1 重 50	非常に薄い横型石匙。粗製品である。	砂質頁岩	完形	

Ⅲ 4・5トレンチ

概要

4トレンチ、5トレンチは本遺跡区域のほぼ中央にあたる。遺構とされるものは全く検出されおらず、遺物のみ出土である。両トレンチともに図化し得たものは土師器、須恵器、灰釉陶器等で縄文～弥生時代の遺物も若干出土したがいずれも小片であった。隣接する3トレンチ及び6トレンチにおいては比較的近接して遺構が確認されており、仮に遺構分布がある程度平均していれば本トレンチ内でも確認されるはずであるが、そうでない状況を見るとこの辺りは空閑地であったようである。

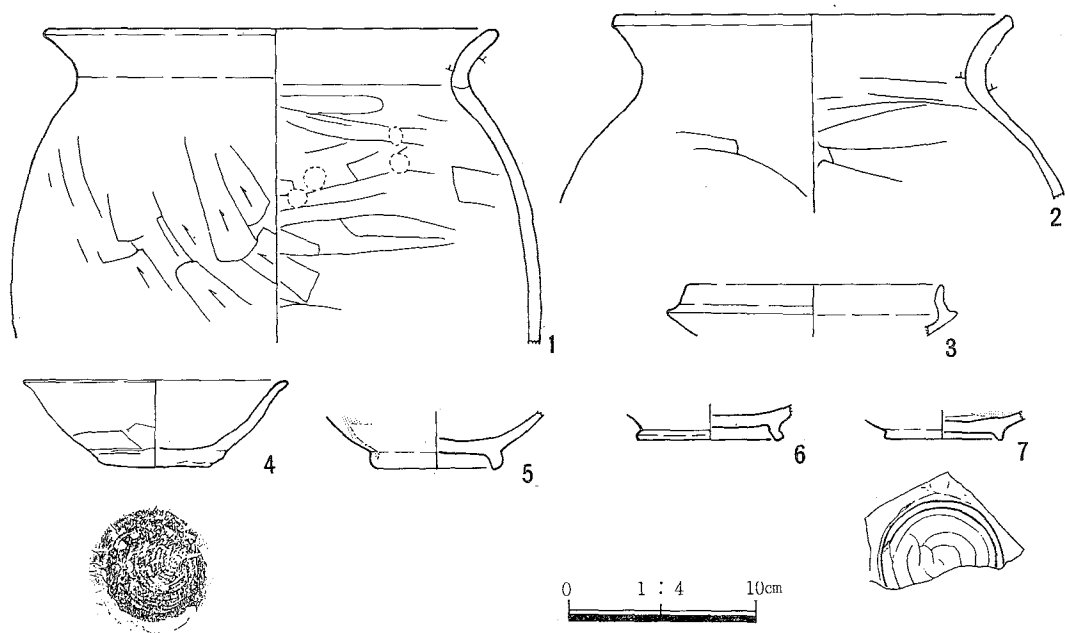


図7 4トレンチ出土遺物

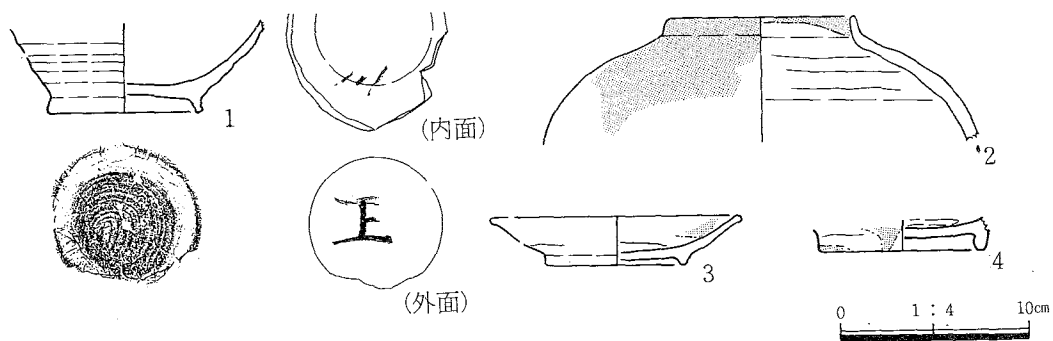


図8 5トレンチ出土遺物

表4 4 トレンチ出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・手法・焼成・他	色調	残存	出土
1	土師器 甕	口 24.0 底 ——— 高 ——— 最 (27.8)	大きく外反する厚い口縁部。口縁内外面ヨコナデ。体部外面斜めヘラケズリで内面ヨコヘラナデ。焼成良好。	灰褐色	30 %	
2	土師器 甕	口 21.0 底 ——— 高 ——— 最 ———	口縁端面面取り。内外面ヨコナデ。体部摩耗のため不明瞭で内面はヨコヘラナデ。焼成良好。	橙褐色	20 %	
3	須恵器 坏	口 (13.8) 底 ——— 高 ——— 最 ———	やや上向きの稜より外反気味に立ち上がる。口縁内外面回転ナデ。焼成良好。	灰色	小片	
4	須恵器 坏	口 13.9 底 4.5 高 4.6 最 ———	底部は小さく口縁は短く外反する。底部右回転糸切り無調整。全体に作り雑で焼き締まりなし。	灰白色	50 %	
5	灰釉 坏?	口 ——— 底 (6.5) 高 ——— 最 ———	底部付近厚く、台部は擬三日月状を呈す。内面は底部の重ね焼き痕以外に降灰釉が付着。焼成良好。	灰白色	小片	
6	灰釉 坏?	口 ——— 底 (7.6) 高 ——— 最 ———	外傾する台部は断面長方形。内面は5と同じく底部以外に降灰釉が付着する。焼成良好。	灰白色	小片	
7	灰釉 皿?	口 ——— 底 6.4 高 ——— 最 ———	台部は小さい。内面は5、6と同じく重ね焼き痕が見られる。焼成良好。	灰白色	底部周	

表5 5 トレンチ出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・手法・焼成・他	色調	残存	出土
1	須恵器 埴	口 ——— 底 7.8 高 ——— 最 ———	台部は短く外傾する。底部右回転糸切り後、台部貼りつけ回転ナデ。内外面に墨書あり。焼成良好。	灰白色	20 %	
2	灰釉 短頸壺	口 (9.8) 底 ——— 高 ——— 最 ———	残存する外面全てと口縁内面に釉が認められる。焼成良好。	灰黄色	小片	
3	灰釉 皿	口 (13.0) 底 (7.6) 高 (2.6) 最 ———	素地は緻密で非常に滑らかである。口縁部から体部中位まで漬け掛け施釉。焼成良好。	灰白色	20 %	
4	灰釉 埴?	口 ——— 底 (8.8) 高 ——— 最 ———	厚い台部が垂直に接地する大型埴と思われる。焼成良好。	灰白色	小片	

IV 6 トレンチ

概要

本区は遺跡地西端に位置している。先に述べた3トレンチと本トレンチより遺構が検出されたが、本区では遺構が全域にわたっていることから、部分的ながら調査区を拡張して遺構の状況の把握に努めた。この結果、縄文時代から平安時代までの遺構、遺物を伴う複合遺跡であることが判明した。

縄文時代	石組炉を伴う石組状遺構	1
	土器2個体からなる伏壔部	1
	単独埋壔部	2
	遺構に伴わない土器、石器	
弥生時代	住居跡	3
	遺構に伴わない土器、埴輪片	
古墳時代	住居跡	4
	遺構に伴わない土器	
平安時代	住居跡	4
	遺構に伴わない土器、瓦片	
	浅間B軽石により埋没した畝状遺構	2
時期不明	不整形土坑群	2

住居跡においては弥生時代の10号・8号(15号は不明)が主軸をほぼ南北にとり、古墳時代の6号を除いて他の住居跡に概ね東西に主軸をとる傾向が見受けられる。また、それらとは軸を異にして平安時代後期に属する畝状遺構が検出されており、本地域における遺構のあり方の一傾向とされるところである。

以下、時代各に遺構及び遺物を概観する。

1 縄文時代

<石組状遺構>

93-3~4グリットを中心に位置する。N-66°-Eの軸で直線的な配列をとっている。径30~60cmの不整楕円形の自然石を主な構築材とし、他に10cm内外の礫が不規則に散在している。石相互の規則的な組み合わせはあまり看取出来ないが、全体の傾向として図左側の石が右側の上に重なるようであり、このことより本来上または左傾状態で直組状に組まれていたものが左側へ崩れ込んだ可能性が考えられる。ま

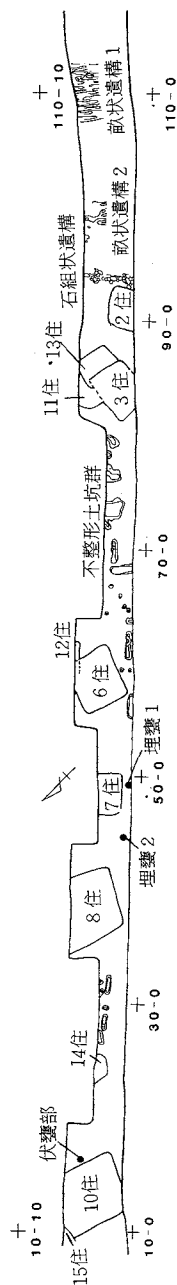


図9 6トレンチ全体図(1:600)

(1・4・5・9住)
は欠番

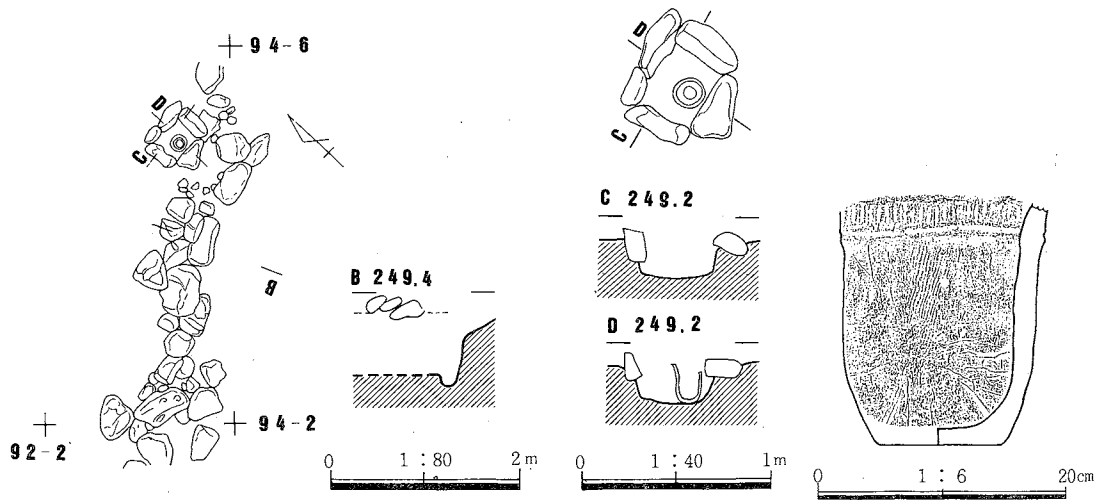


図10 石組状遺構実測図と出土遺物

た、周辺に伴うと思われる掘り込みもなく、性格付けはし難い。

一方、石列北東端部左側では石囲炉が検出された。北側と西側に板状の構築材を用い、他はやや扁平の楕円形の石で内面をほぼ正方形に区画する。内部には深さ約20cmの広い底面上南寄りの位置に口縁部を欠損する深鉢が正置されていた。石及び覆土、周辺に被火の形跡は全く検出されていない。深鉢は底径10cm、厚さは1.5cmと厚く、胴部は一部に縦方向の撚糸文を残す以外は無文、残存する上部が口縁部下半と思われるが、ゆるやかな隆帯による横区画内に短い縦沈線を巡し、上下の隆帯凸部に3～6cmの長さで同具による破線の横沈線を入れてある。器面全体に摩耗が進むが内面には横ヘラナデ痕及び底部より6cm程の位置に輪積痕を残す。明確な二次焼成痕は見られない。

石組状の石列と石囲炉は接している。というよりは炉が石列の一部を構成するような状況と思われる同遺構と捉えられるが、石列がさらに両端へ延びているとしても部分的な検出のみの現状では性格の言及は出来ない。時期については伴出する深鉢より中期前半にあたると思われる。

〈伏鉢部〉

15-4～5グリット間に検出された。口縁部が少々欠損する注口浅鉢の上に粗製深鉢（ $\frac{1}{2}$ 周片）が被さっており、浅鉢は口縁側を下に伏せた状態であった。遺構とされる掘り込み等は伴わず、浅鉢内部の土にも特徴的な点は見られていない。図12の1は粗製の深鉢である。口縁下に隆帯を巡して無文部を画し、隆帯には厚い半截竹管状のもので楕円形の刺突を描く。以下、胴部は無文である。2は注口付の浅鉢である。4つの把手のうちの一つは上向きの注口を伴い、各把手の中心は円形に貫通して内面にはその周りに円形刺突を巡らしている。口縁部はくの字状に内折しているが、この外面は把手間ごとに円形刺突で楕円文を2半位描き、内部は縄文LR。また、2つの楕円区画間には隆帯を伴う円形刺突が上下2箇所認められる。胴部は無文で表面は比較的良好な研磨がなされ滑らかだが、底部から胴下半にかけては二次焼成のためか器面は脆化し少々赤変が見られる。内面は底部付近が黒色化し、炭化物によるものと思われる。

これらの遺物は縄文時代後期前半、称名寺Ⅱ式に該当すると思われる。

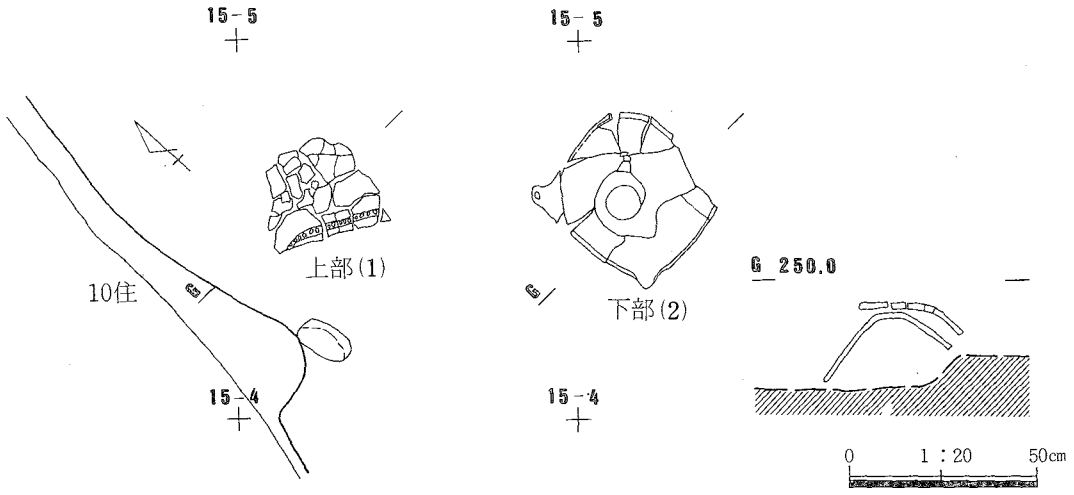


图11 伏甕部実測図

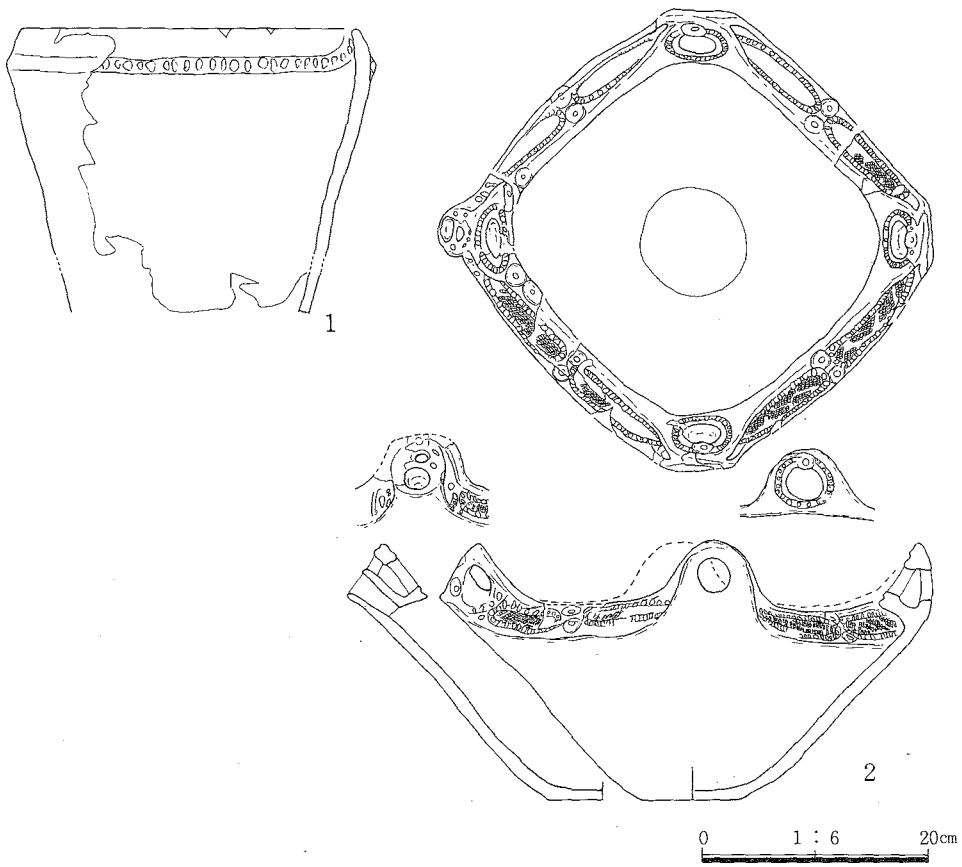


图12 伏甕部出土遺物

<埋甕1>

49-1 グリッドに位置する。掘り込みには伴わず、土器単体が正置状態で検出された。胴部中位以下一周残存するのみであるが、弱いキャリパー形になると思われる。幅7mm程の沈線で縦の区画を描出し、幅の広い縄文施文部と幅の狭い磨消部各々8単位で器面を構成する。縄文部は概ねRL縦ころがしでその中央には縦区画沈線と同じ施文具で弱い蛇行沈線が描かれている。二次焼成痕は全く見られず所々には焼成時の黒斑がある。文様構成より、中期後半の加曾利E式期における4期区分の3期付近に位置づけられると思われる。

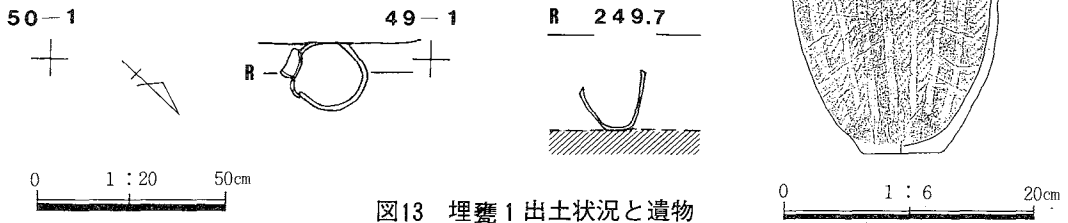


図13 埋甕1 出土状況と遺物

<埋甕2>

45-2 グリッドに位置する。径40cm程の土坑に伴い深鉢胴部片約一周が検出された。掘り方はやや不整形ではあるが中央で約17cmの深さを計り底面には自然礫が存在した。覆土は5層を確認したが自然堆積でないことは明らかである。地山はローム層であった。土器は覆土の上位に伴うが下端が輪積痕に沿って割れ口であるのに対し上端はそれよりも不整形に欠損している。これは精査段階での欠損によると思われる、先の埋甕1の上部に關してもその可能性が強い。文様は幅5mm程度の浅い沈線による縦区画で、縦方向の細かな条線部と磨消無文部各々8単位から構成される。条線部に対し無文部の幅は狭い。残存部中程に輪積痕が残っていることより「輪」の幅は約4cmである。

時期は埋甕1と同様、加曾利E式4期区分における第3期付近にあたる。

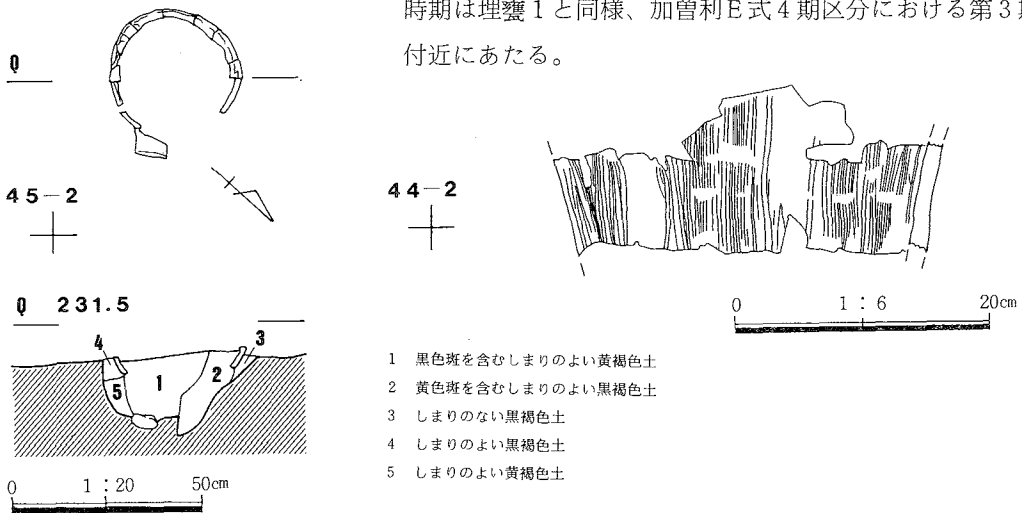


図14 埋甕2 出土状況と遺物

- 1 黒色斑を含むしまりのよい黄褐色土
- 2 黄色斑を含むしまりのよい黒褐色土
- 3 しまりのない黒褐色土
- 4 しまりのよい黒褐色土
- 5 しまりのよい黄褐色土

〈土器〉

本項でとりあげる土器は遺構に伴わずに出土した破片資料である。縄文時代以外の遺構の覆土に存在するものがあるのは前に述べたが、ここではそれらを含んでいない。本遺跡、とりわけ6トレンチにおいては縄文時代の包含層が後世の遺構構築によって攪乱を受け、その平面的及び層位的な分布状況を把握することが殆ど不可能であった。また、破片であるために大半はその器形や文様構成について不明と言わざるを得ない。よって、個々の文様の要素、描出手法からその所属時期を判断し、5つのグループに大別した。資料は中期から後期に属するものが殆どであり、若干ではあるが前期とされるものも存在した。以下にその概要を記す。

- 1 第1群土器 中期前半に属する。隆帯と沈線の凸凹により器面を立体的に見せる傾向が強い一方で無文土器も存在する。また、若干ではあるが縄文、撚糸文をもつものも見られる。勝坂式並行期と思われる。
- 2 第2群土器 中期後半に属する一群である。隆帯、沈線、縄文の割合はほぼ等しく、口縁部文様帯の存在するもの、存在しないものとともに無文の土器も見られる。加曾利E式期に並行する。
- 3 第3群土器 後期初頭に属する。加曾利E式期末からの沈線と磨消縄文による文様構成をもつとともに口縁下の隆帯に粗い刻目を付けた粗製土器片が存在しており、称名寺式期に並行する一群としておく。
- 4 第4群土器 後期中葉付近に属する。刻目のある浮線文と沈線により内外を施文と磨消部に区画する意匠は掘之内Ⅱ式期の特徴とされるものであり、沈線による雑な格子目文などは加曾利B式期に相当するものと考えられる。
- 5 第5群土器 前期前半の繊維土器に属する。2点のみと非常に少ない。関山式もしくは黒浜式期にあたるが破片からは判断出来ない。

1 第1群土器

1～3は無文の口縁部片である。1と2は口唇部内斜面取りでよく撫でられる。3はやはり面取りがなされ、外面に折り返し状の段を有す。5、9は連続爪形文をもつ。5は図では分かりづらいが口縁直下に2条のC字状爪形文とその下に粗い櫛歯状工具による深い縦位平行沈線を描く。9は隆帯上に変形D字状爪形文を付している。4は沈線のみ在意匠だが摩耗がひどく詳細は不明。6は隆帯の谷間を削り込むように沈線を入れて立体感を出している。7、8、10、13、15～17、19は太い隆帯と沈線のバリエーションによるものである。8では隆帯上に矢羽根状の沈線を描き、13、16、17でも刻目を付す。10と15では沈線区画内に列点文が見られる。11、12、14は隆帯と沈線による円形文で11は隆帯上及び内部の区画部にLRと思われる縄文を付している。20は口縁部直下片と思われる、胴部の縄文帯（RL）と口縁部文様帯を隆帯とその上下を3条の深い平行沈線で区分する。21は隆帯区画内に列点文を不規則に付す。24は口縁部文様帯の一部で隆帯が合わさり突起となっている。18、20、25は胎土に金雲母が含まれる。22、23、25は胴部地文を撚糸文とする。このうち22は口縁部文様帯との区画が刻目を付した隆帯としている。

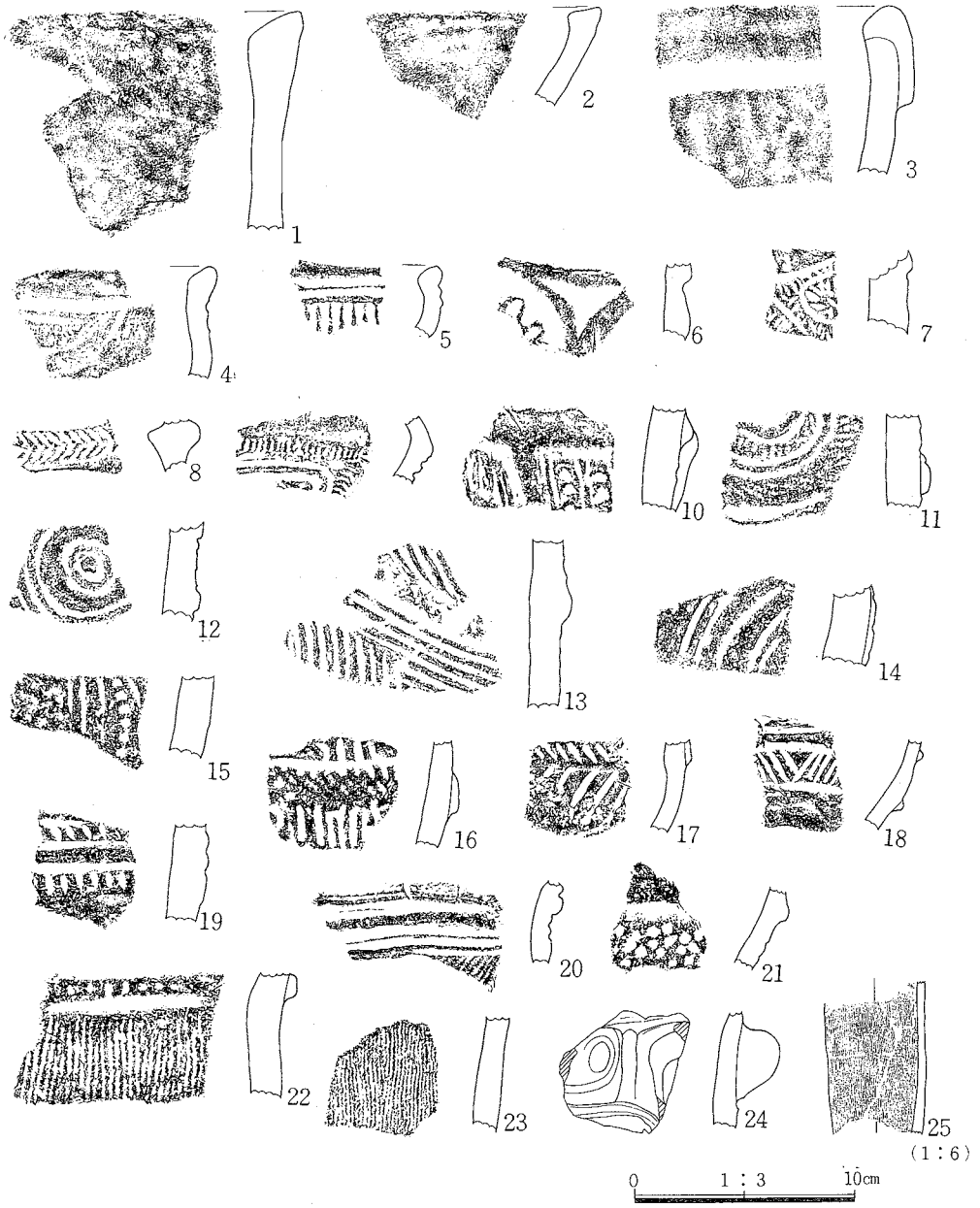


图15 第1群土器拓影图

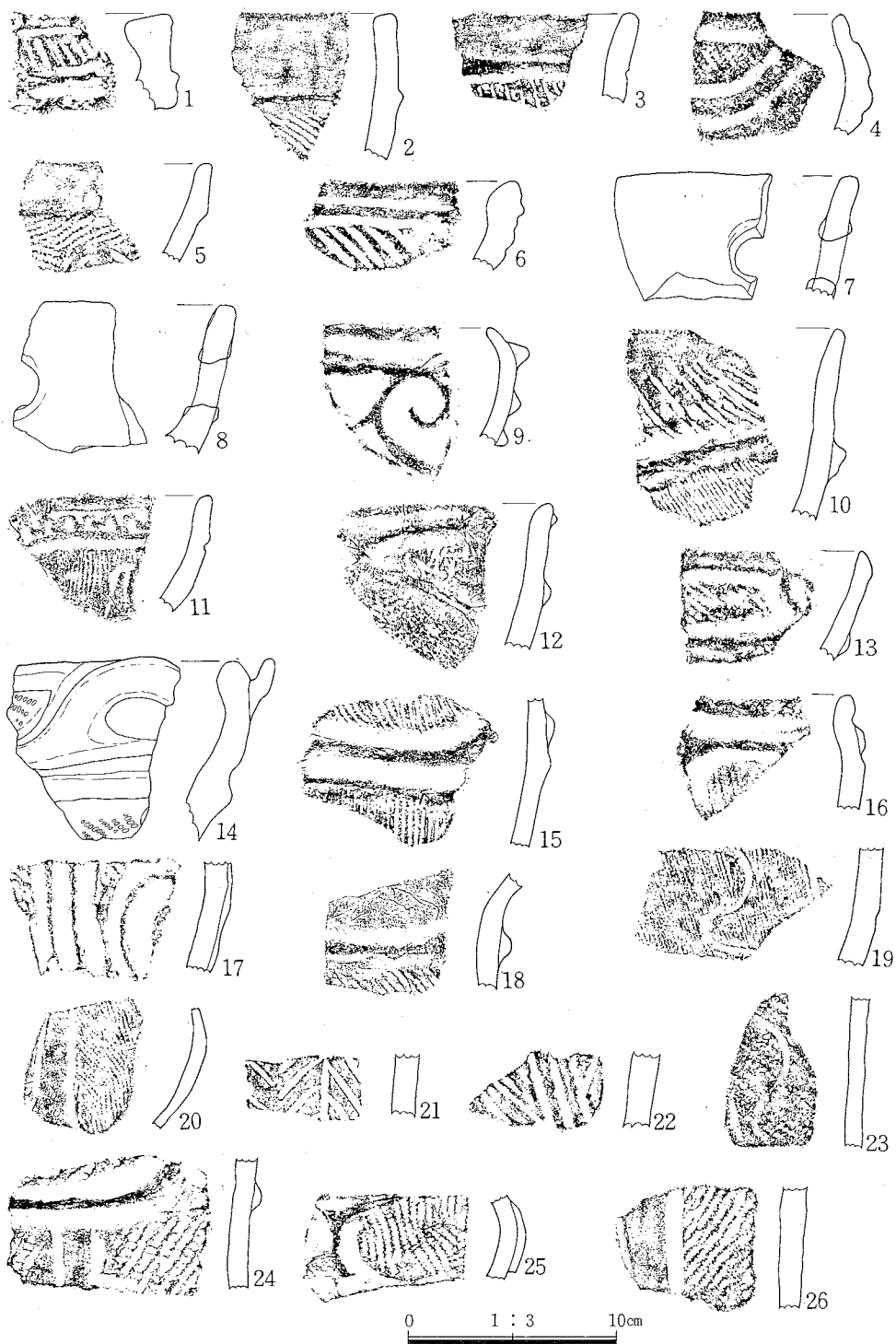


图16 第2群土器拓影图(1)

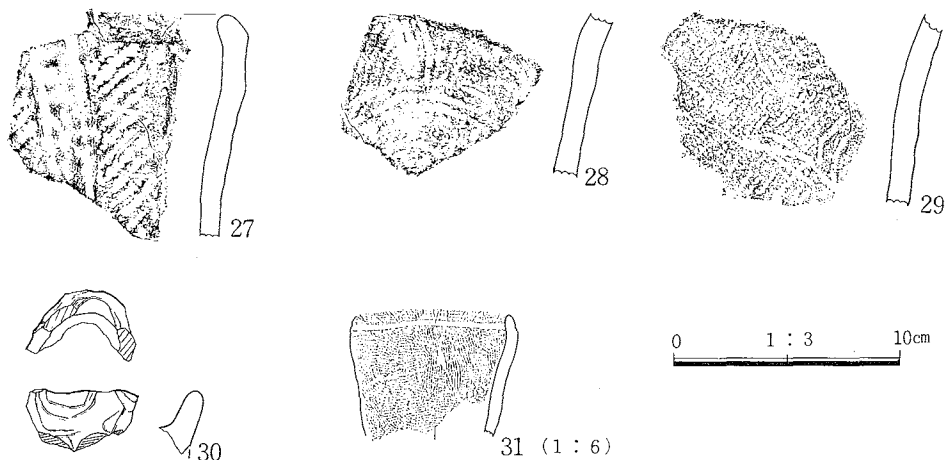


図17 第2群土器拓影図(2)

2 第2群土器

口縁部文様帯を有すグループとして1、4、6、9、12~14、16、24、25がある。隆帯の楕円区画は1、6、16が斜位または縦位沈線で4、12、13、24、25は縄文が付される。4は楕円文間の渦巻状部分。14も同様の連絡部と思われるが口縁より上位に突出する。7、8は同一個体であるが接合資料ではない。無文部の口縁に径2.4cm程の穿孔をもち、内外面はよく磨かれている。3、10、11、18は口縁部片であるが明確な文様帯が見られない。3は沈線下に縦位沈線を描き、僅かに外傾して開く。10は断面台形状の隆帯区画により口縁側に斜位の雑な沈線、胴部側に密な縦位の沈線を描く。11は本群中異質な資料であり、口縁直下に横位沈線を巡らして内部に隆帯状に浮き彫りされた蛇行文を伴う。胴部側には縦位沈線を描く。胎土中の砂粒が多いために器面が剥落し易く、他の土器には見られない傾向である。18は外反する口縁下に横位隆帯を巡し、無文部と縄文部(無節L)を区画する。15、17は隆帯による曲線文をもつ胴部片である。15は太い隆帯区画内に縦位沈線を密に描き、17はごく一部に縄文RL?を残す断面三角形の微隆起線とも言える。19、21~23、26、28、29は沈線文を伴う胴部片である。21と22は縦及び斜めの太い沈線による意匠、19は縦位の条線を地文として蛇行沈線を伴う。23は摩耗のため不明確ながら縄文部と磨消部に区画され縄文部に蛇行沈線を描いている。26も同様に縄文部(RLO段多条)と磨消部が太い沈線ではっきり区画されている。28と29は同一個体で地文の縄文部(RL?)に2条もしくは3条の浅い平行沈線を曲線で雑に描いている。2、5、20、27、30、31は本群でも新しい段階にあたるグループで、口縁部文様帯の消失と微隆起線、及び細沈線による磨消縄文の区画を観点とした。2、5は口縁無文部と縄文部を微隆起で区画する。2は縄文LR、5はLRによる羽状を呈す。20はU字及びΠ字の沈線で縄文部(LR)と磨消部を形成する。27はD線部より垂下する沈線が雑な蛇行沈線を伴う縄文部(RL)と磨消部を区画している。31は弱いキャリバー形の小型深鉢で口縁直下の横位沈線下全体に細い縄文LRを不整方向に施文する。30は手づくね土器である。

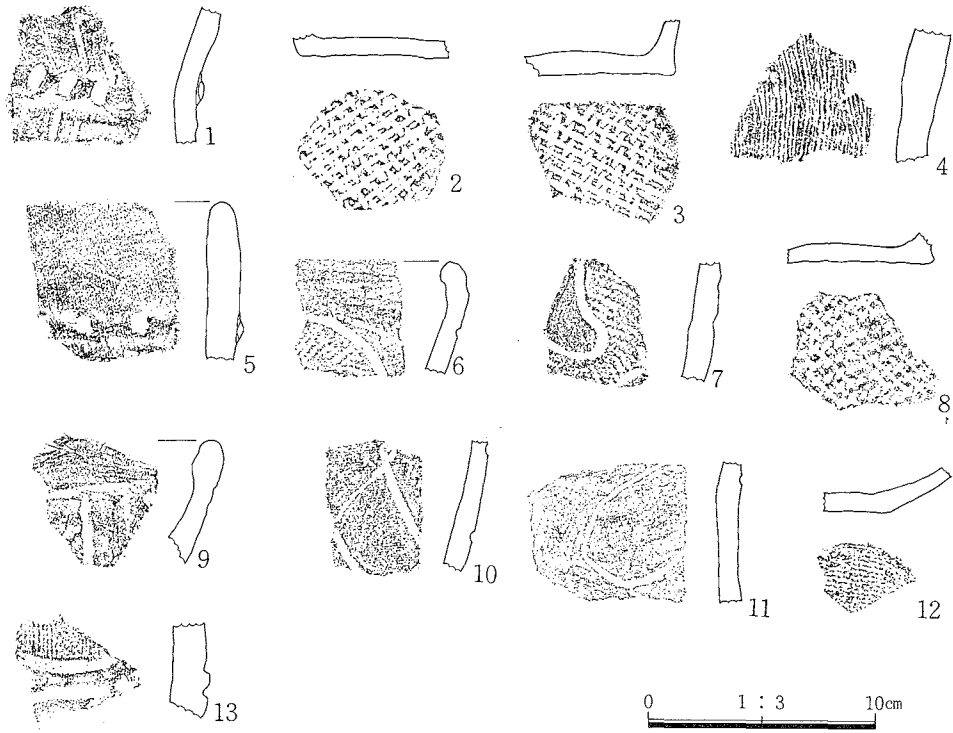


図18 第3群土器拓影図

3 第3群土器

2、3、8、12は網代痕をもつ底部片である。2、3、8は幅2～3mmの条による網代痕で、編み目は共に2本超え、1本潜り、1本送りと見られる。12はよく磨かれた胴部下位片と共に細かな網代痕が残るが詳細については明言出来ない。これらの底部片は、従来より後期によく見られるものとされており、このことから便宜上後期のものとして本群で提示することにした。1、5は太い隆帯に粗い刻目（押圧状）の付されるもので1にはその上下に狭い平行沈線及び太い沈線が縦～斜位に描かれ、5は口縁部片である。4は厚手の胴部片で縦位の条線を描く。13は刺突のある隆帯が楕円文を形成し内部に縦位条線を描く。6～7、9～11は沈線による曲線のモチーフである（9は推定）。6、7は磨消部と縄文部（共にLR）に区画される。9は波状口縁で内外面はよく磨かれて光沢をもっている。10、11は沈線以外の施文は見られず、11では表面を沈線に沿う形で細かなヘラミガキがなされ（このことは施文→ヘラミガキの順を示す）、裏面はていねいな横ヘラミガキで滑らかに仕上げている。

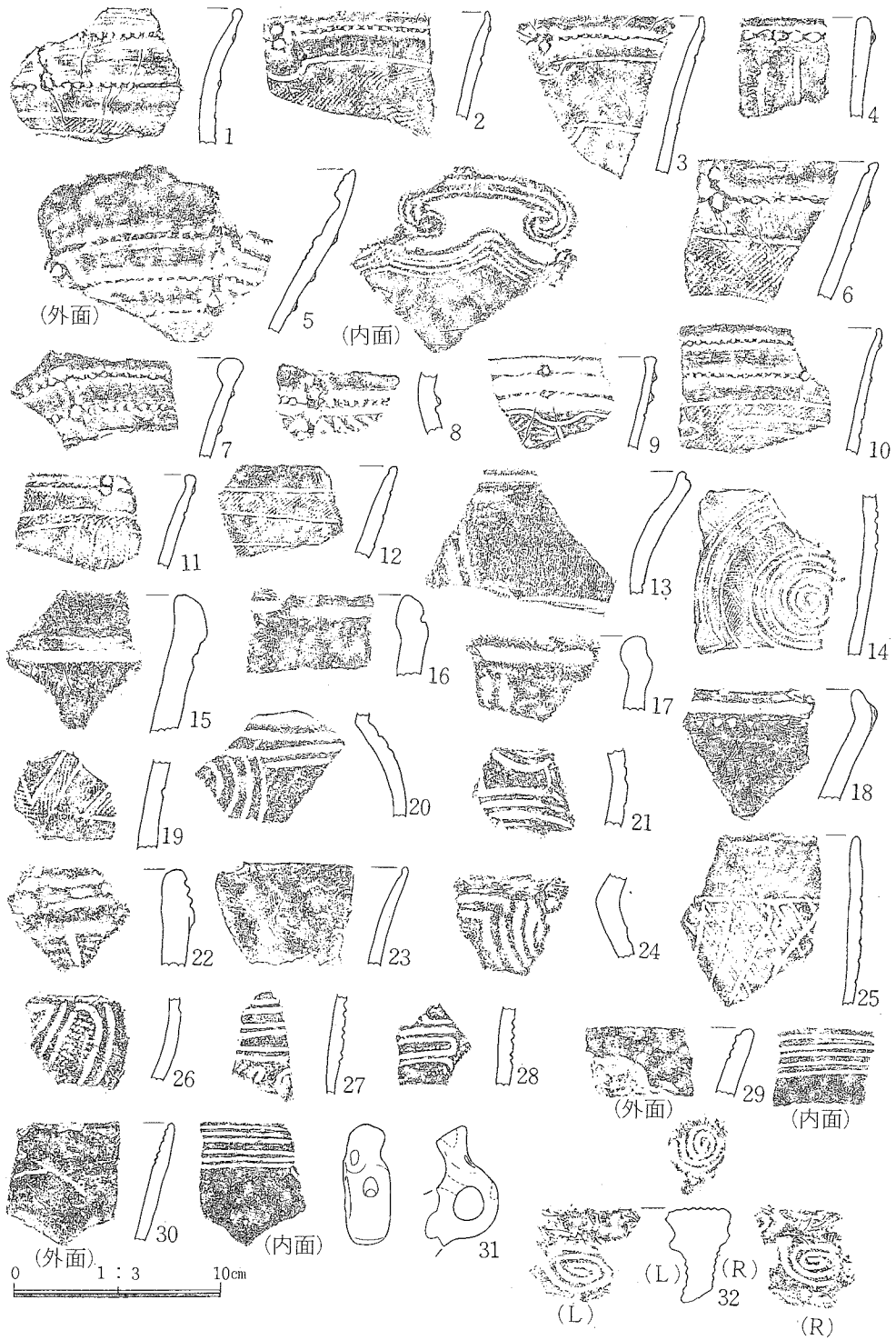


图19 第4群土器拓影图

4 第4群土器

1～13、19、23、29、30は堀之内Ⅱ式に比定されるグループである。口縁下に刻目をもつ浮線文のあるもの（1～11）で同部に8の字状貼付文は4以外の全てにみられる。浮線文の下位には横位を基本とする沈線による縄文と磨消部分のモチーフのあるもの（1、2、3、6、9、10、11）があり、他に口縁内面に沈線による文様をもつもの（5）、また、口縁端部が波状を呈し沈線と刺突による文様を伴うもの（7）がある。8は浮線上下の深い沈線及び下位に描かれる同様の斜行沈線から堀之内Ⅰ式の要素を残すものである。12は浮線文を伴わずに沈線と縄文による意匠、13は縦位の浮線で刻目をもつ。23、29、30は共に無文部で29と30は内面に彫りの深い平行線を伴っている。これらは概ね薄手で内外面ともよく磨き込まれるものが多い。

14～18、20～22、24～28、31、32は加曾利B式期に比定される。14は非常に精巧な仕上がりの胴部片である。円文のモチーフの周縁に細かな刺突列部、内側に細い沈線による三角文を鋸歯状に並べ、円の中央は太い沈線を等間隔に巡した渦巻文となっている。外面はよく磨かれ非常に滑らかである。15、16は厚手の口縁片で直下に太い沈線を描く。16は内面に縦沈線2本と竹管状工具を押圧した円文が付されている。18は短く内折する口縁外側に刻目をもつ。17、20～22、24、26～28は太い沈線による意匠で20と21、24と26、27と28はそれぞれ同一個体である。17は口縁直及びその下位に垂下する沈線、20と21は横位及び曲線の沈線が胴部に付される。24と26も同様だが26には曲線区画内に縄文LRを伴っている。22は口縁部を隆帯と沈線で区画して内部に先端の尖った工具による円形刺突と半截竹管による横方向からの刺突を施す。27、28はよく磨かれた器面で沈線の間隔を狭くして間を隆帯状とした凸凹のコントラストを作出し、内部に細かな刺突列を描く。25は殆ど直立する口縁片で横位沈線以下に雑な格子を描出する。31、32は把手である。31は上方他3か所に円形刺突のある橋状把手、32は上面と内外面の3か所に渦巻文が描かれている。

5 第5群土器

1は縄文RLを施文とし、横位の集合沈線を描く。内面は横ヘラミガキが良好になされ滑らかである。断面より繊維土器と判断出来るが量的には少ない。2は縄文LRと思われる地文上に浅く幅広い沈線で横線と山形文が描かれている。内面は磨かれているが雑な仕上げになっている。器面及び断面には焼成による繊維の脱虚痕が著しく、全体に脆い焼成と言える。



図20 第5群土器拓影図

〈石器〉

6 トレンチ出土の石器類を図21、図22に示した。これらは土器片と同様に遺構に伴うものではなく、全て覆土遺物である。個々についての平面的な分布状況は不明だが概ね93-3~4グリッド付近を中心としており、先に提示した「石組状遺構」部分がそれにあたる。よって当遺構に伴う可能性のあるものもあると思われる。また、遺物の時期についてもそれを示す伴出遺物のないことや形態等からも不明と言わざるを得ないが、土器の欄で示した時期と概ね並行すると思われる。

1 打製石斧 (1~12)

図示した16点中12点が打製石斧である。これらはその形状より「短冊形」、「撥形」、「分銅形」に大別されるが、1~9 (9は推定) が短冊形、10が撥形、11~12が分銅形にあたる。短冊形石斧では1~5、9は幅広、6~8は細身である。刃部の形態をみると3~6が丸刃、1は直刃であり、2、7~9は欠損のため不明。また、刃部の摩耗が3~6に確認され、刃部の残存する1では左側縁の抉れ部が少々摩耗するのみで刃部の摩耗は全くない。3~6では6が刃部両側に少々摩耗部を残す以外はよく摩耗し、4では縦方向の擦痕が明瞭である。7、8は共に絹雲母片岩を用材としており、石質のためか調整は不明瞭である。刃部側が大きく欠損し、これは9が剝離状の欠損を示すのとは対照的である。

10は撥形石斧として扱った。小ぶりの完形品で刃部には僅かな擦痕が認められる。

11、12は分銅形としたが、両方とも長軸に対して幅の狭い形状で顕著な分銅形とは言えない。11は基部の一部と刃部側が大きく欠損する大型品でずっしりとしている。12は完形品で丸刃と思われるが主軸に対し斜めの刃部である。また基部もそれに平行する形状をとり、これを使用の結果の形状変化とすれば基部とした側も刃部である縦斧とも考えられるが、全体的に摩耗しているために使用痕の確認はできない。

2 磨石? (13)

長径8cm、厚さ2cmの扁平な小石である。全体に非常に滑らかであるが使用痕とされる部位は明確ではない。一応「磨石」として扱ったが、石皿とセットをなすと言われる磨石とは形態を異にしており、その機能は不明と言わざるを得ない。

3 凹石 (14)

平面形は不整楕円形を呈している。凹み部は裏表両面に一つずつで両方ともに同じ側に中央よりややずれている。親指を押しつけたような凹みで径3~4cm、深さ8mmを計りよく摩耗している。

4 スクレイパー (15)

片面の大半は自然面を残している。狐状の刃部は細かい調整がなされるが全体に雑な感じをうける。刃部先端はよく見ると摩耗して丸くなっているのが分かる。

5 石錘 (16)

長軸の両端に切り込みをいれた切目石錘である。短軸側にその痕跡は全くない。片側の切り込みは僅かに中程まで及んでいるが、有溝石錘と言えるほどではない。切り込み自体は両端部とも比較的深くしっかりしているが、その周辺(両脇から内側にかけて)はやや欠損状になっている所もあり、使用によるものと言うよりは調整が雑と思われる。

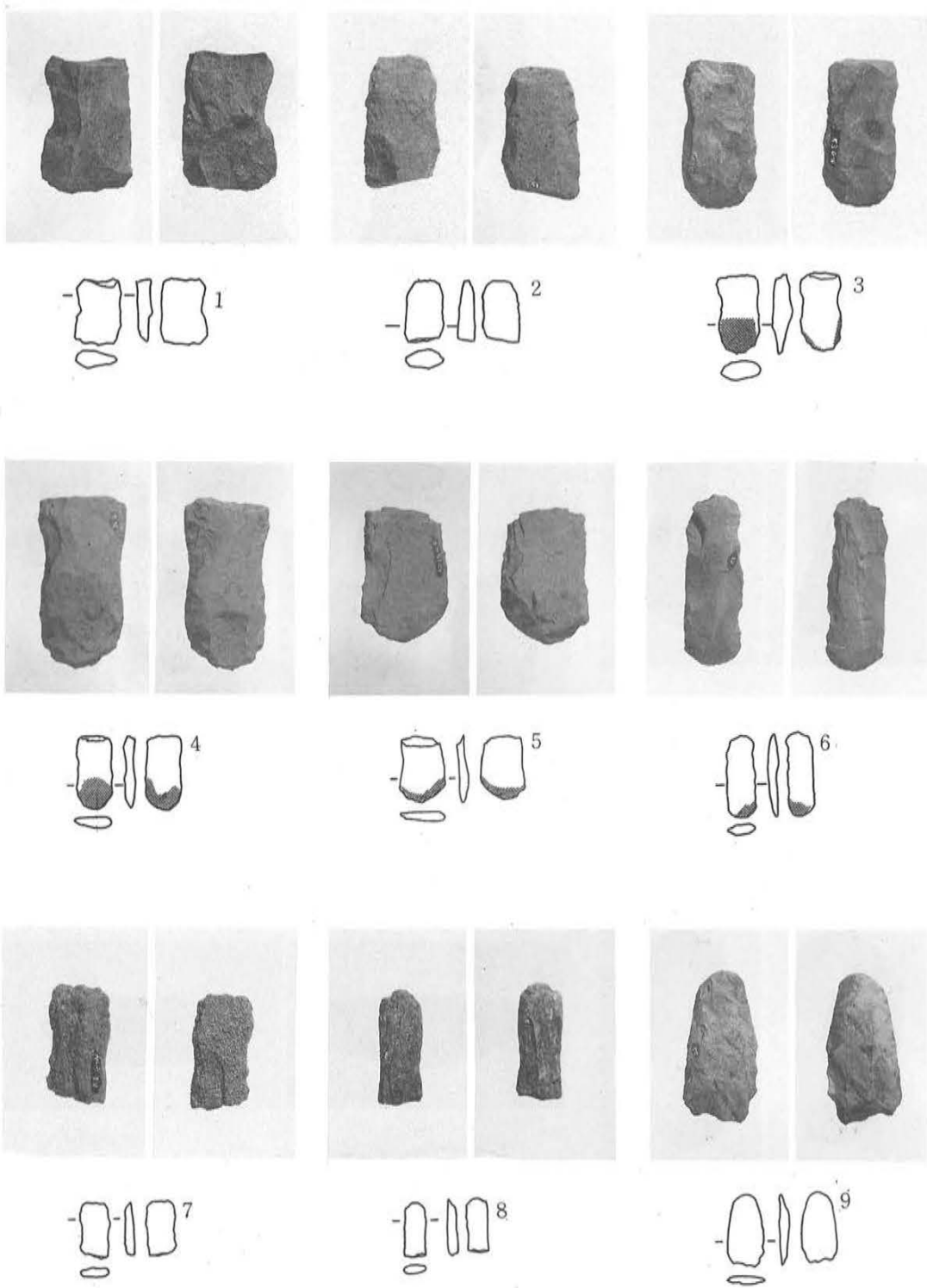
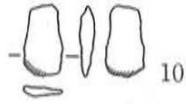
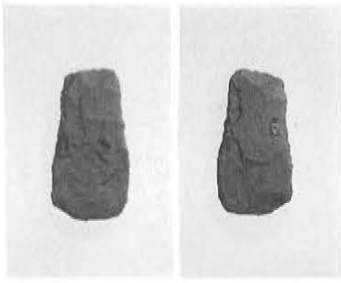
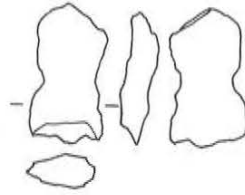
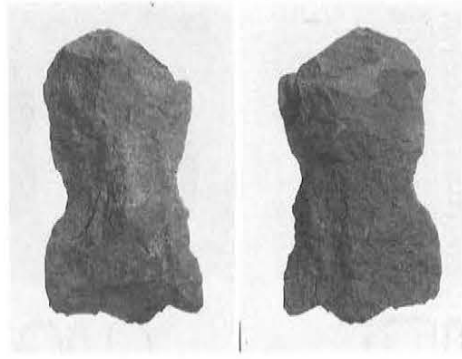


図21 石器 (1)

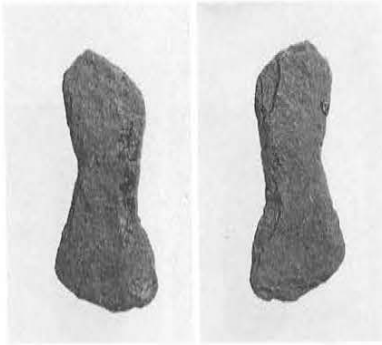
0 1 : 4 10cm
(写真の縮尺)



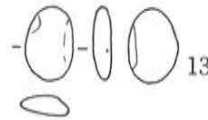
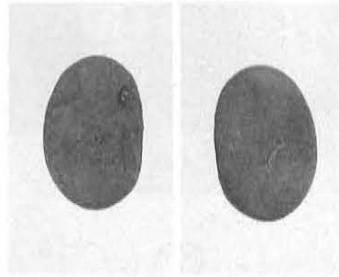
10



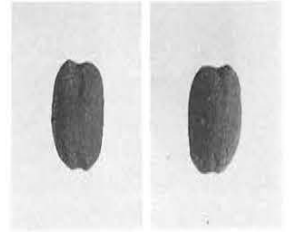
11



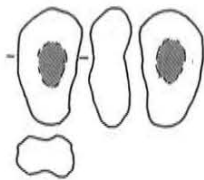
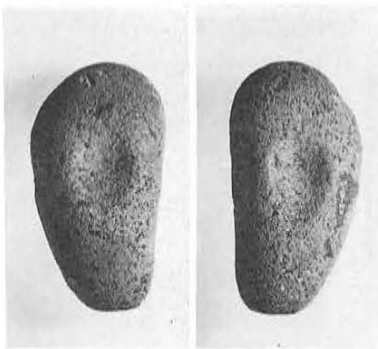
12



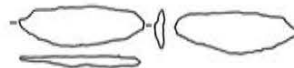
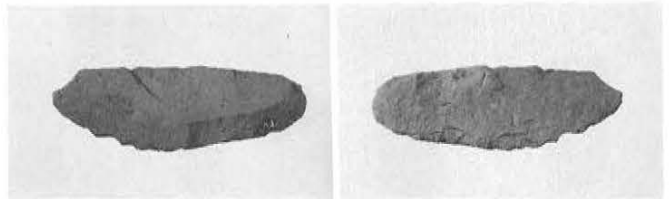
13



16



14



15



图22 石器(2)

表6 6 トレンチ出土石器観察表

No	器種	法量 (cm・g)	形態・調整・他	石質	残存	出土
1	打石製斧	長 7.8 幅 5.5 重 110	直刃・両刃の短冊形。左側縁は中程にやや抉れがあり、少々摩耗している。	凝灰質砂岩	基部欠損	
2	打石製斧	長 7.4 幅 4.5 重 105	短冊形。片面は中程に自然面を残し周縁を調整。明確な使用痕は見られない。	凝灰質砂岩	刃部欠損	
3	打石製斧	長 8.8 幅 4.3 重 80	丸刃・両刃の短冊形。刃部側はよく摩耗している。	凝灰質砂岩	基部欠損	
4	打石製斧	長 9.5 幅 4.9 重 145	丸刃・両刃の短冊形で両側縁中程は少々抉れる。刃部は中央付近までよく摩耗し縦方向の擦痕が見られる。片面の大半は自然面を残す。	凝灰質砂岩	基部欠損	
5	打石製斧	長 8.0 幅 5.3 重 65	やや斜位の丸刃で片刃と思われる。刃部はよく摩耗している。	凝灰質砂岩	基部欠損	
6	打石製斧	長 10.1 幅 3.3 重 70	丸刃・両刃の細身の短冊形を呈す。刃部は少々摩耗している。全体に少々弧状を呈し、狐外側は大半が自然面、内側は全て剥離面である。	砂質頁岩	完形	
7	打石製斧	長 6.6 幅 3.5 重 50	短冊形。全体にざらつき、側縁の調整も不明瞭である。片面大半は自然面が残る。	絹雲母片岩	刃部欠損	
8	打石製斧	長 6.7 幅 2.6 重 40	細身の短冊形を呈す。基部は丸みをもち、側縁の調整は不明瞭。	絹雲母片岩	刃部欠損	
9	打石製斧	長 8.7 幅 4.3 重 60	刃部から中程にかけて剥離状に欠損し刃部の状況は不明。基部は丸い。	凝灰質砂岩	刃部欠損	
10	打石製斧	長 7.2 幅 3.9 重 50	直刃・両刃で形状は撥形と言える。小型品で刃部は僅かに摩耗する。	凝灰質砂岩	完形	
11	打石製斧	長 14.6 幅 7.7 重 410	中央に抉り込みのある大型の分銅形石斧。使用痕は見られない。	砂質頁岩	刃部欠損	
12	打石製斧	長 12.1 幅 5.2 重 150	細身の分銅形。刃部は丸刃・両刃と思われ、石斧の主軸に対し刃部が斜位にとられる。側縁は細かな調整がなされるが摩耗のため不明瞭。	緑泥片岩	完形	
13	磨石?	長 7.9 幅 5.1 重 110	整った楕円形を呈する扁平な石。片側に2箇所欠損部があり、使用痕か。全体に非常に滑らかである。	硬砂岩	完形?	
14	凹石	長 12.0 幅 6.1 重 400	両面に親指大以上の凹み (径3~4cm、深さ8mm) をもつ。凹部は摩滅が認められ、他に使用痕は見られない。	両輝石安山岩	完形	
15	スクレイパー	長 12.7 幅 4.2 重 60	木の葉状を呈する。刃部は全体にわたって細かな調整がなされる。片面の大半は自然面を残す。	凝灰質砂岩	完形	
16	石錘	長 5.6 幅 2.6 重 50	両端2箇所切り込みをもつ切目石錘。用材は比較的厚く重みのある小礫。	絹雲母片岩	完形	

2 弥生時代

<10号・15号住居跡>

地床炉を伴う10号とその北端に僅かに確認されたプランを15号とした。15号は形状、規模、カマド等大半は不明であるが10号の西壁に直交するプランの検出と伴出遺物の時期差より10号とは別遺構と判断出来た。以下、残存状況の良い10号住居跡について見てゆく。

主軸方位 N-12°-E

形状 隅丸長方形と思われる。

規模 東西 4.8m、南北は残存部で 6.4m を計る。壁高は平均して約20cmである。

重複 北西端部で15号と重複する。15号床面は10号よりも低いために残存していたが、10号北端部の西壁を切り込んだかどうかは確認し得なかった。両住居跡の判出遺物に見られる時期差より15号→10号と判断しておきたい。

炉 残存部のほぼ中央に径50cm×32cmの範囲で焼土部分が検出されており、地床炉と考えられる。凹みは殆んどない。

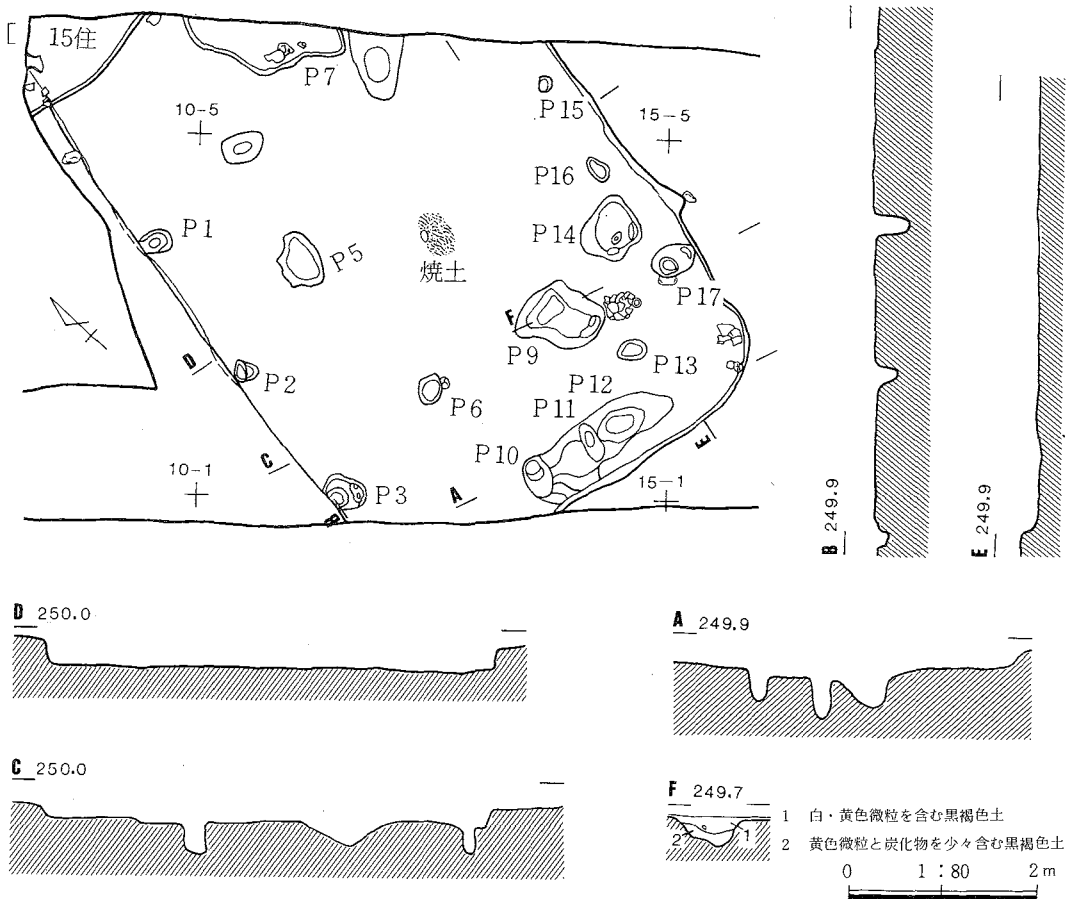


図23 10号・15号住居跡実測図

土 坑 プラン内より17基が確認された。西壁際のP1～P3は直線上に位置し、中心間の間隔は約1.7mを計る。東壁やや内側にはやはり直線状にP15～P17が存在し、このうちP16はさきのP2と対応する位置にある。P4は46cm×30cmの楕円形、P5は60cm×44cmの不整楕円形、P6は34cm×24cmの楕円形を呈す。また、P7、P8、P9、P14は各々やや大形の不整形土坑でP9では深さ28cmの掘り込み内に2層の覆土を確認した。P10～P12は全体にやや凹んだ内部に存在する住居南壁際の土坑で、P10とP11はそれぞれ南壁に直交する形で長軸をとる楕円形土坑である。P10は44cm×30cmで深さ34cm、P11は42cm×18cmで深さ44cmを計る。またP12は55cm×34cm、深さ36cmでP11と接している。

遺 物 図24に示した1～4が本住居跡伴出遺物である。1はP9東より潰れた状態で、2は15号肩口付近と本住居南東コーナーとの接合資料、3は炉跡北側、4は15号肩口付近よりそれぞれ出土している。

備 考 10号住居15号住居は重複及び出土遺物の検討から、15号住居を切る形で10号住居が構築されている。10号住居では多くの土坑が検出されているが、南壁際のP10～13については、8号住居とともに規則性が見られ、階段等の出入口にかかわる施設としてとらえられよう。10号住居については完形遺物が1の甕のみで、15号住居については調査面積が少ないため完形に近い遺物も少ないが、その検出量から多くの遺物を伴うものと考えられる。

住居形態及び出土遺物から10号住居は弥生時代後期、15号住居が中期後半に位置付けられる。

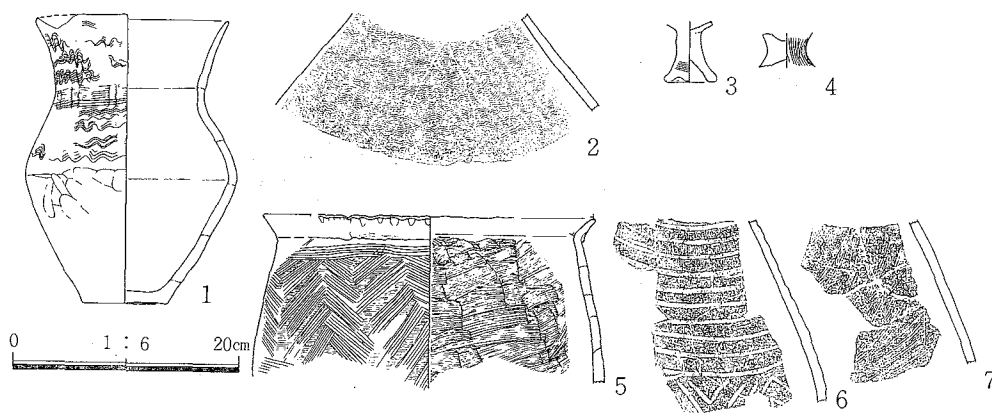
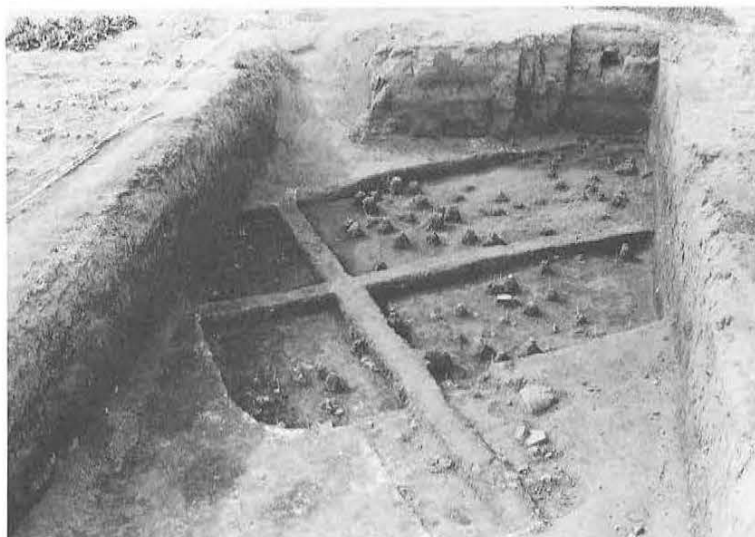


図24 10号・15号住居跡出土遺物（10号1～4、15号：5～7）

表7 10号・15号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・手法・焼成・他	色調	残存	出土
1	甕	口 16.6 底 7.2 高 25.4 最 18.5	体部中位やや上に最大径をとり、頸部から口縁までゆるやかに外反する。頸部は右回り二連止めの櫛描籐状文、他は櫛描波状文で体部上半は斜めヘラケズリ。体部外面下半は被火による赤変が見られる。	暗褐色	完形	10号 床面直上
2	壺	口 — 底 — 高 — 最 —	ハケナデ後。櫛描波状文。焼成良好。	灰褐色	肩部片	10号 覆土下位
3	高坏	口 — 底 4.1 高 — 最 —	内外面ユビナデ。手づくねによる雑な作りである。焼成良好。	灰褐色	脚部片	10号 床面直上
4	高坏	口 — 底 — 高 — 最 —	外面縦ヘラミガキ。接合部で欠損する側を脚側としてある。焼成良好。	暗褐色	脚部片	10号 覆土下位
5	甕	口 (29.4) 底 — 高 — 最 —	口縁は短く屈曲して外面に折り返し状の接合痕を残す。端部には浅く幅広の刻目を巡らしている。体部はハケナデ後最上位に櫛描籐状文、以下は櫛描山形文。内面は細かな横ハケナデ。焼成良好。	淡褐色	20 %	15号 覆土下位
6	壺	口 — 底 — 高 — 最 —	横位の沈線を等間隔に巡らし、直下は同具による鋸歯文。焼成良好。	灰褐色	肩部片	15号 覆土
7	壺	口 — 底 — 高 — 最 —	斜めハケナデ。焼成良好。	灰褐色	肩部片	15号 覆土下位



10号・15号住居跡遺物出土状況 (右後方が15号)

〈8号住居跡〉

主軸方位 N-20°-E

形 状 住居北半が調査区外のため不明。残存する南西および南東コーナーは比較的角ばった形状をしており、また住居西壁はやや西側に広がって延び、少々不整形ではあるが長方形と思われる。

規 模 東西 6.7m、南北は西壁際で 5.6m が残存する。壁高は北側区域壁面で約50cm、南側では確認面より30cm強を計る。

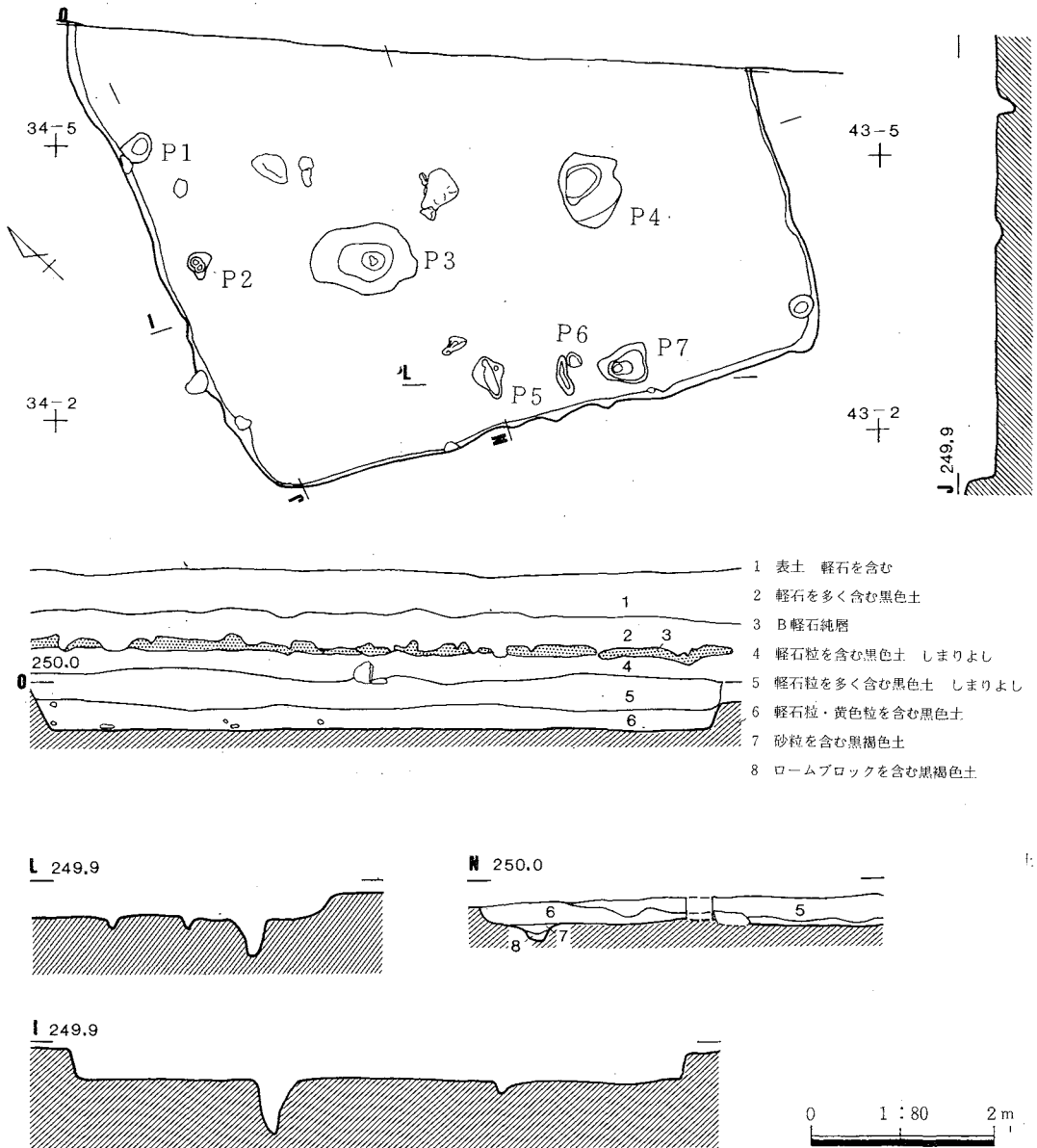


図25 8号住居跡実測図

重複 なし。

炉 不明。

覆土 2層に分層される。

土坑 8基検出された。このうちP3とP4は住居中央寄りの短軸ライン上に位置する。上端の掘り込みは僅かな傾きで中心は尖り気味に底部へ落ち込む。平面形は共に不整形で深さはP3が58cm、P4は14cmと浅く底面も狭い。P1、P2は西壁側に位置し、P1は径33cm×26cm、深さ18cmの断面U字状、P2は径25cm～30cmの不整形を呈する深さ10cm弱の凹みである。P5～P7は南壁やや内側に並ぶ。P5とP6は壁に直交する長軸をもつ不整楕円形を呈し底面も同様に細長い。P5は48cm×33cmで深さ12cm、P6は44cm×13cmで深さは15cmを計る。P7は52cm×40cm、深さ40cmを計るやや大きめの不整形土坑である。P8は東壁際コーナー寄りの小土坑で径25cm程の円形を呈している。

遺物 甕及び壺形土器がまとまって出土している。図26の1は住居西壁中央付近と南西コーナー部の2か所に破片が集中していた。2は南東コーナー部、3は中央から西側、4は北西部、5は南東コーナーやや西である。7はP4南側上端付近で8はP3に南接して破片がまとまる。9は1と同様西壁側と南西コーナー部の破片が接合、10も南西コーナー、11はP3東側より出土した。これより全体の傾向として住居中央から西側にかけて遺物が集中していた。また、中央付近床面には45cm×30cm程の礫を伴っている。

備考 やや大型の住居となり、南壁際中央にはP5～P7があり出入口にかかわる遺構としてとらえられる。10号住居にあるような3つのピットを包括する凹は見られないが、楕円形を呈する各ピットの配置には規則性が見られる。

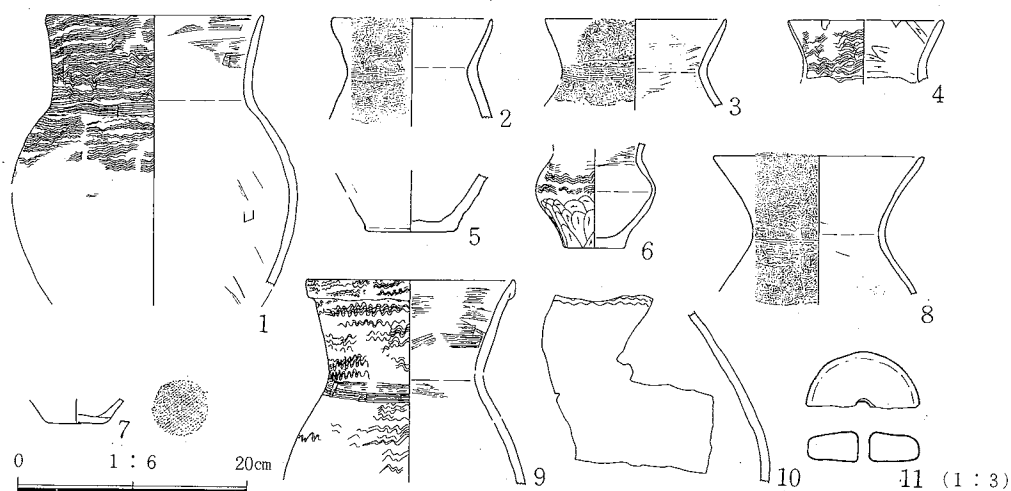


図26 8号住居跡出土遺物

表8 8号住居跡出土遺物観察表

No	器種	法量 (cm・g)	形態・手法・焼成・他	色調	残存	出土
1	甕	口 19.3 底 —— 高 —— 最 (25.5)	胴上半に最大径をとり、口縁は僅かに外反しつ長く立ち上がる。頸部外面に簾状文(右廻り4連止め)。胴上半と口縁は波状文、口縁内面ハケナデ。焼成良好。	灰褐色	50 %	覆土下位
2	甕	口 (14.0) 底 —— 高 —— 最 ——	頸部でやや屈曲し、口縁端部は受口状に立つ。頸部簾状文(右廻り2連止め)後、口縁部と体部に波状文。焼成良好。	灰褐色	30 %	床面直上
3	甕	高 (15.9) 底 —— 高 —— 最 ——	2と同様の形態をなす。頸部簾状文(右廻り2連止め)後、口縁部と体部に波状文。焼成良好。	淡褐色	20 %	覆土下位
4	甕	口 (13.7) 底 —— 高 —— 最 ——	厚手の口縁で端部は丸みをもつ。波状文を施文。焼成良好	褐色	口縁片	覆土下位
5	甕	口 —— 底 7.8 高 —— 最 ——	外面ヘラケズリ後ハケナデ。内面ナデ。焼成良好。	灰褐色	20 %	床面直上
6	甕	口 —— 底 4.9 高 (9.2) 最 10.5	平底部から体部上半に最大径をとり外反する小型甕。体部下半ヘラケズリ。上半は櫛描波状文。頸部に簾状文(左廻り2連止め)を施す。焼成良好。	灰色	80 %	
7	甕	口 —— 底 4.8 高 —— 最 ——	薄手で小型の甕底部片。編物痕が鮮明に残る。	褐色	底部片	覆土下位
8	壺	口 18.4 底 —— 高 —— 最 ——	頸部は簾状文(右廻り2連止め)。口縁部と体部に波状文を施文。内面ハケナデ。焼成良好。	淡褐色	20 %	覆土下位
9	壺	口 18.4 底 —— 高 —— 最 ——	折返し口縁。頸部に簾状文(右廻り2連止め)口縁部と体部に波状文。内面ハケナデ。焼成良好。	灰褐色	50 %	覆土下位
10	壺	口 —— 底 —— 高 —— 最 ——	地文は斜位のハケ目で、頸部付近は波状文。焼成良好。	灰褐色	肩部片	覆土下位
11	紡錘車	径 5.0 重 20 孔径(0.5)	円板状の土製紡錘車。中央は少々厚めで孔は僅かに斜めに通る。焼成良好。	淡褐色	50 %	覆土下位

〈遺構外〉

図27に示す。1は受口口縁の大型甕で口縁端部から外面は縄文LR上に波状文を描く。体部は細かい斜位ハケ目を地文とした後に山形文。頸部は簾状文。2は口縁から体部中位までほぼ巡る受口口縁の甕で、口縁端部に縄文、外面と頸部は波状文、それ以外には山形文を充填する。外面が橙褐色なのに対し内面から口縁の一部は黒灰色。3は壺の頸部片で $\frac{1}{2}$ 周残存。太い沈線区画内に縄文RLと鋸歯文を描く。内面は摩耗が激しい。

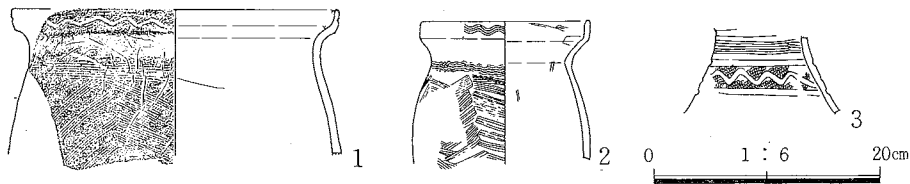


図27 遺構外出土遺物

3 古墳時代

< 3号住居跡 >

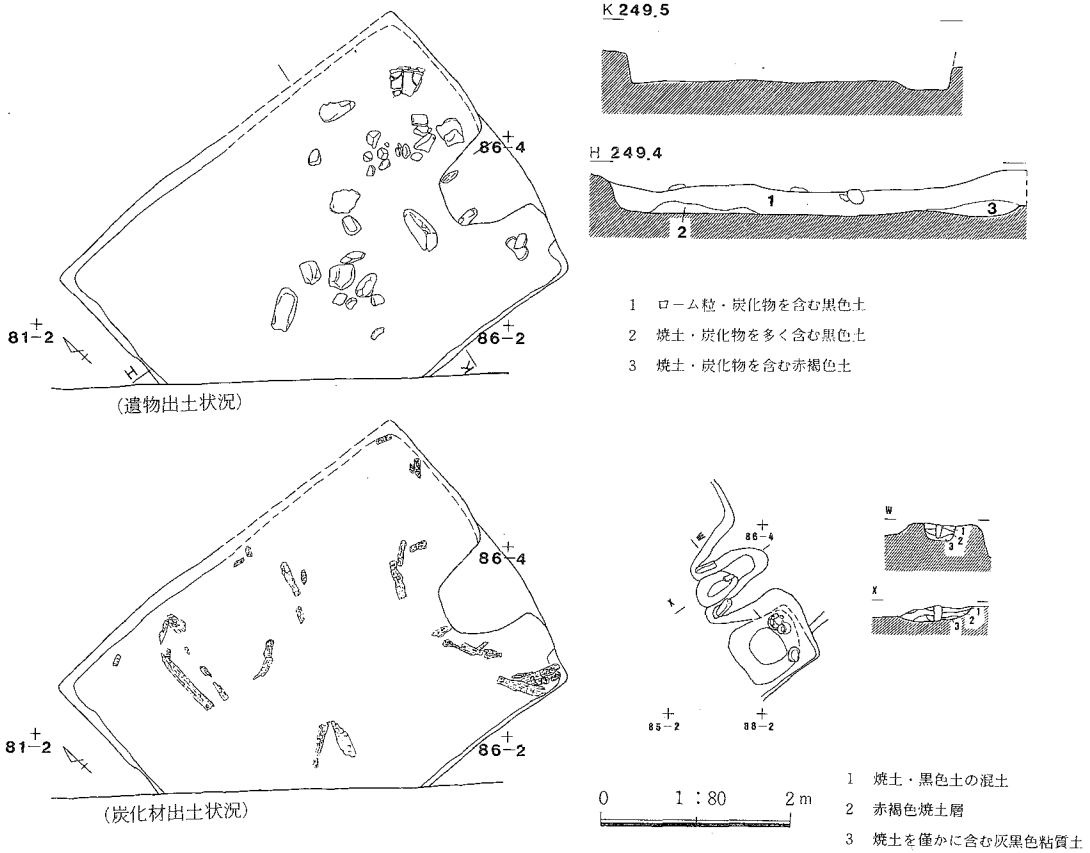


図28 3号住居跡実測図

主軸方位 N-130°-E

形 状 各コーナーともに角ばり壁も直線的で整った形状である。住居南西部に区域外で不明だが長方形を呈すと思われる。

規 模 住居中央付近で 4.4m × 3.3m、壁高約30cmを計る。

重 複 北東部分で13号及び11号住居跡と重複している。セクションでは不明確であるが本住居の伴出遺物と11号、12号の覆土遺物は本住居が先行することを示す。13号では縄文片を図示したが、他の住居覆土にも同片が若干混在することより、一応平安期として扱ってある。

カ マ ド 東壁南寄りに付設される。両袖部は壁内に30~40cm延びており内面端部に扁平な自然石を据えてある。内部は幅約20cmを計る燃焼部で中央には角柱状の支脚が立つ。覆土の状況は中位あたりに焼土が集中し、床面の粘質土は支脚下に及ぶことから貼床と思われる。

覆 土 3層に分層出来た。

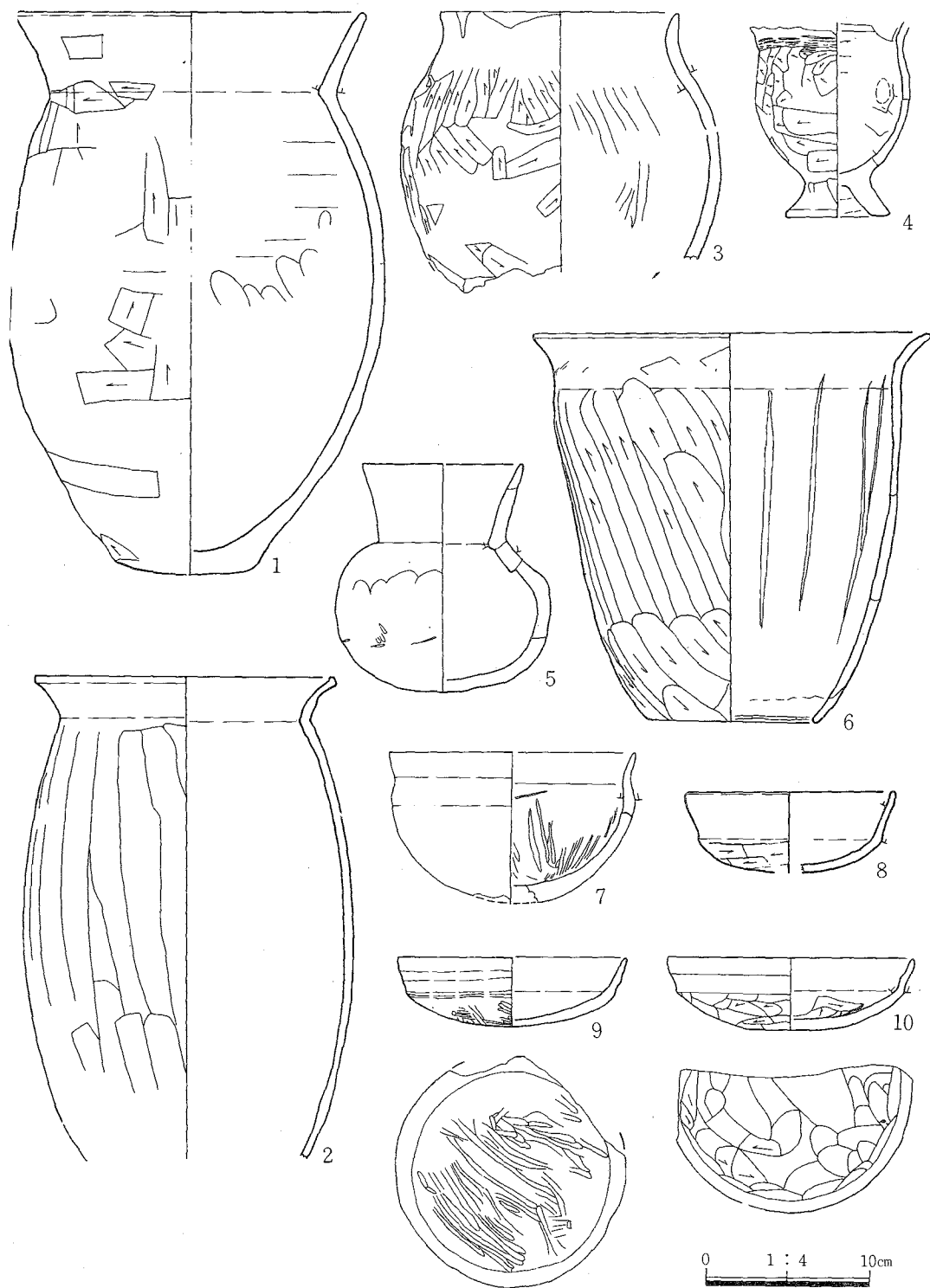


图29 3号住居跡出土遺物

土 坑 カマド右手の住居南東コーナーに貯蔵穴を伴う。南北64cmで東西は東壁下端より段状を呈して底面からの立ち上がりでは56cmを計るやや角ばった形状を示す。東側肩口に遺物が伴出している。

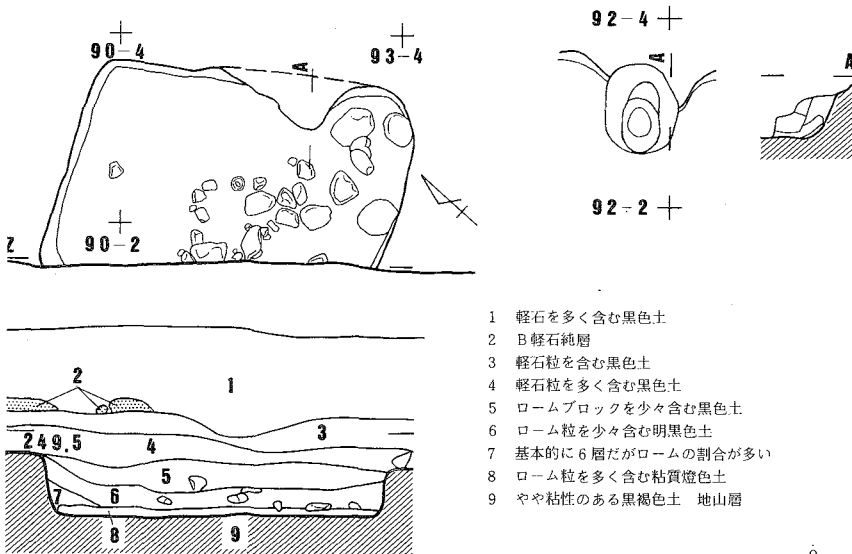
遺 物 図29に示す。4、6は床面直上遺物で北西コーナー部、カマド左手より出土。他は覆土下位で5、7、9は貯蔵穴に伴う。他に覆土下位に礫、床面より炭化材が検出された。

備 考 本住居の検出状況では、床面直上で多数の炭化材があり、完形を含む多数の出土遺物も含めて、焼失住居と考えられる。炭化材の配置状況では中央からは放射状の配置が考えられ、構築の状況を考察する資料としてとらえられる。また、同じく床面から多数の礫が検出されているが、廃棄後の混入のみでなく、屋根部分等に用いた建築材としての性格も考えられよう。

表9 3号住居跡出土遺物観察表

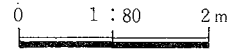
No.	器種	法量 (cm)	形態・手法・焼成・他	色調	残存	出土
1	土師器 甕	口 21.0 底 9.0 高 34.5 最 22.8	最大径を胴中位にとる砲弾形の長胴甕。胎土が粗く、全体に摩耗が進むため調整は不鮮明だが一部にヘラナデ、ケズリが見られる。焼成良好。	褐色	70 %	覆土下層
2	土師器 甕	口 18.2 底 — 高 — 最 20.1	胴中～上位に最大径をとる。砲弾形の長胴甕。口縁は屈曲気味に外反し、端部は面取り。胴部上～中位は下へ、下位は上への縦ヘラケズリ。内面は横ヘラナデ。口縁部はていねいなヨコナデ。焼成良好。	淡褐色	70 %	覆土下層
3	土師器 甕	口 14.6 底 — 高 — 最 19.6	口縁部は弱く外反する球胴甕。口縁外面ヨコナデ。胴部は縦及び斜めのヘラケズリが少々残る。外面は口縁側8cm程を残し、以下は煤で黒変する。焼成良好。	暗褐色	50 %	覆土下層
4	土師器 台付甕	口 — 底 6.2 高 — 最 —	厚くハの字状に開く脚部の小型台付甕。体部横ヘラケズリで台部はナデ、接地面はヘラケズリ。焼成良好。	淡褐色	80 %	床面直上
5	土師器 埴	口 9.0 底 — 高 14.0 最 13.1	全体に厚手。体部中位に最大径をとる。頸部縦ヘラナデ後ヨコナデ。体部は不明瞭。焼成良好。	赤褐色	90 %	貯蔵穴内
6	土師器 甗	口 24.0 底 10.0 高 23.7 最 —	底部全面穿孔型の大型甗。口縁内外面ヨコナデ。他、外面は縦ヘラケズリで上～中位は上へ、下位は下へ向かう。内面はヨコナデ後、雑な縦ヘラナデ。焼き締まりなく脆い。	淡褐色	完形	床面直上
7	土師器 埴	口 14.9 底 — 高 9.2 最 —	丸底の大型埴で口縁は外反気味に直立。口縁内外面ヨコナデ。体～底部は外面ヘラケズリ、内面放射状の暗文及び黒色処理を施す。焼成良好。	赤褐色	90 %	
8	土師器 坏	口 (13.0) 底 — 高 (5.0) 最 —	稜より立ち上がる口縁は上位で内湾。体部ヘラケズリで他はヨコナデ。焼成良好。	赤褐色	30 %	覆土
9	土師器 坏	口 14.0 底 — 高 4.3 最 —	浅い体部より稜をもって段状に外傾する口縁。口縁内外面ヨコナデ。体～底部外面ヘラケズリ後ミガキ。焼成良好。	褐色 褐	80 %	貯蔵穴内
10	土師器 坏	口 15.0 底 — 高 4.5 最 —	9同様口縁は上位で内湾。口縁内外面ヨコナデ。体～底部外面ヘラケズリ。焼成良好。	淡褐色	50 %	床面直上

< 2号住居跡 >



- 1 軽石を多く含む黒色土
- 2 B 軽石純層
- 3 軽石粒を含む黒色土
- 4 軽石粒を多く含む黒色土
- 5 ロームブロックを少々含む黒色土
- 6 ローム粒を少々含む明黒色土
- 7 基本的に6層だがロームの割合が多い
- 8 ローム粒を多く含む粘質橙色土
- 9 やや粘性のある黒褐色土 地山層

図30 2号住居跡実測図



主軸方位 N-64°-E

形状 残存部ではやや平行四辺形状に歪む。北東コーナーに比して南東コーナーは丸みをもつ。

規模 南北 3.4m、東西は残存部で 2.1m、壁高は北壁64cm、南壁46cmを計る。

重複 なし。

カマド 東壁南寄りに付設。明確な袖部は検出されないが燃烧部両脇が地山を掘り残した形で少々住居側に突出する。内部は焚口より僅かに凹み煙道へと抜け、燃烧部の中心は壁内にある。構築材等は伴っていなかった。

覆土 4層に分層出来た。

土坑 検出されない。

遺物 住居中央付近からの出土である。

備考 確認面からは比較的深い掘り込みが確認できたが、遺物の出土量は少ない。覆土内に多数の礫が混入しているが、性格は不明である。

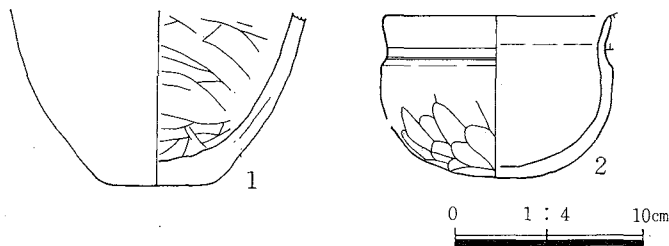


図31 2号住居跡出土遺物

表10 2号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・手法・焼成・他	色調	残存	出土
1	土師器 甕	口 — 底 4.2 高 — 最 —	平底・厚手の甕で胎土は粗。外面ヘラケズリと思われるが不明瞭、内面斜位のユビナデ。焼成良好。	暗褐色	20 %	覆土下位
2	土師器 甕	口 12.0 底 — 高 8.5 最 (12.4)	壺と判別が困難だが一応甕とした。体部は扁平な丸みを持ち、口縁は僅かに外反。底～体部は斜位ヘラケズリで他はヨコナデ。焼成良好。	橙褐色	50 %	覆土下位

<6号住居跡>

主軸方位 N-16°-E

形状 住居北東部が区域外のため不明ながら比較的整った長方形を呈している。

規模 4.6m×4.2mで東西に長軸をもつ。壁高は平均約30cmが残存する。

重複 調査区域際で12号と重複する。セクションで12号の床面ラインが確認され、本住居はさらに深い掘り込みで床面を形成していることが判明。6→12と判断出来る。

カマド 北壁中央に付設される。調査区域との境界部分のために全体は把握出来ないが壁下端より推定20cm程内側より袖石と思われる自然石が2個検出されている。また付近には僅かに焼土が認められた。掘り込みは全くない。

覆土 4層に分層された。

土坑 検出されない。

遺物 図33に示した。1は住居西壁中央やや内側より、2はセクションライン上の南壁中央付近床面からの出土である。

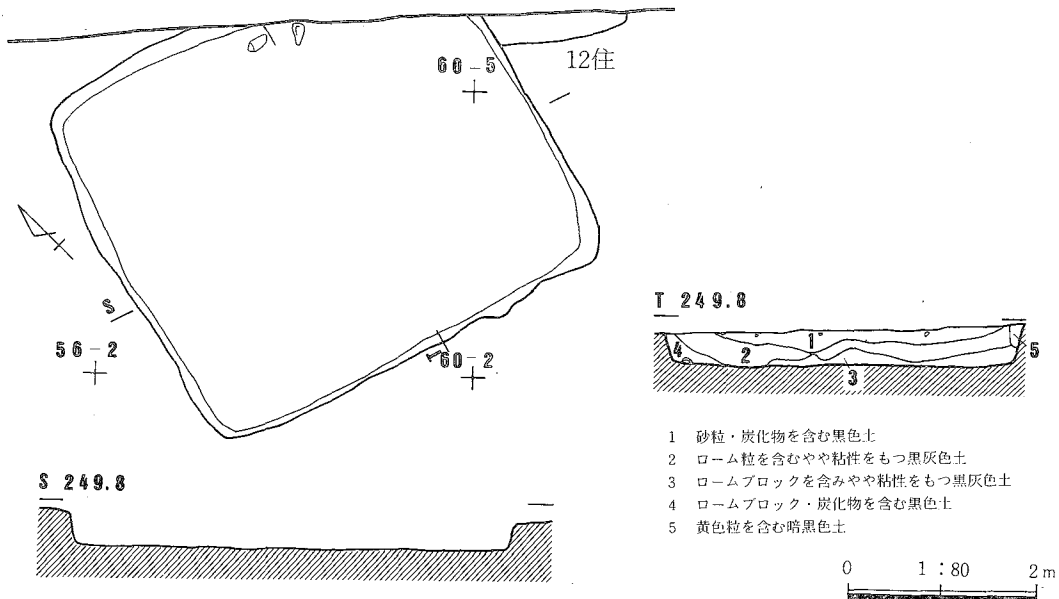


図32 6号住居跡実測図

備 考 北壁中央のカマド部分については、袖部にローム混じりの土層が確認されたが、明確ではない。

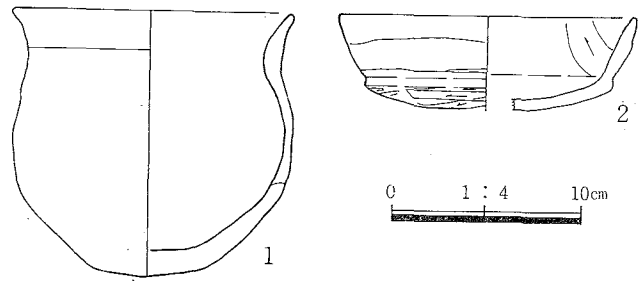


図33 6号住居跡出土遺物

表11 6号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・手法・焼成・他	色調	残存	出土
1	土師器 甕	口 15.0 底 6.2 高 14.0 最 15.0	口縁が弱く外反する厚手の小型球胴甕。最大径は胴中位。口縁内外面ヨコナデ、胴部外面縦ヘラケズリ。焼成良好。	淡褐色	90 %	床面直上
2	土師器 坏	口 (15.8) 底 — 高 — 最 —	浅い体部より稜をもって長い口縁が外傾する。口縁内外面ヨコナデ。体～底部外面ヘラケズリ。焼成良好。	淡褐色	30 %	床面直上

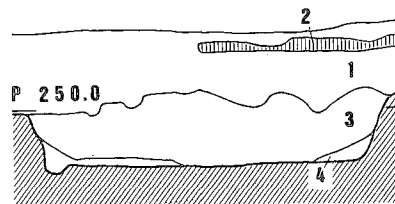
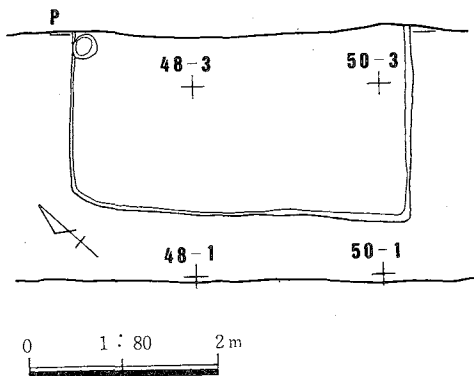
<7号住居跡>

主軸方位 不明。残存部での長軸方位がN-43°-Wを指すため、以下は調査区域外側を東として呼称する。

住居西側が残存し東側は調査区域外のため不明。北西、南西コーナー共に角ばり特に南西ではほぼ直角をなす。各壁も直線的で整った形状であると思われる。

規模 南北 3.5m、東西は残存部で 2.0m を計る。壁高は約60cmである。

重複 なし。



- 1 表土 軽石を含む
- 2 A 軽石純層
- 3 軽石を含む黒色土
- 4 ロームブロックを含む黒色土

図34 7号住居跡実測図

カマド 不明。

覆土 2層確認出来た。

土坑 残存部北端に1基検出された。径28cm、深さ約10cmで北壁に接する。

遺物 凶化し得るものはないが覆土より若干の縄文土器片と共に厚手で素地の粗い土師甕片が出土しており、古墳時代に属すると考えられる。

備考 確認面からの深さは比較的深いが、遺物の出土量はきわめて少ない。

〈遺構外〉

1は胴上半に張りをもつ長胴甕で口縁は大きく外反する。寸法は口径23.4cm、器高は推定36cm強を計る。胴部は基本的に縦ヘラケズリで内画はヨコナデ、口縁も内外面ヨコナデである。胎土は粗
2は埴輪片である。外面は縦、内面には縦及び斜めのハケ目が残る。

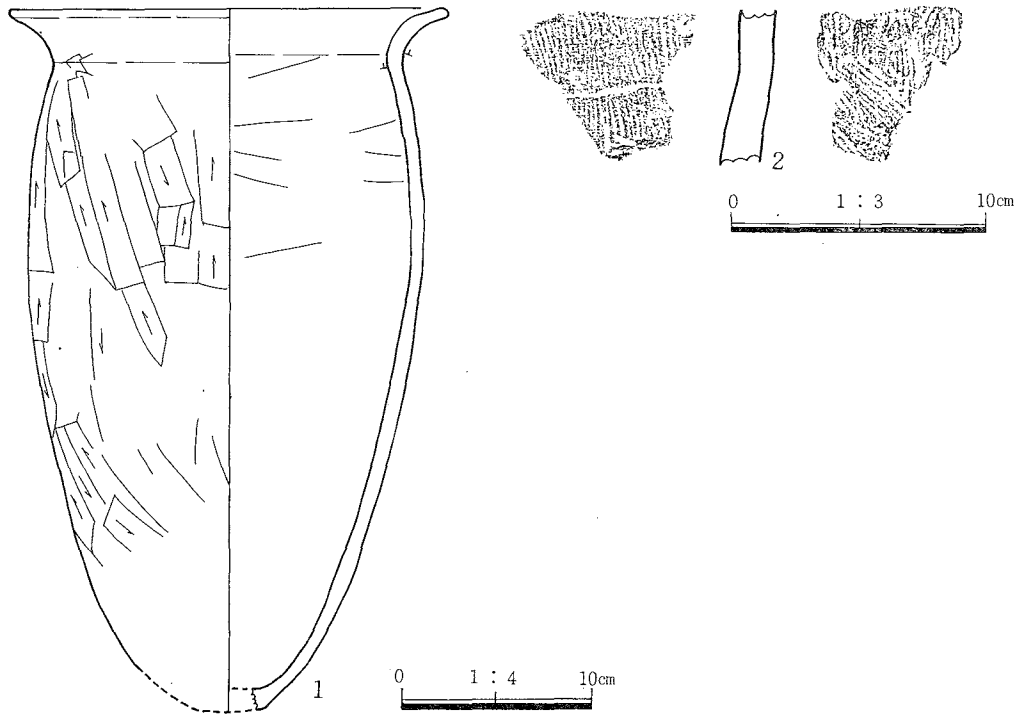


図35 遺構外出土遺物

4 平安時代

<11号住居跡>

主軸方位 不明。

形状 不明。

規模 残存部で南北 2.2m を計る。

重複 住居南側が3号と13号と重複する。平面及びセクションでは不明確であったが、伴出遺物では3→11・13を示す。11と13の関係は灰釉陶器の様相より11→13の可能性が考えられる。

カマド 不明。

土坑 3号住居北壁ラインと重複する形で隅丸長方形と思われる。80cm×90cm、深さ24cmが残存し、南側は3号の精査を先行してしまったために不明。

遺物 図40の1、2である。1は覆土中よりの出土、2は調査区域際の床面直上に伏置状態で出土した。他に覆土中より土師甕片が多く見られている。

備考 出土遺物2の下で炭化した植物が検出された。土坑は本住居に伴わない可能性が大きい。

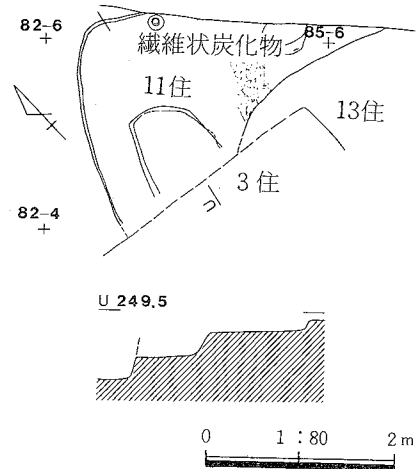


図36 11号住居跡実測図

<12号住居跡>

主軸方位 不明。

形状 不明。南壁の一部を残すのみである。

規模 不明。

重複 6号と重複している。セクション第4層下面が本住居の床面を示し、また伴出遺物から6→12と判断出来る。

カマド 不明。

覆土 本住居の覆土としては1層のみが確認された。

土坑 検出されない。

遺物 図40の3、4で覆土下位より出土した。

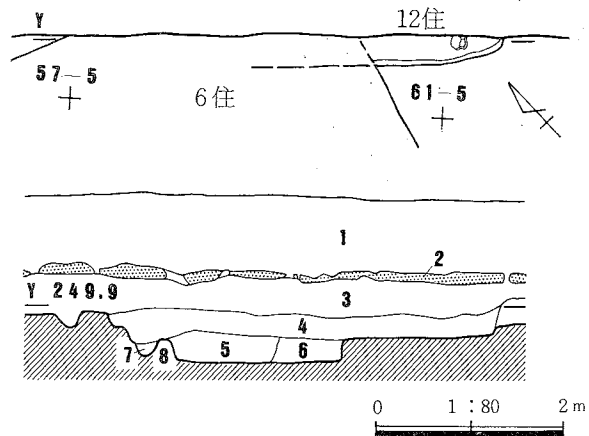


図37 12号住居跡実測図

- 1 表土 軽石を含む
- 2 B 軽石純層
- 3 軽石を含む黒色土
- 4 軽石・炭化物を少々含む黒色土
(本層下面が12住床面)
- 5 ロームを多く含む黒色土
- 6 焼土・炭化物を少々含む黒色土
- 7 炭化物を少々含む黒色土とローム層の混在
- 8 ローム層の突出部は6住のカマド袖部である

〈13号住居跡〉

- 主軸方位** 不明。
- 形状** 南東コーナーは角ばるが区域外にあたる北東部付近は壁が丸みをもち回り込む。重複のため全形は不明。
- 規模** 南北 3.4m、東西は 2.3m が残存する。壁高は東で18cmを計る。
- 重複** 3号及び11号と重複する。遺構精査時では不明確であったが伴出遺物では3→11・13を示し、11号の欄で記したように11→13の可能性が考えられる。
- カマド** 不明。
- 覆土** 2層に分層される。
- 土坑** 検出されない。
- 遺物** 図40の5～12に示した。
- 備考** 覆土に多くの縄文土器を含んでいる。遺物5はやや浮いた状態で出土した。

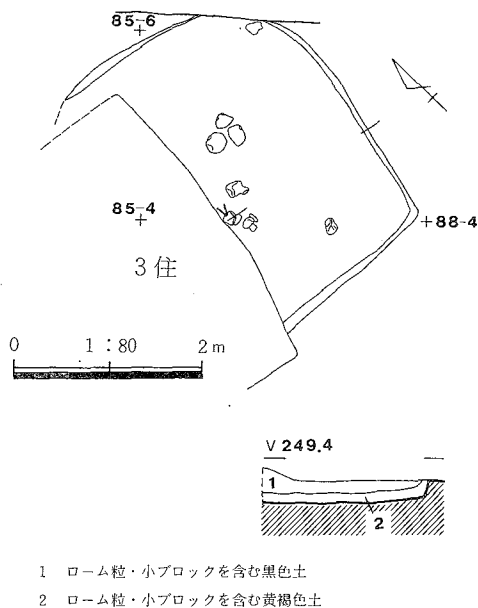


図38 13号住居跡実測図

〈14号住居跡〉

- 主軸方位** 不明。
- 形状** 西壁は直線的だが他は弧状を呈し不整形なプランが残存する。住居北東部は調査区域外のため不明。
- 規模** 南壁とされる所で約 2.0m、壁高は13cmを計る。
- 重複** なし。
- カマド** 不明。
- 覆土** 1層を確認した。
- 土坑** P1～P4が検出された。全て不整形な掘り込みで統一制、規則制は見られない。P3とP4は南東コーナーから東壁側壁際に接し、P4では床面から22cmの深さであった。
- 遺物** 図40の13の他、覆土より須恵埴、坏ともに小片と縄文片が若干混在する。
- 備考** 本遺構は調査面積も少なく性格の把握は難しいが、ここでは住居として扱っておく。遺物もほとんどなく土坑としてもとらえられよう。

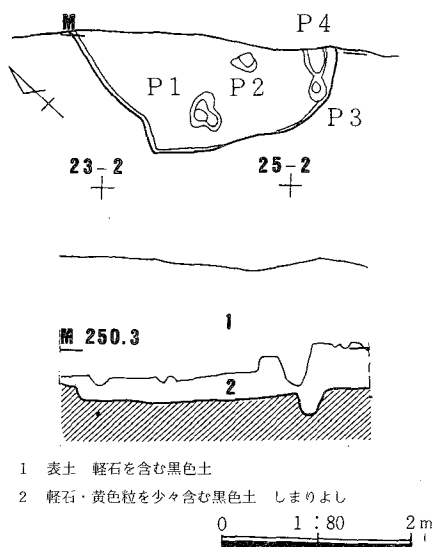
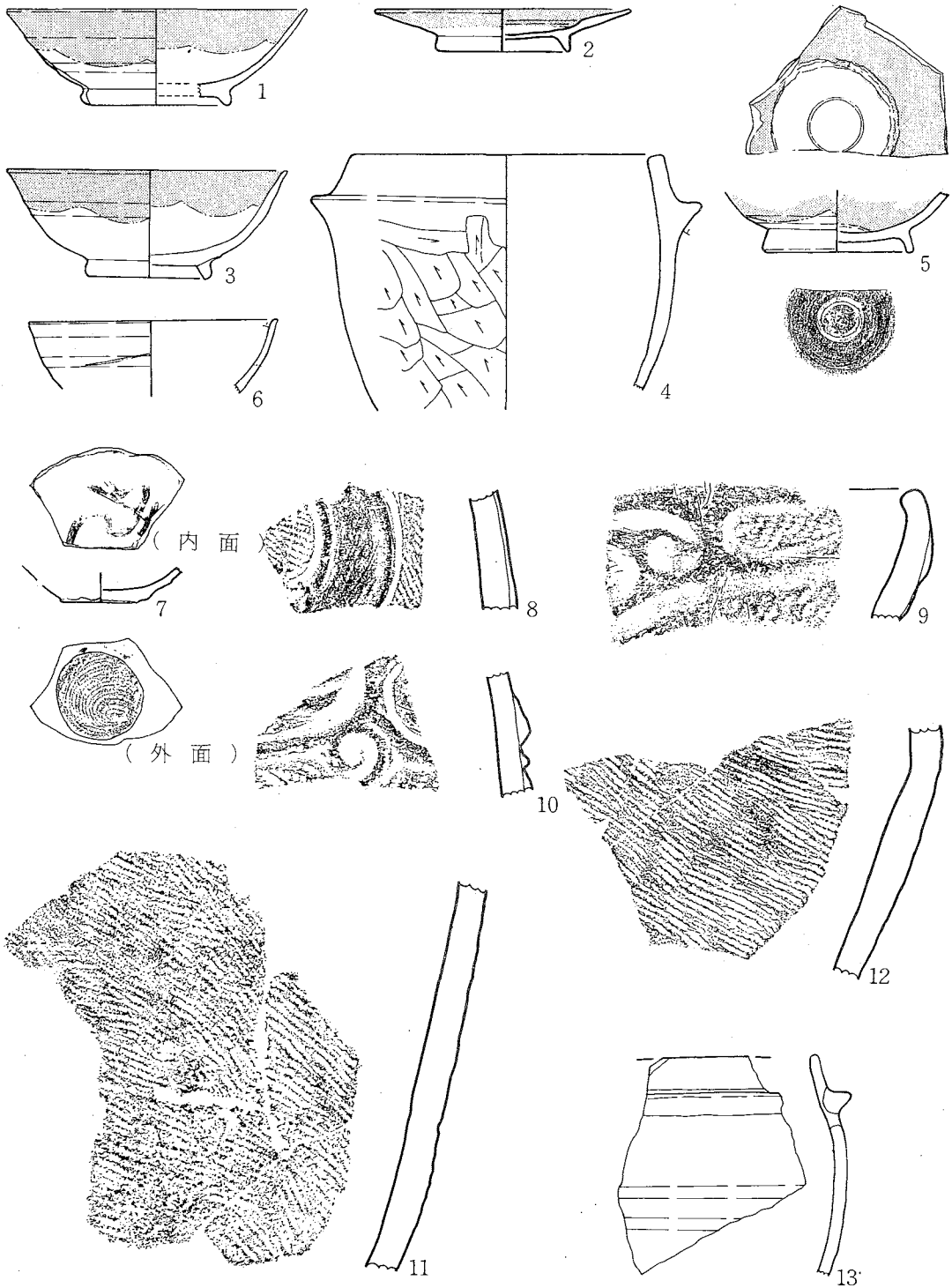


図39 14号住居跡実測図



11住：1、2 12住：3、9
 13住：5~12 14住：13

0 1:4 10cm

图40 11号·12号·13号·14号住居跡出土遺物

(8~12は1:3)

表12 11号・12号・13号・14号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・手法・焼成・他	色調	残存	出土
1	灰釉 埴	口 (17.7) 底 (8.3) 高 (5.7) ——	さほど膨らみをもたずに浅く開く大型埴。底部付近は肥厚。口縁～体部中位は漬け掛け施釉で発色は不良。体部下位回転ヘラケズリ。焼成良好。	灰白色	20 %	
2	灰釉 皿	口 15.3 底 7.7 高 2.6 最 ——	内面中程に段を有す段皿。底部全体と体部下位を僅かに残して刷毛掛け施釉。内面は煤の付着により多少程が黒変している。焼成良好。	灰白色	完形	床面直上
3	灰釉 埴	口 16.5 底 7.0 高 6.5 最 ——	小さめの台部より大きく膨らんで口縁端部が少々外反する大型埴、回転ヘラケズリは見られず、台の付け方は雑。口縁～体部中位漬け掛けと思われ、内面全体は降灰釉のため光沢をもつ。焼成良好。	灰白色	70 %	覆土下位
4	須恵器 羽釜	口 (18.6) 底 —— 高 —— 最 ——	口縁は内傾し端部は面とり。内面全体及び外面は鏝部直下までヨコナデで以下は雑なヘラケズリ。焼成不良。	褐色	20 %	床面直上
5	灰釉 埴	口 —— 底 8.8 高 —— 最 ——	台部径は大きめで断面長方形を呈す。体部下位に回転ヘラケズリ痕。内面は底部中心に径3cmの円と、台部径程の重ね焼き部の外側には灰釉が厚く流れている。	灰白色	20 %	覆土上位
6	須恵器 埴	口 14.6 底 —— 高 —— 最 ——	薄手で焼き締まりのない埴片。全面回転ナデ。	灰褐色	40 %	覆土中位
7	須恵器 坏	口 —— 底 4.7 高 —— 最 ——	底部右回転糸きり。内外面に墨書が認められ内面は「丞」と読める。焼成良好。	灰褐色	底部片	覆土
8	縄文 深鉢	口 —— 底 —— 高 —— 最 ——	隆帯区画の円文で外側は縄文LRである。内面はよく磨かれて滑らか。焼成良好。	暗褐色	胴部片	覆土
9	縄文 深鉢	口 —— 底 —— 高 —— 最 ——	隆帯による口縁部文様帯で区画内は縄文RL。内面は横ヘラミガキで滑らか。焼成良好。	暗褐色	口縁片	覆土
10	縄文 深鉢	口 —— 底 —— 高 —— 最 ——	隆帯区画で渦巻文を伴う。区画外には縄文RLを付す。	暗褐色	胴部片	覆土
11	縄文 深鉢	口 —— 底 —— 高 —— 最 ——	大型深鉢胴下位片と思われる。全体に縦ころがし縄文LRのみの施文である。焼成良好。	暗褐色	胴部片	覆土
12	縄文 深鉢	口 —— 底 —— 高 —— 最 ——	同上。11と同一個体である。	暗褐色	胴部片	覆土
13	須恵器 羽釜	口 —— 底 —— 高 —— 最 ——	口縁が内傾する羽釜。内外面回転ナデ。焼成不良。	灰褐色	口～ 胴片	覆土

〈畝状遺構〉

調査区東側で2か所にわたって検出された。本遺構は浅間B軽石の降下により埋没したもので、降下時の生産活動の状況を把握する遺構としてとらえられる。

畝状遺構1、2ともに畝方向に統一性が見られ、同一の遺構とも考えられるが、2については遺存状態は良くない。作物については肉眼では確認できていないが、畝の中央部分には一様に溝状のわずかな凹を確認できたことから、軽石降下時前後の時期に収穫できる作物が想定されよう。

出土遺物については、土師器・縄文土器片が確認できているが、図示し得たものは図の甕底部破片のみである。これは、やや黒色みを帯びた甕の体部下端を含む底部で、表面にハケメ調整痕を明瞭に残している。底部中央付近に焼成後の両面穿孔が施されており、紡錘車としての二時転用が想定される。しかし、穿孔の位置が円の中央から若干外れており、回転の用をなさないものとも考えられ、その性格は明確には把握できない。

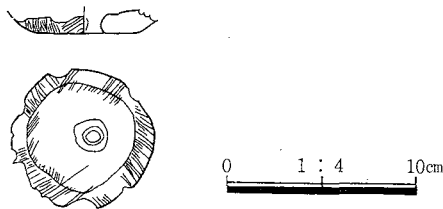


図42 畝状遺構出土遺物

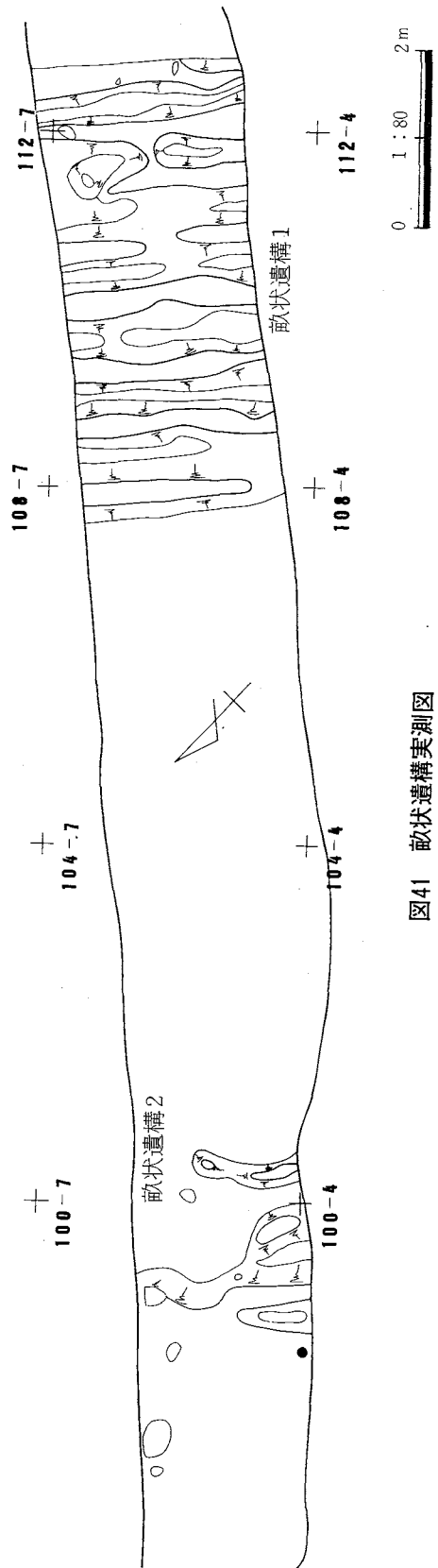


図41 畝状遺構実測図

遺構外

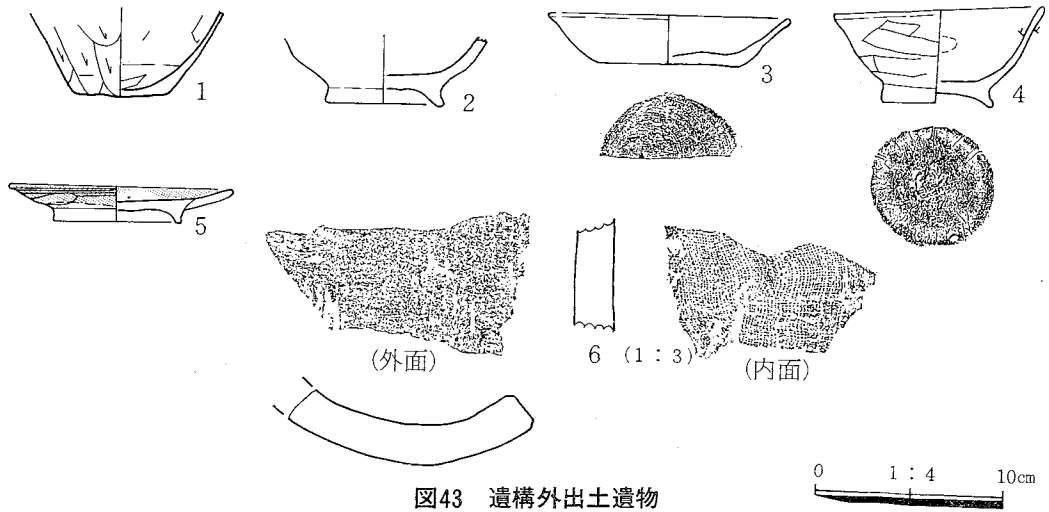


図43 遺構外出土遺物

表13 遺構外出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	形態・手法・焼成・他	色調	残存	出土
1	土師器 甕	口——底 5.0 高——最——	コの字状口縁甕片と思われる。非常に薄手で外面縦ヘラケズリ痕が残る。焼成良好。	赤褐色	20 %	覆 土
2	土師器 埴	口——底 6.2 高——最——	内外面回転ナデ。焼成良好。	淡褐色	20 %	覆 土
3	須恵器 坏	口 (13.0) 底 (7.4) 高 2.6 最——	体部~口縁は薄手で浅く、口縁は外反する。内外面回転ナデ。底部右回転糸きり。焼成良好。	暗灰色	40 %	覆 土
4	須恵器 埴	口 11.0 底 2.9 高 5.1 最——	全体に非常に雑なつくりで焼き締まりもまったくない。底部右回転糸きり後、台部貼りつけ雑なナデ。内外面ともに回転ナデ調整。	橙灰色	80 %	覆 土
5	須恵器 皿	口 11.8 底 6.6 高 2.1 最——	水平気味に開く皿で全体に非常に雑なつくり。施釉部は漬け掛け。体部下部は雑な回転ヘラケズリ。底部は右回転(静止?) 糸きり後、中心を残して回転ヘラケズリし、その後、台部を貼りつけるが台内側はほとんどナデていない。	灰白色	80 %	覆 土
6	布目瓦		内面に布目痕。	灰色	小片	覆 土

5 その他

〈不整形土坑群〉

調査区の西と中央の二ヶ所に土坑が集中して検出されている。

グリット27-3から32-2付近にかけて検出された土坑群は、円形及び溝状の遺構で構成されており、覆土は砂質でややしまりに欠けている。遺物は若干の土師器片を出土したのみであり、時期決定についての資料が乏しい状況であるが、総合的にみて耕作による掘り込みと考えたい。

調査区中央の6号住居西から3号住居西のグリット80-4までの間に、多くの土坑が集中して検出されている。円形及び溝状の土坑については調査区西部分の土坑群同様に耕作等による掘り込みの可能性が強く、遺物の出土もない。遺構断面図(A)を示した3基の遺構からなる土坑群については土師器甕片、縄文土器片を出土しているが図示はし得ない。確認当初は住居として扱っていたが、土坑状に別れていることから各々別の遺構として確認ができた。覆土はややしまりのある黒色土で、最東部の土坑については覆土中に礫を含んでいる。本遺構の性格については資料に乏しく考察困難であるが、平安時代に属す遺構の可能性も考えられる。

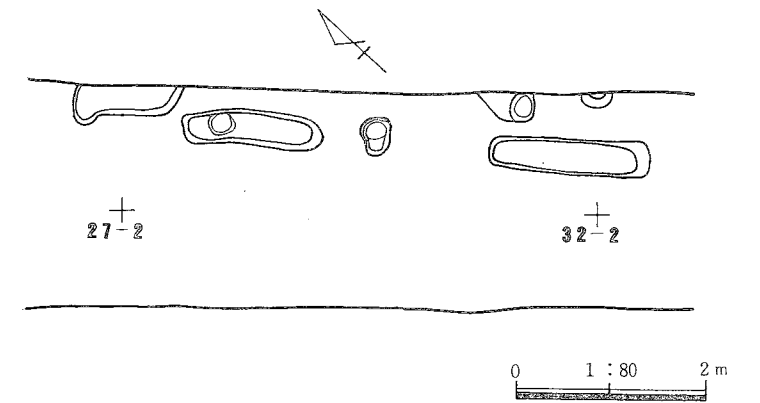


図44 不整形土坑群実測図(1)

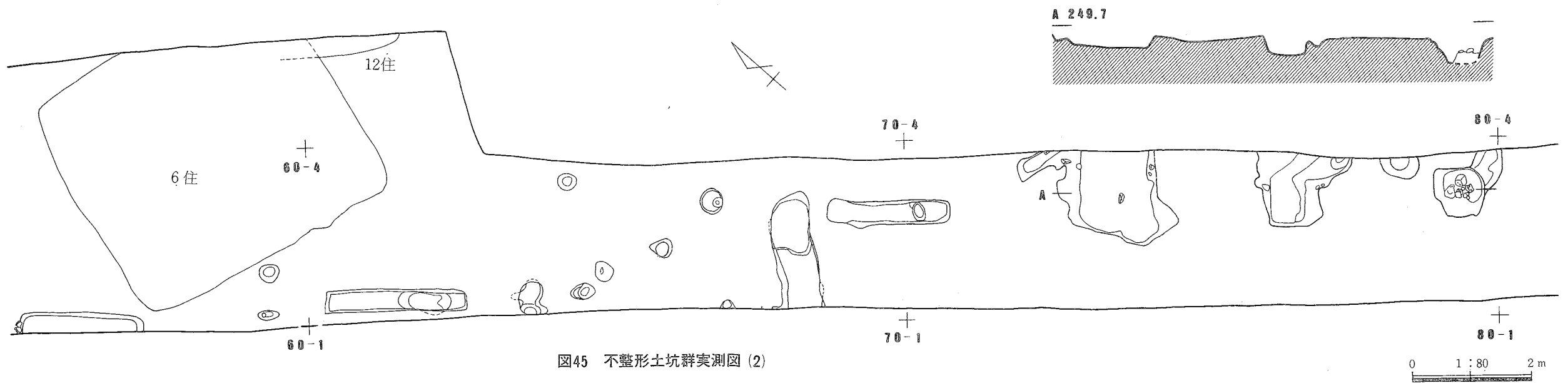


図45 不整形土坑群実測図(2)

第3章 ま と め

今回の調査及びこれにかかわる問題点について若干の考察を加えてまとめとしたい。

調査は、町道拡幅に伴う事前調査であり、ほぼ全域にわたってトレンチ掘削による試掘調査を実施して、遺跡の全容解明につとめた。

確認された遺構と遺物

縄文時代	遺構	石組状遺構と石組炉	1
	遺物	縄文土器、石器	
弥生時代	遺構	住居跡	3
	遺物	弥生土器	
古墳時代	遺構	住居跡	4
	遺物	土師器、須恵器、埴輪	
平安時代	遺構	住居跡	4
		畝状遺構	2
	遺物	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦	
時代不明	遺構	不整形土坑群	2

本遺跡の性格については、国衙遺跡群Ⅰ森浦・朝日遺跡との一連の遺跡としてとらえられる。縄文時代では、調査区西側より出土した注口を持つ浅鉢については、前橋市の荒砥二之堰遺跡出土注口浅鉢が類例として見られる。朝日遺跡では小礫をドーナツ状に配した柄鏡形敷石住居が確認されているが、この類例も同じく荒砥二之堰遺跡に見られる。また、調査区東部で検出された石組状遺構については、その形態から埋葬施設を含む配石遺構になる可能性を考えているが、現時点では調査面積が少なく、正確にその性格をとらえるには今後の調査の成果を待って全体像をつかむ必要がある。

弥生時代では、中期後半に位置付けられる壺・甕が、遺構外遺物とあわせて好資料となっているが、住居の概要については不明であり周辺における中期集落の分布状況の解明が待たれる。後期では、住居から中部高地系の櫛描文をもつ樽式土器が出土している。松井田町における弥生後期の遺跡の分布は、周知の遺跡及び発掘調査の増加とともに増えている。そのほとんどが樽式土器を伴う遺跡であるが、人見谷津遺跡では縄文施文系と櫛描文系の両方の特長を示した住居出土一括遺物が確認されている。国衙周辺では、以前から該当期の遺物の散布が認められていたが、今後の調査により集落の状況がつかめるものと考ええる。また、九十九川流域における弥生時代の遺跡で、発掘調査をとおして確認された遺跡は国衙遺跡群Ⅰ・Ⅱのみであり、今回の調査結果は該当期の当地域を考察するための資料として位置付けられる。

古墳時代については、今回の調査では住居の検出をみたが、森浦朝日遺跡の調査では古墳の検出のみで集落にかかわる遺構は検出していない。検出された住居は調査区の中央を境にして東部分で

検出されており、西部分では空白となっている。仮に該当期最西端の7号住居を集落の限界とすると、西の森浦地区で確認されている後期古墳群との間に、約100mにわたる空間が存在することとなる。各古墳の年代と性格を十分に検討する必要があるが、現時点では生活の場としての居住空間と墓域としての古墳の配置に一定の計画性があったとも考えられよう。国衙地区では本遺跡の東と北にも古墳群があり、これらに囲まれたこの地域が該当期における集落の中心となった可能性が大きい。

平安時代については、「国衙」という官衙に関係した地名と古代「東山道」の存在についての、なんらかの資料が確認されるかどうか調査前より注目されていた。調査の原因となった町道国衙・朝日線には東山道の可能性が考えられており、今回の調査で遺構の確認が期待されていたが検出にはいたらなかった。国衙の問題で、上野国府は未だ確定されていないが、現在では群馬町から前橋市の総社地区にわたる上野国分寺と関連した地域に想定されている。今調査における「国衙」関連についても、遺構は検出されていないが、遺物として布目瓦が出土したことは特筆できる。従前より国衙地区内において布目瓦が見つかったとの言伝えはあったが、実物については確認できていなかった。該当期における布目瓦を用いた建造物の特殊性を考慮すると、当地の地名に由来する国衙関連の問題については、可能性を含めて今後の調査と研究に委ねたい。

国衙遺跡群が所在する平坦部は、縄文から平安にわたる複合遺跡であり、九十九川流域における歴史の解明には重要な役割をはたすものと考えられる。今回の調査においても遺跡内のごく一部について実施されたものであり、「東山道」・「国衙」を含めた種々の課題を解決する資料については継続して調査研究の必要性がある。

今回の調査対象地は、従前より町道としての生活道路の性格を持っており、長期間にわたって交通を遮断することはできない状況にあった。更に、工期との関係から一部について確認のみに終わった部分があることを記しておかねばならない。

該当地域において町道拡幅により周辺地域の生活上の利便がはかれることは、住民福祉向上という面では非常に有意義なことと考えられる。しかし、これにより地域の住宅化などの諸開発行為に弾みがつくものと考えられることから、それに起因した遺跡の保護対策も並行して実施される必要があるだろう。

(附編) 国衙と布目瓦

松井田町文化財調査委員 上原富次

国衙こくがと言え、近世における村落としての国衙よりも先に、律令制度による国衙を思い起こす。

ここ松井田町大字「国衙」もご多分に漏れず、その地名に魅せられて来訪する研究者は多い。しかし、今までに律令制における国衙と結びつくような物証は何一つとして発見されなかった。

上野の国衙、即ち、上野の国の国司が政務を執る庁舎のあった所は、従前より現在の前橋市元総社町と大友町にまたがる元総社町東端の地域がそれにあたると推定され、これが定説となっている。

郡はクニとも読むから、これが転じて郡衙こくが=国衙となったのではないかという説もある。しかし、群馬大学教授であった故尾崎博士は、郡衙(郡庁)の所在地であった所は御門みかどとか帝みかどという地名で残っているという。即ち、勢多郡粕川村月田字御門、新田郡新田町中江田字帝(註1)等である。従って尾崎博士は松井田町の国衙については一言も触れてはいない。木下良氏(国学院大学教授)の説によると、律令初期の国衙は国の中央に位置し、律令制が衰退してきてから移転した国衙はずっと後退して規模も小さく国境に近い所にあるという。その上、国府、国庁は中央政府の正式呼称として用い、国衙はむしろ地方での用語として使用されたのではないかと、(註2)と言っている。

940年、平将門の乱によって上野国府は将門軍に攻め取られているから、この後の一時期、国庁として規模を縮小して上信国境に近いここ松井田の「国衙」の地に国庁を移したのではないか。だが、当地については考古学的にも文献的にも、民俗的にもここが「国衙」であったという何の証もない。しかし、愛知県松下町字国衙、山口県防府市佐波令字国衙、山梨県東八代郡御坂町字国衙等は皆それぞれに尾張国、周防国、甲斐国の国衙跡だという。ここの国衙は松井田町大字国衙と呼ばれ、字名として現存するのに何故に伝承の一つさえも無いのであろうか。

大字国衙の地は江戸時代には主として安中藩領に属し、高245石8斗余り、戸数59程で、旭神社(総鎮守)自性寺を持って立派な一村を形成していたのである。この村のほぼ中央を西から東へ推定東山道が縦貫している。(註3)そして東山道につくられたという一里塚が昭和20年代まで残っていた。この道はまた、天正18年(1590)8月、徳川家康が関東入国の際に通って行った道でもある。

この辺りは須恵器片や大甕の破片が表採されて早くから注目されていた地域である。昭和59年から60年にかけて、町営住宅建設に伴う国衙森浦・朝日遺跡の発掘調査が行われた。この時、桑園の下に完全に埋没していた古墳2基が発掘され、耳環、金銅製飾付大刀、刀子等々の出土を見た。この発掘された古墳より北に道を隔てて九十九22号墳があり、南方50m程のところにある竹林中にも九十九37号墳がある。更に、この道を東進すると国衙古墳群や小日向古墳群等があって、この地が早くから開けていたことを示している。

〈布目瓦〉

布目瓦は既にご存知のように古瓦の表、または裏にあたる面に布目を残している瓦のことである。瓦を作る時に、瓦を一定の規格に合わせて製作したり、作業の能率化をはかるために木型が用いられた。この木型から粘土がたやすく剥がれるように木型の上に布を敷いて置いた。即ち、木型の上

に布を敷き、その上に粘土をのせ、この粘土を延ばしたり、叩いたり、押しつけたりして成形するので、この時に布との接触面に布目が付くというわけである。

では、このようにして作られた「布目瓦」は、年代的には何時のものなのであろうか。

石田茂作氏の研究によると、布目瓦の上限は飛鳥時代であり、下限は豊臣秀吉が造った京都の聚落第および伏見桃山城の瓦だとい^(註4)う。更に石田氏は、古瓦にある布目は飛鳥白鳳時代は細かいという。これは、飛鳥白鳳の時代には瓦の需要が少なく、用いる土も粒子の細かなものを使用したので布も目のつんだ上等品を使ったのではないかと考察している。また、奈良時代から平安時代の初期にかけての布目は粗くなると云う。これは、黄麻の繊維を用いた為ではないかと見ているようだ。藤原時代から鎌倉時代になると布目は再び細くなると云う。これは、奈良・平安時代の布地に使用した黄麻が毛脚が比較的短く、且つ硬く、細糸を得るのに適していなかったのに対し、藤原・鎌倉時代に使用するようになった布地は毛脚が長く、繊維もやわらかで細糸を得るのに便利な苧麻を用いるようになった為ではないか、と云っている。このため、藤原時代の布目瓦は繊維糸がやわらかで毛ば立ちがするので糸目が屈曲し易いと云う。鎌倉時代の布目も大体は藤原時代と同様だが、縦糸を細くして横糸をやや太くしているものが多いと云う。

一方、日本歴史大辞典(河出書房)では、平安時代以降布目の繊維が細くなる理由を次のように説明している。「平安時代以降、ようやく繊維が細く、しなやかになる。これは、此の頃からインド綿が移入された為といわれている」。国衙出土の布目瓦の布地に用いられた繊維が黄麻のものか、苧麻のものか、はたまたインド綿の繊維か、私には全くその織別能力がない。ただ、本文46ページの図44No.6をご覧いただければ、布目がかなり「密」であること、縦糸より横糸の方が太いこと、布目に撓みがあること等をご理解いただけたらと思う。

上野の国分寺跡に散見される多くの布目瓦も、よく観察すると繊維の太さ、織り目の粗密、撓みの有無等、布目の様相は決して一様ではない。それは国分寺が完成した時点で既にそうであったのか、後世、補修時のさし替え、または葺き替え等によって生じたものなのか。もし後者であるとするれば、同じ国分寺跡の布目瓦でも100~200年の年代差をもって見なければならぬことになる。

以上のことから考察して、誠に大胆な推定ではあるが、当該布目瓦は上限を藤原時代、下限を鎌倉時代までと考えたい。

たった一片の布目瓦だが、この布目瓦の出土した意味は大きい。これを国庁としての「国衙跡」に大きく一歩近づくものとして位置付け、夏に今後の調査に積年の夢を託していきたい。

(註1) 『群馬の歴史 (3)大化改新以後の上毛野国』 群馬県歴史研究会 1970

(註2) 木下良「国府跡研究の諸問題」 『人文地理』第21巻第4号

(註3) 『歴史の道調査報告書~東山道~』 群馬県教育委員会 1983

(註4) 石田茂作「布目瓦の時代判定」 『考古学雑誌』35号 1947

発掘調査報告書抄録

ふりがな	こくがいせきぐんに
書名	国衛遺跡群Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	松井田町文化財調査報告書
シリーズ番号	第6集
編著者名	水沢祝彦、田口 修
編集機関	松井田町教育委員会
編集機関所在地	〒379-02 群馬県碓氷郡松井田町大字新堀 245
発行年	西暦1992年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 東 経		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
こくがいせきぐん 国衛遺跡群	まついだまち 松井田町 おほあざこくが 大字国衛	104019		36°19'30"	139°33'0"	19870309- 19870331 19880218- 19880331	650m ²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物	特記事項
国衛遺跡群	住居	弥生後半	竪穴式住居	3	土器	
		古墳後半	竪穴式住居	4	土器	
		平安前半	竪穴式住居	6	土器、こも石	
	生産	平安後半	畝状遺構	2	土器	
	他	縄文 前～後期	包含層 石組遺構	1 1	土器、石斧、石匙、凹石	

写 真 图 版



3 トレンチ



4 トレンチ



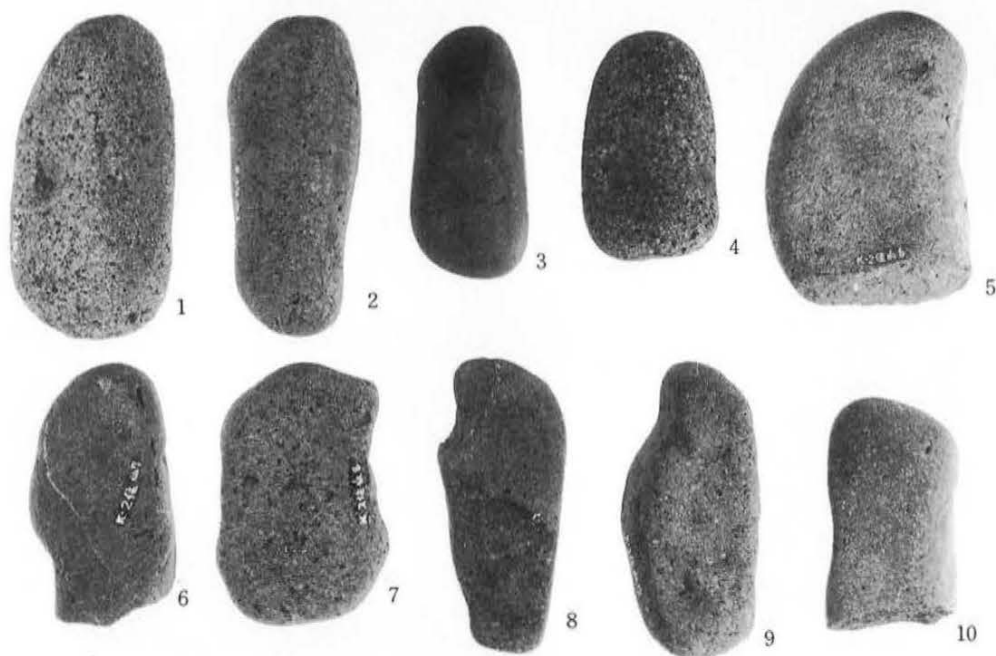
6 トレンチ調査前



3 t-2号住居跡



同、こも石出土状況



同、出土遺物



3t-3号住居跡



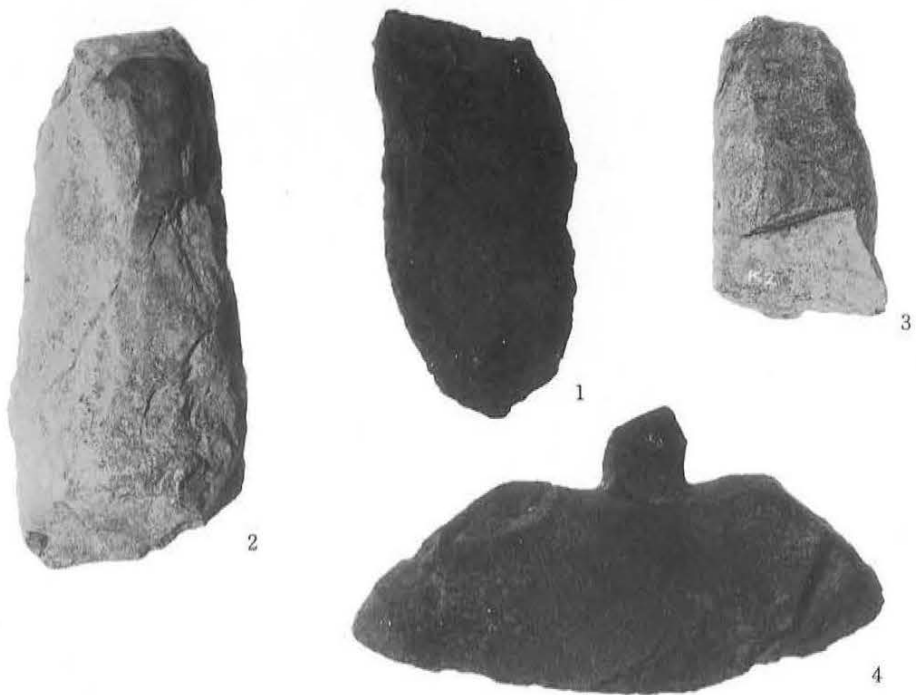
同、遺物出土状況



同、石出土状況



同、出土遺物

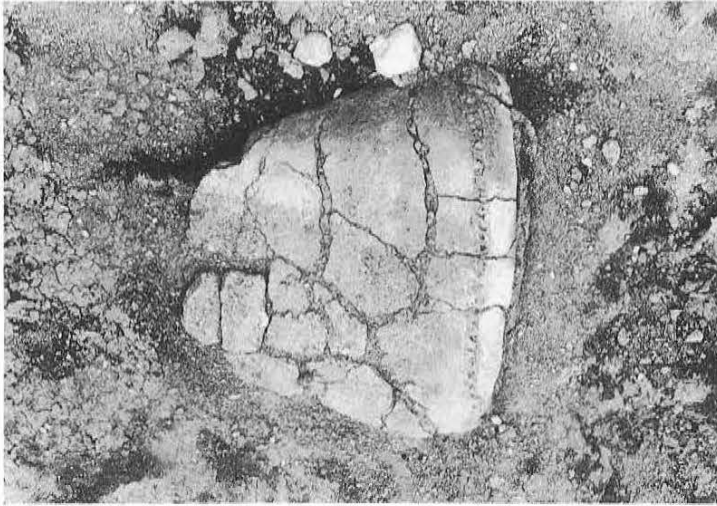


4·5 t—石器

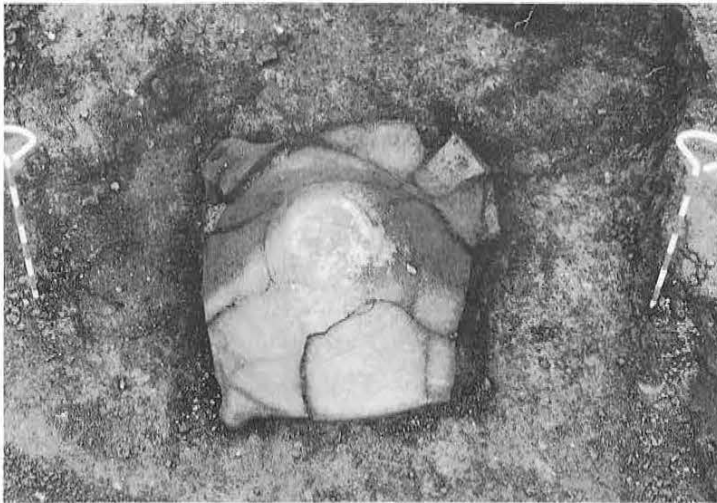




(左) 6t-石組状遺構
(下) 同、出土遺物



(左上) 6t-伏甕部上部
(左下) 同、下部
(下) 同、出土遺物

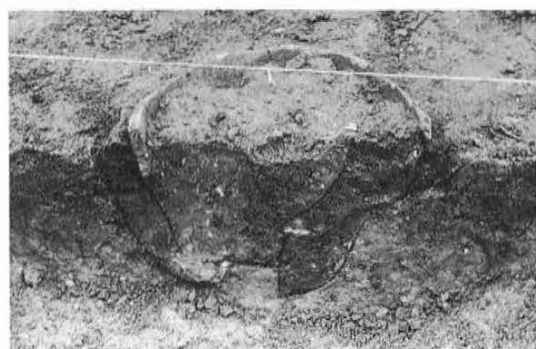




6t-埋甕1出土状况



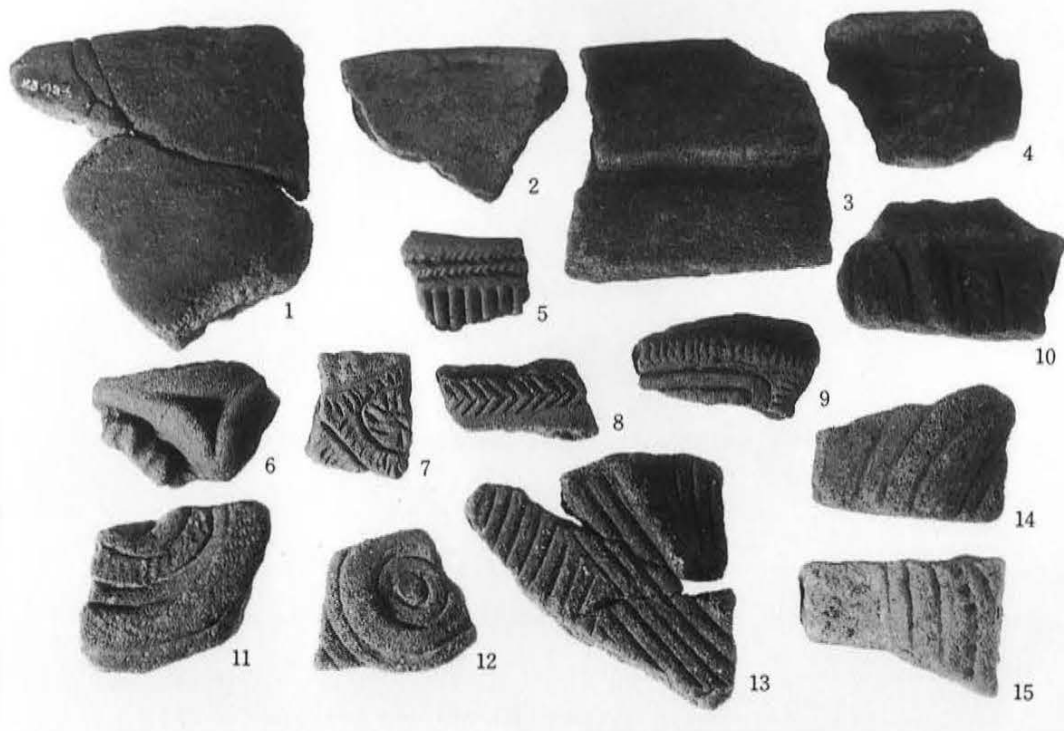
同、出土遺物



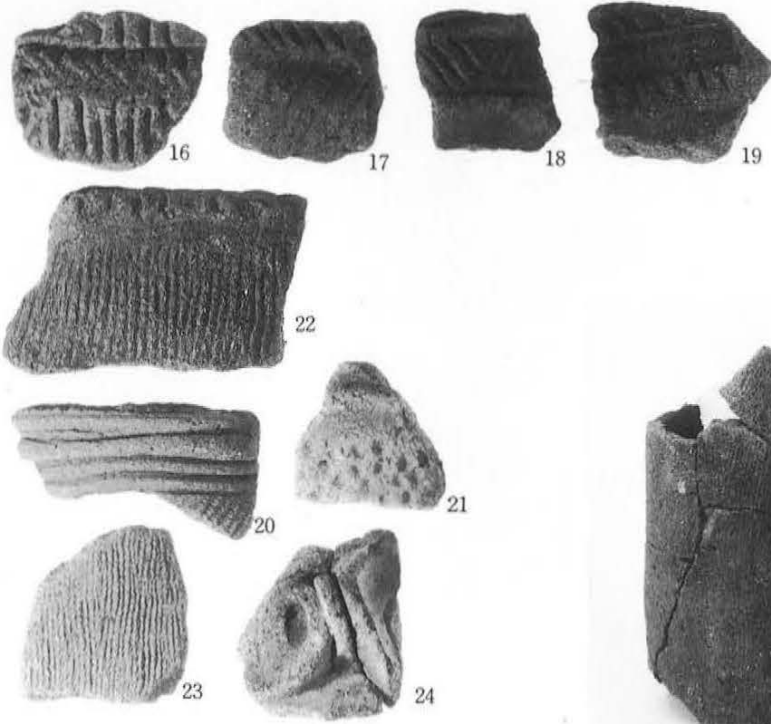
6t-埋甕2出土状况



同、出土遺物

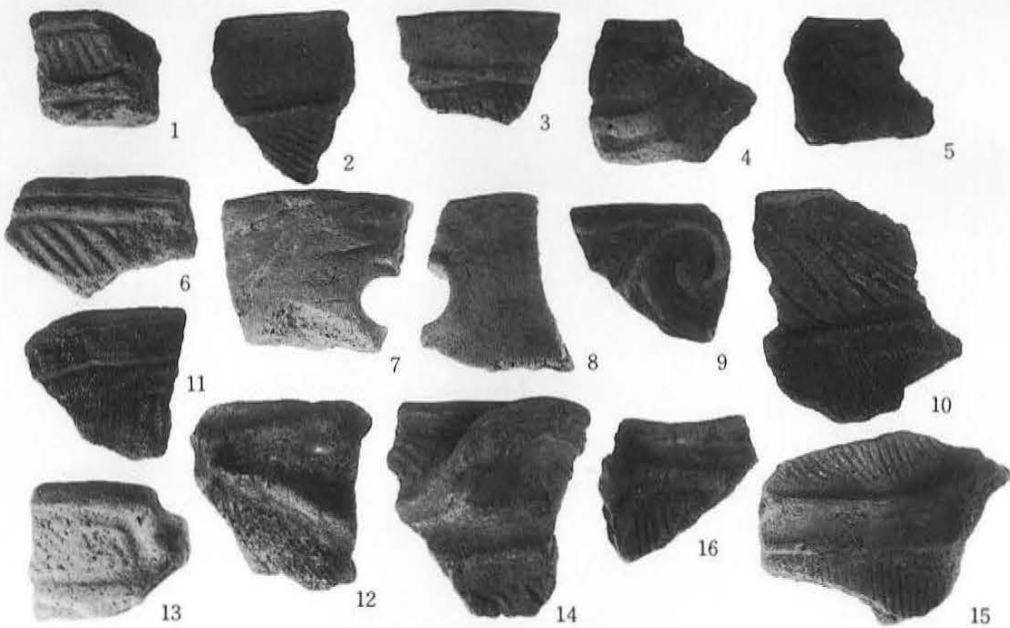


6t-第1群土器(1)

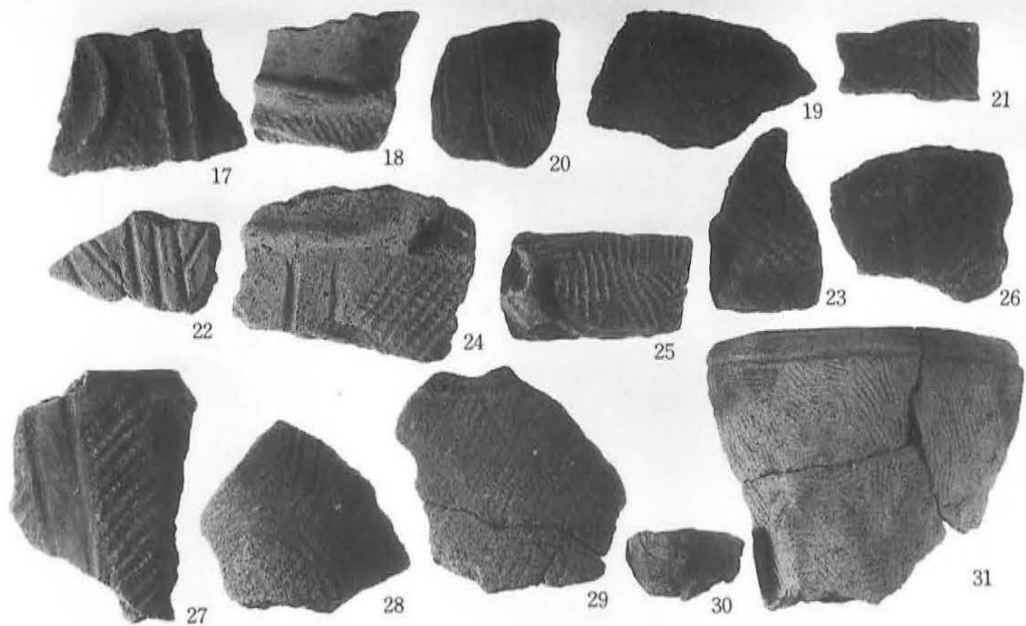


6t-第1群土器(2)

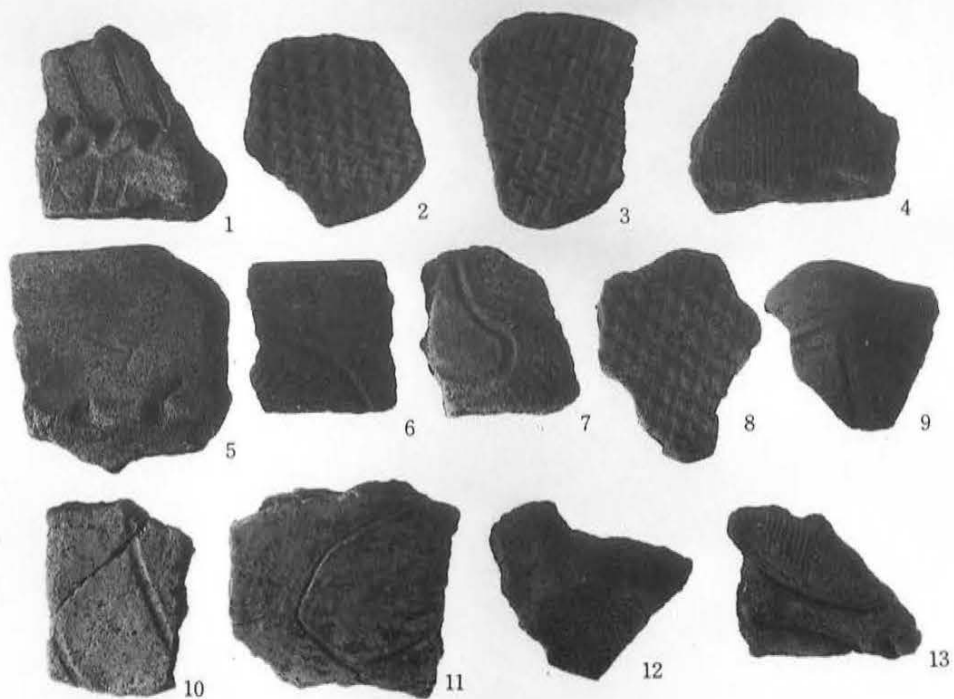
同、25



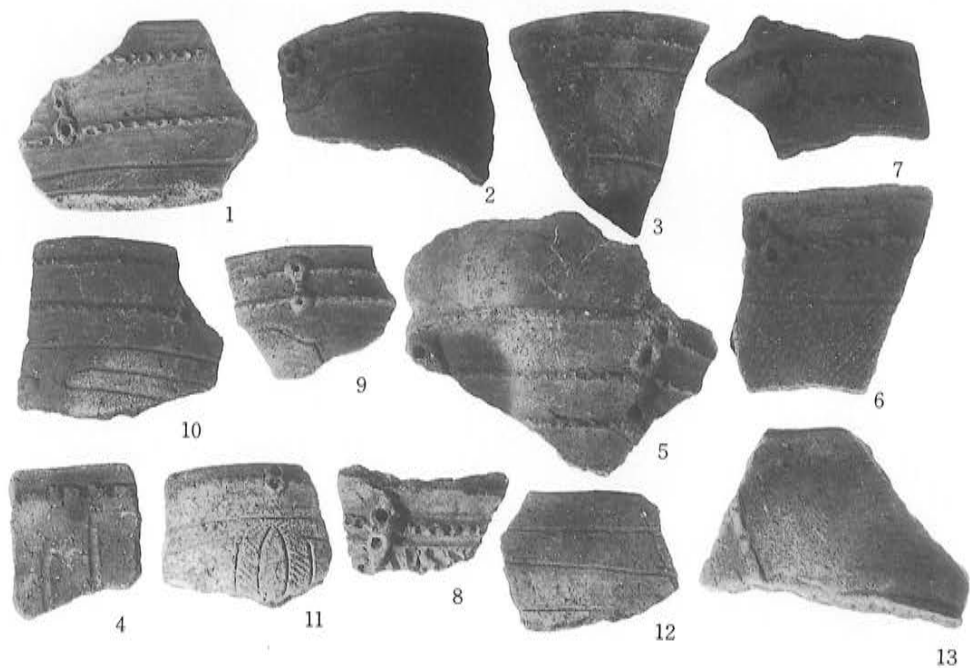
6t-第2群土器(1)



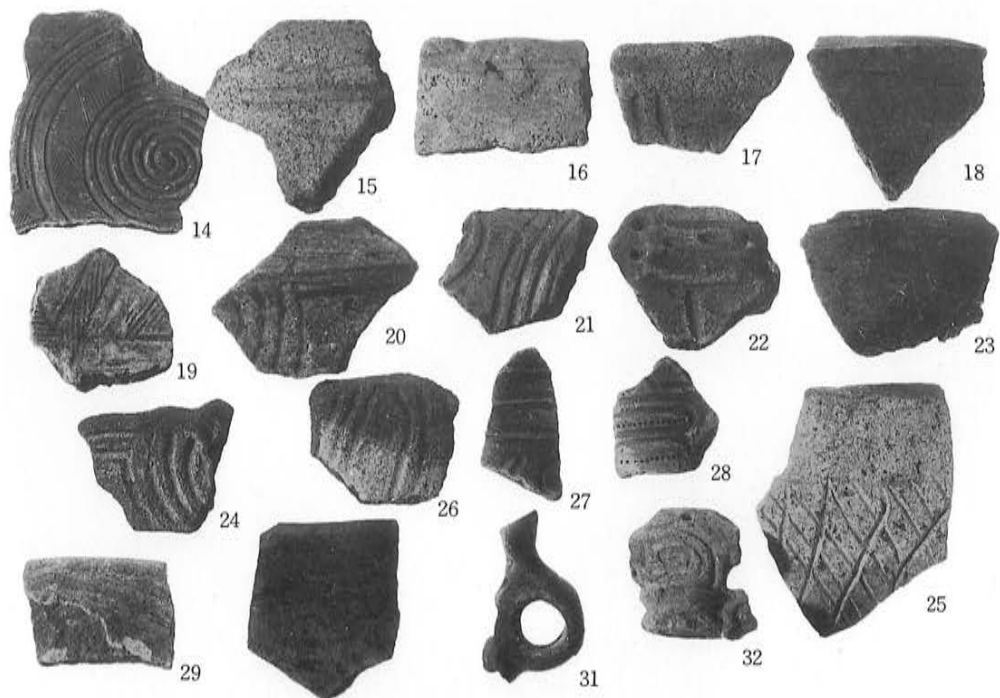
6t-第2群土器(2)



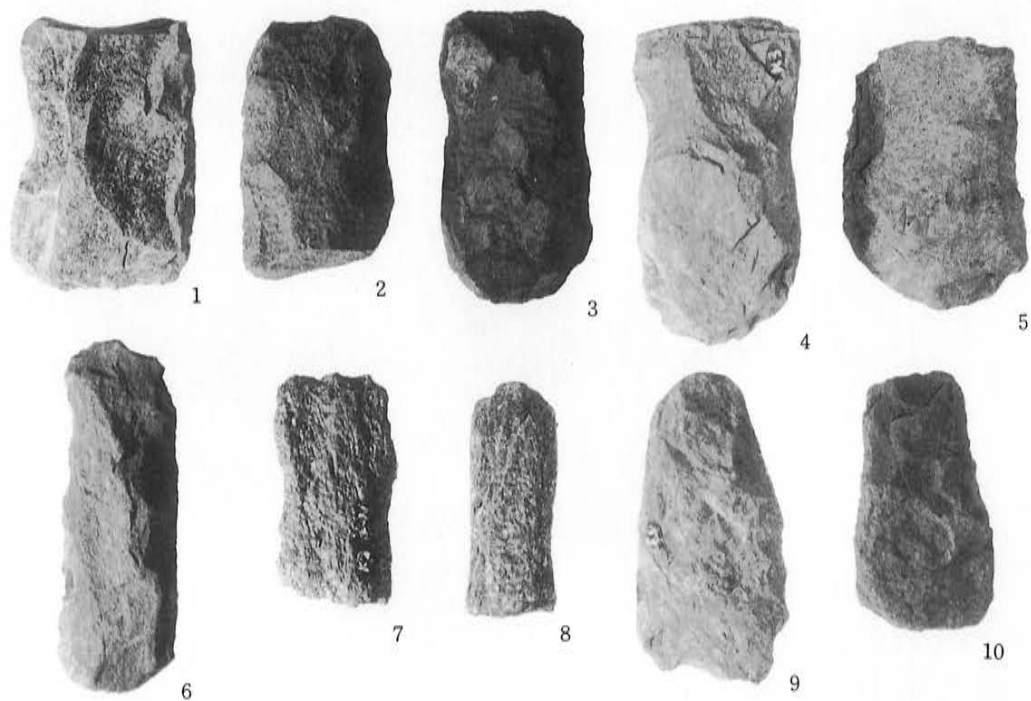
6t-第3群土器



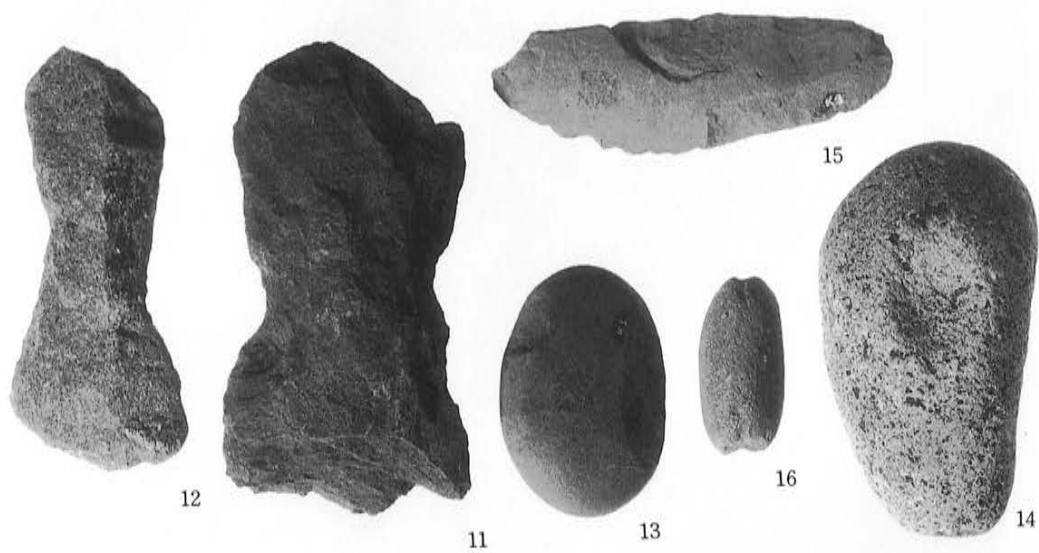
6t-第4群土器(1)



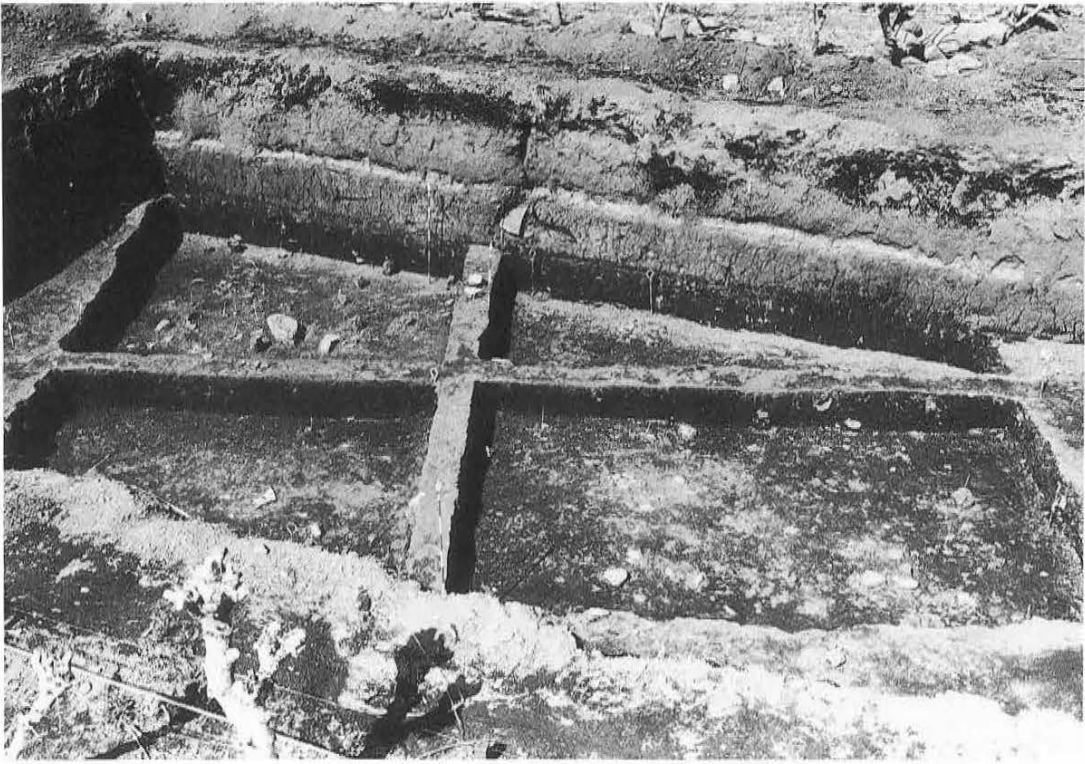
6t-第4群土器(2)



6t-石器(1)



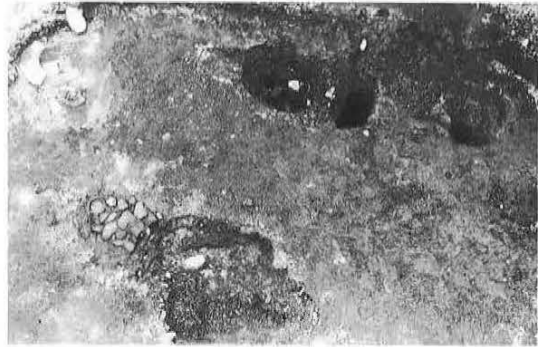
6t-石器(2)



6 t-10号住居跡遺物出土状況



同、覆土確認状況



同、南側部分



同、入口遺構



同、遺物出土状況



6t-10号住居跡完掘状况



1



2



3



4

同、出土遺物



6t-15号住居跡遺物出土状況



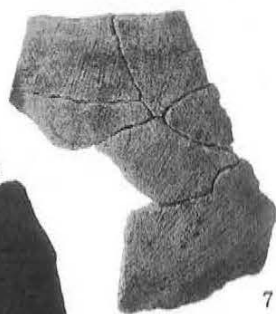
同、完掘状況



5



6

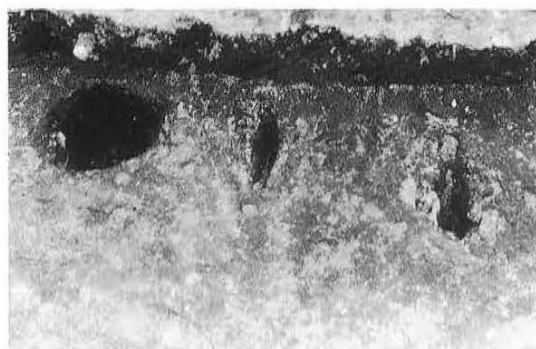


7

同、出土遺物



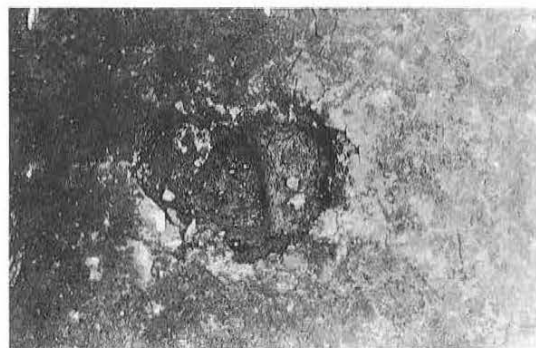
6t-8号住居跡遺物出土状況



同、入口遺構



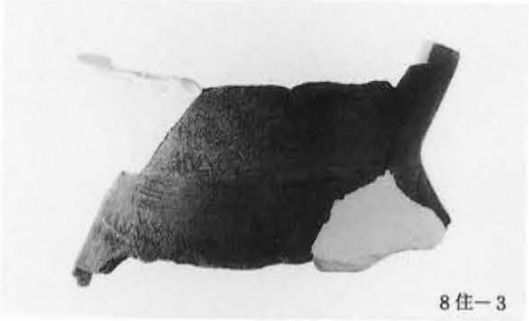
同、P1



同、P2



同、完掘状況

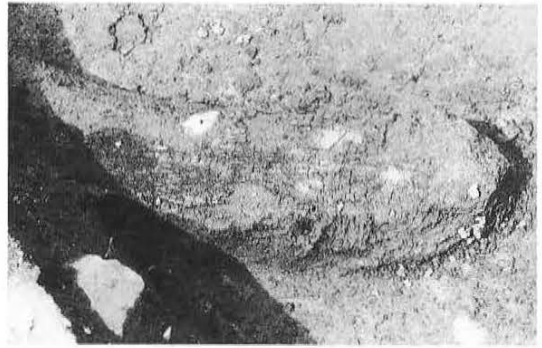




6t-3号・11号・13号住居跡遺物出土状況



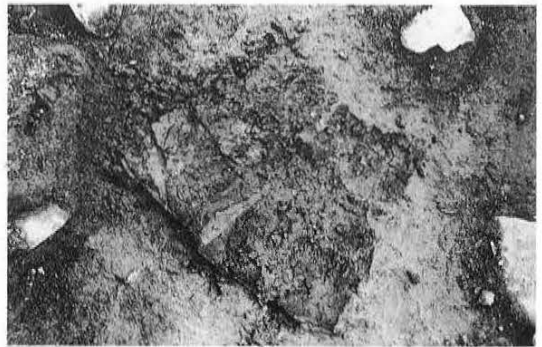
同 (土師杯)



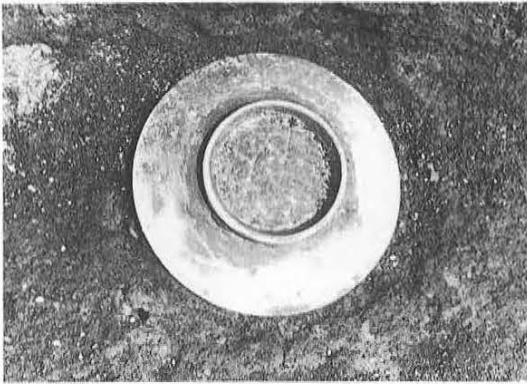
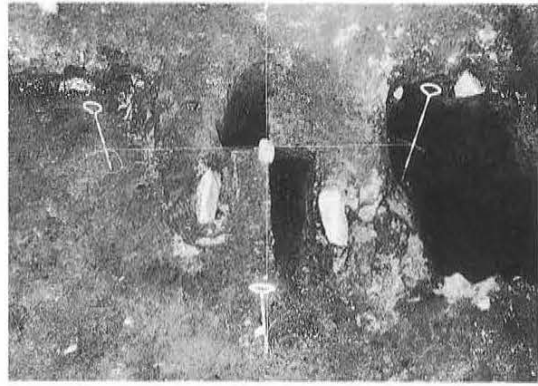
同 (炭化材)



同 (土師甑)



同 (土師甑下)



(左上) 6t-3号住居跡貯蔵穴内遺物

(上) 同、カマド

(左) 6t-11号住居跡遺物出土状況

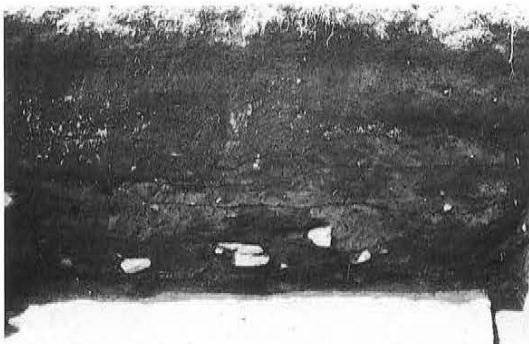


同、完掘状況





6t-2号住居跡遺物出土状況



同、セクション



同、カマド



2住-1



2住-2



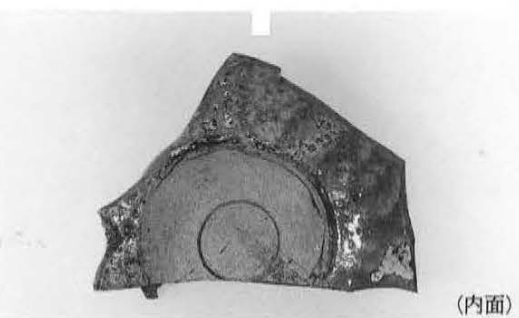
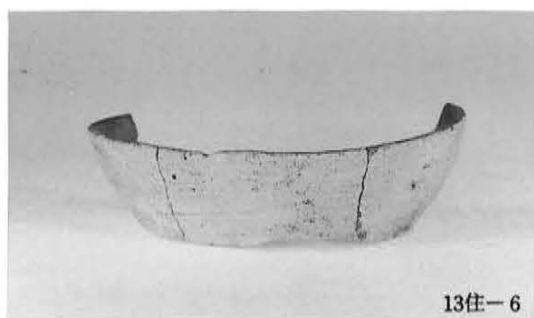
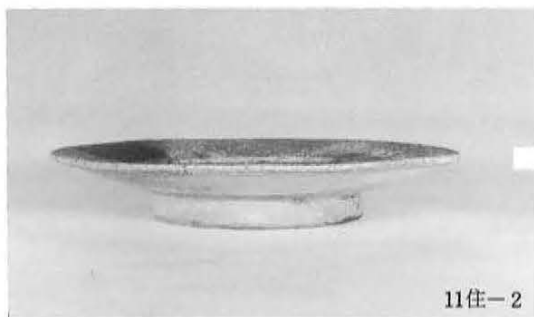
6t-6号住居跡遺物出土状況

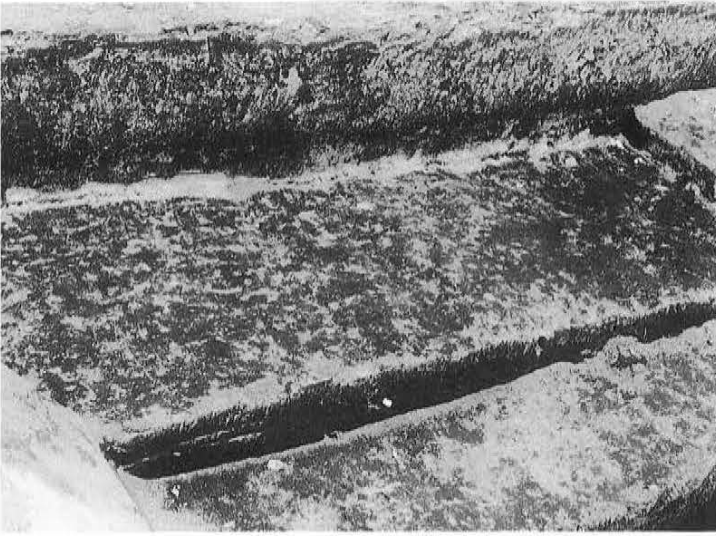


6t-6号・12号住居跡完掘状況



6t-7号住居跡遺物出土状況

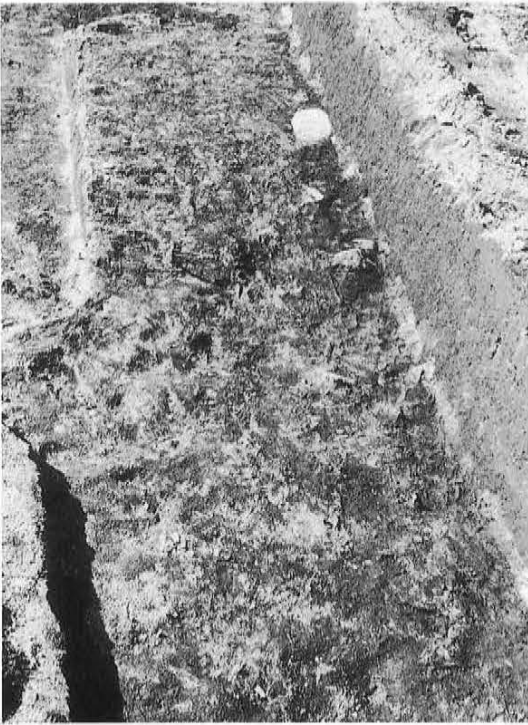




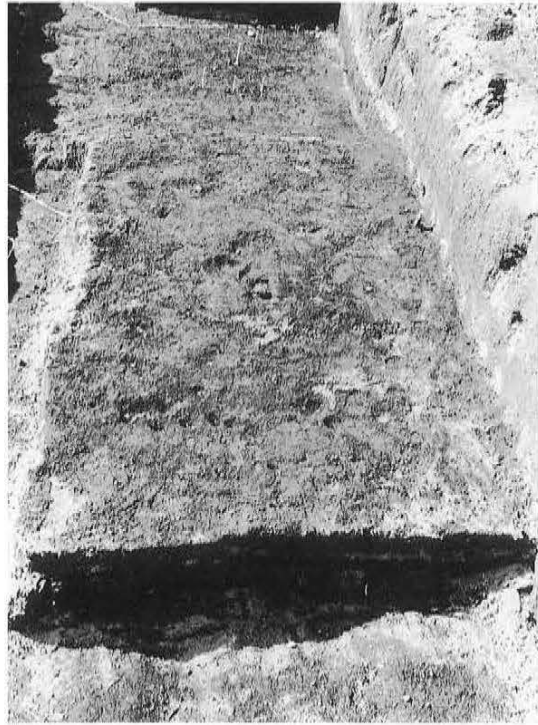
6t-1 畝状遺構 1 (東側)



同、出土遺物



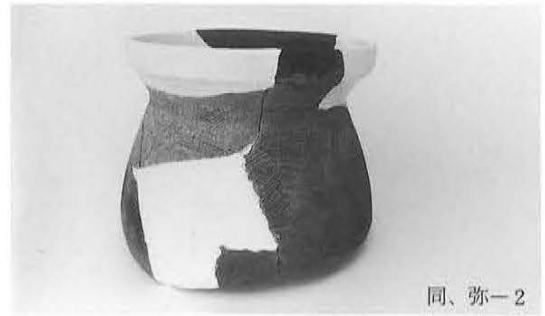
同上 (西側)



6t-1 畝状遺構 2



遺構外、弥-1



同、弥-2



同、弥-3



同、古-1



同、古-2



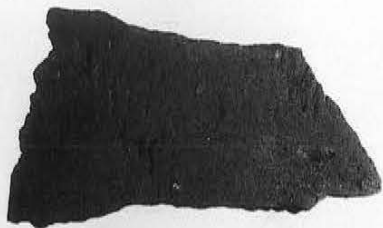
同、平-3



同、平-4



同、平-5



同、平-6 (外面)



同 (内面)

松井田町文化財調査報告書第6集

国衙遺跡群Ⅱ

—— 町道国衙・朝日線改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

発行日：平成4年3月31日

編集：松井田町教育委員会

社会教育課文化財保護係

発行：松井田町教育委員会

〒379-02 群馬県

碓氷郡松井田町大字新堀245

TEL 0273 (93) 1111

印刷：碓氷印刷株式会社